

すまいるん

季刊

1996

冬号

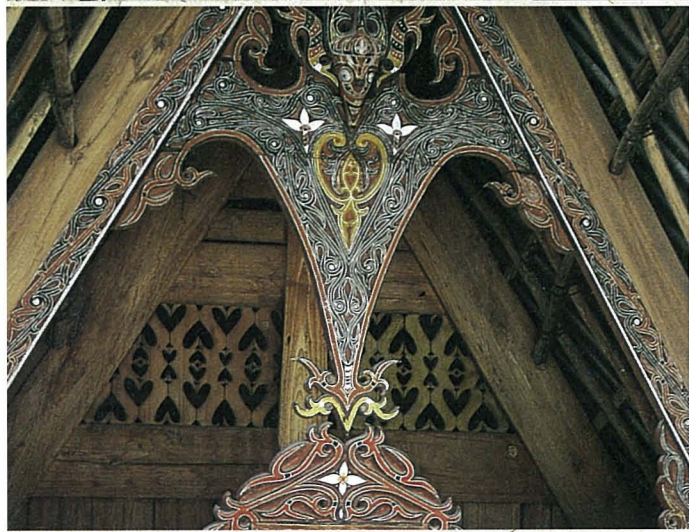
(通巻第37号) 一九九六年一月一六日発行◎

特集Ⅱ 都市コミュニティの再認識

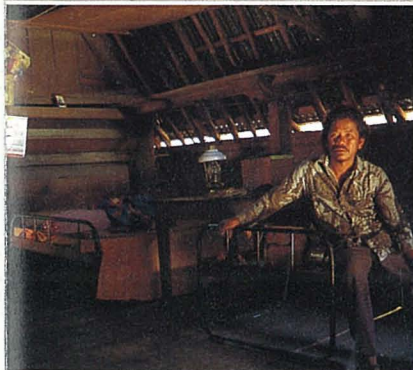
目次

- 〈風紋〉トハ湖の船型住居北ノトラのトバタツタ族 藤井明……………2
- 〈焦点〉都市コミュニティの再認識阪神・淡路大震災を踏まえて、都市コミュニティを再考する 浦野正樹……………4
- 対談「社会学・建築学の立場から都市コミュニティを語る」……6
浦野正樹早稲田大学教授・延藤安弘名城大学教授
- 〈災害とコミュニティ〉再考——阪神・淡路大震災から考える 横田尚俊……………21
- コミュニティ復興ビジョンと復興都市計画事業 大矢根淳……………26
- 生活の場と都市コミュニティ 橋弘志・鈴木毅・篠崎正彦……………31
- 〈すまいるのテクノロジ〉住環境整備とコミュニティの組織化 薬袋奈美子……………38
- 〈私のすまいるん〉江戸・明治の庶民住宅 小木新造……………42
- コレクティブハウジング—家族スタイルとコミュニティ 小谷部育子……………46
- 96住総研シンポジウム〈今、住宅を設計するとはどういうことか〉へ向けて
〈論文〉日本の現代住宅設計に何が見えるか 植田実……………51
- 〈図書室だより〉基本図書とは? 伊藤毅……………69
- 〈すまいる再発見〉本野邸/本野精吾/一九二四 石崎順一……………74
- ひろば……………70 次号予告・お知らせ……………72 編集後記……………76

広場に面し整然と表面を並べる北ノトラ、トハ湖の住居。天上、地上、地下のコスモロジーを表現するその形は、船を模しているように見える——「風紋」より。



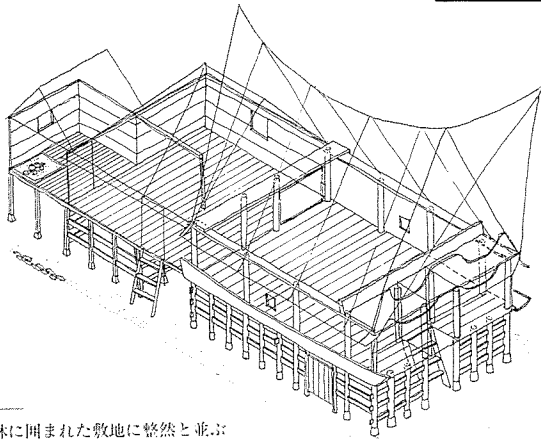
風紋



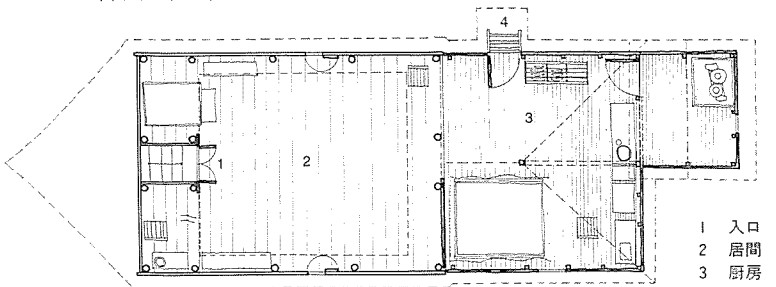
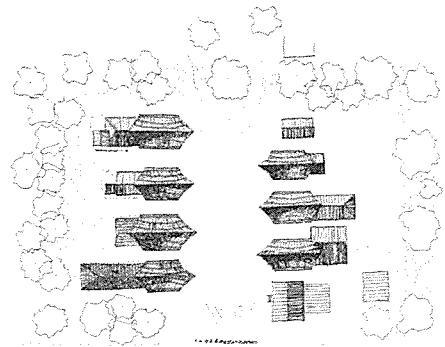
トバ湖の船型住居

—北スマトラのトバ・バタック族

文と写真 藤井 明



右頁写真—
上／屋敷林に囲まれた敷地に整然と並ぶ住棟と穀倉。
中段及び下／高床の住棟の内部。



平面図 1/120



下屋として付け加えられた形の厨房。

北スマトラのトバ湖は、東南アジア最大の湖で、大きさは琵琶湖の約二倍である。この湖に浮かぶサモシル島はバタック族の発祥の地と伝えられ、彼らの聖地になっている。島の住民、トバ・バタック族は氏族単位に集落をつくる。敷地の周囲は防衛のため土塁や竹林で囲まれ、その一隅に宇宙の象徴としてのワリンギン（ベンガル菩提樹）の大木が聳えている。屋敷林の内部は、矩形の広場を挟み、住棟と穀倉とが軒を突き合わせるように対向している。

建物は全て高床形式である。床組は束柱と根がらみ貫が格子状に組み合わせられ、水牛や豚の囲いを兼ねている。前面妻側の中央部分に組み込まれた階段から、床下をくぐり抜けるようにして室内に入る。主屋の内部は基本的に一室で、居間兼寝室になり、後ろ側に厨房が下屋としてある。母屋と下屋とは構造的に切れていて、別棟になっている。下屋には梯子段の勝手口が付けられている。軸組は厚板で箱のように造られ、構造的に船を模したものになっている。小屋組は垂木に竹が使用され、船の軸先に似た独特な反りを形づくっている。屋根はかつては砂糖椰子の黒い繊維で葺かれていたが、今は次第にトタン板に替わりつつある。大きな屋根裏は天上界を、床上は人界、床下は地下界を象徴し、住居そのものが三元論のコスモロジーを表象している。

広場側に大きく突き出したけらばや妻壁には、トバ湖の水藻をモチーフとする極彩色の細かな彫刻が施され、側壁の桁の先端部には獅子面が彫り込まれている。広場は日常的にも儀式にも使用される。広場側の妻の中二階にベランダが設けられているが、ここには祭儀の際に笛や太鼓を奏する楽人が並ぶ。

反り屋根を持つ棟々が広場を介して整然と並列する様は、湖畔の棧橋に舫う小船の船団の趣がある。彼等もまた、海の民の出自であろう。

（ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所助教授）

都市コミュニティの再認識

浦野正樹

——阪神・淡路大震災を踏まえて、都市コミュニティを再考する

阪神・淡路大震災は、戦後の自然災害史上では最も大きな被害をもたらした。その後の復旧・復興過程を含めた生活への影響は実に甚大でかつ非常に深いものであった。震災から一年たつ現在も、被災地では復旧・復興への厳しく長い闘いが繰り返されている。災害の復旧・復興過程は、一からの生活設計の組み直しや地域生活の将来像の再創造を含むだけに、被災地から離れた人びとが考える以上に、継続的で息の長い試行が繰り返されることになる。その意味では、奥尻の津波災害や雲仙普賢岳災害の復旧・復興も、過去の出来事としてではなく現在進行中の出来事として注意深く見つめていく必要がある。

ところで、阪神・淡路大震災は、結果として、高齢者等の災害弱者、比較的社会階層の低い人たちに集中的な被害を与えたといわれている。高齢者の問題は、とくに、すべての人びとがいつかは経験することがらである。高齢者が安心して住めるとはどういうことか？ 今回の震災は、都市生活のあり方を含めて、多くの課題と問題提起を投げかけているように思われる。震災からの復旧・復興への試みとその支援は、安心して住めることの基準と条件をあらためて問い直す営為でもある。そうした文脈のなかで、都市コミュニティの実態とその果たす役割について鋭い問いが投げかけられている。

阪神・淡路大震災の災害直後の救出・救助から避難、救援、応急復旧、復興への体験は、いかに地域のなかでの住民どうしの結束が災害時のそれぞれの局面で重要な役割を果たすかをあらためて映し出した。今回の震災の場合、とくに都市部での被害が大きく、地域の絆が日頃から弱いために災害時にさ

さまざまな弱点をさらけ出したという事実が目に見えただけに、よいそのコントラストが鮮明になった。

本特集は、こうした阪神・淡路大震災の体験を踏まえたうえで、さらに高齢化や情報化によるコミュニティのあり方の変化を見据えながら、現代の都市コミュニティを再認識するとともに、これからの都市コミュニティのあり方を探ろうとするものである。

被災直後からの社会問題の展開とコミュニティの活動

阪神・淡路大震災は災害直後からさまざまな社会問題を生み出したが、社会問題の質の変化は急速で次々と波及や連鎖を生み出していった。ここでは、阪神・淡路大震災の社会的問題の展開を、「災害直後→救出・救助期」、「緊急避難→避難救援期」、「応急復旧・復興期」の三つの時期区分に分けてみている。異なる次元の社会的問題群がどのように関連しあいながら災害時に顕在化していくかは、地域特性、他のさまざまな社会的要因、レベルの異なる政策変数群によって左右される。

親族・近隣関係が濃密な農村型の地域社会では、たとえば、津名郡北淡町富島集落の事例のように、震源地に近く被害が甚大で全半壊の建物が八割に達していたにもかかわらず、行方不明者の発見が地震当日の夕方には終了している。富島集落の場合、近隣どうしでの救出活動がまず迅速に行なわれ、それに加えて消防団の活躍が目立った。ひとつの決め手は、近隣や親族の誰かが潰れた家の下に埋まっている人の寝ていた位置を推測でき、その情報を救出活動を行なう消防団等の隊員に確実に伝え活用できたことだといわれている。

こうした例は、農村型の地域社会のみならず、都市の下町的な住宅街においても、神戸市真野地区などで同様に報告されている。真野地区の場合には、対談（4頁、20頁参照）において詳しく紹介されているように、日頃のつきあいの濃密さに加えて、自治会を中心とした住民の地域活動の実績と組織力が、高齢者の倒壊家屋からの救出と火災延焼のくい止め、被害の縮小につながったのである。また、災害後いちはやく、組織力を生かして、救援物資の組班ルートでの配布や地域のお年寄りの身の安全の確認などを実施し、安心して避難時の生活を送ることのできるしくみをつくりあげていった。

こうした地域の絆や結束力が重要な役割を果たすのは、救出・救護や避難生活の時期ばかりではない。むしろ、都市においては、災害直後よりも長期にわたる復旧・復興の過程においてのほうが、十分力を発揮できるのである。

災害直後は、緊急避難のために隣近所がばらばらに近くの避難所に逃げていき、町内会・自治会の役員も高齢で組織的な動きがほとんどとれなかった地域でも、がれきの処理やその後のまちづくりといった課題では徐々に落ちつきを取り戻して組織的活動が可能になったり、地域を支える新たな人的核が形成されて活動を開始する事例が少なからずある。

復興まちづくりへの取り組みという点では、自治会やまちづくり協議会などの自治活動が災害前から活発で実質的な内容をもっているところほど、スムーズな対応がとれる可能性が増す。対談の中で紹介している長田区の久二塚地区^{フカ}まちづくり協議会は、そうした事例のひとつの典型である。

災害後の生活再建やまちの復興にあたっては、住民が単独では解決がつけられず、地域住民のさまざまな創意工夫と、共同化や組織力を駆使して初めて可能になることがらも少なくない。これからの復興とまちづくりを考えていく場合、被害の拡大の抑止や避難生活における安心の確保、復興への力強い取り組みといった点から地域の社会生活を見直し、安全で安心な生活を築いていく努力が欠かせない。

都市コミュニティ再考の視点は、同時に、社会生活のあり方や人間関係の問い直しを含んでいる。ポランテア元年という言い回しも、こうした文脈

での期待感のあらわれであると読み取れよう。

都市生活のあり方とコミュニティの将来

都市コミュニティといったとき、従来は、自分と生き方を共にし、同一の趣味や考え方をもつ人びととの同志的な結合という意味でのコミュニティに大きな比重がおかれていたように思う。これが、いわば、過去の地縁や血縁が重層化した排他的な農村型地域社会へのアンチテーゼとして掲げられていたといえよう。前者は選択的で自主的な点で後者のものとは異なっており、そこに積極性を見いだしていたのである。

そのなかで、阪神・淡路大震災が提起した問題というのは、まさに地域から拡散し異質な存在との接触を絶つ、いき過ぎた都市コミュニティのとらえ方に対して、ある程度ブレーキをかける、あるいは再考を迫るという側面をもっていたことは事実であろう。人間がまさに社会的存在であること——すなわち、社会のメカニズムそのものが多様な存在を生み出すだけでなく、歴史・文化・民族・環境の違いが、必ずしも収れんし尽くさぬ認識の違いや文化の多様性を生み出し続けており、そのなかで多様な関係を築きあげることを通して社会生活が営まれているということ——という人間生活の原点が突きつけられたのである。

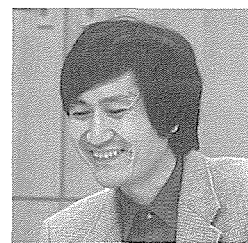
住民の意識、生活様式は、高度成長を経て大きく変わっており、伝統的なスタイルの地域社会——農村社会や村落、あるいは都市部の自営業層主体の町内会のイメージ——では、閉ざされた地域社会というイメージが強く、なかなか現在の住民の生活様式や意識の変化への対応が難しい。それでは、今後、どういったコミュニティに向けて旅立ちをしていくか。

地域で生活していくうえでの問題を発見し、それを住民個別の問題としてではなく、地域共通の課題、さらには市民社会共通の課題、として解決していくための合意の源泉を創り出していく過程——いわば、正統性が生み出される源泉——をいかに豊かに構想し得るかを含めて、現代の都市コミュニティの課題を、この特集を通じて読みとっていただければ幸いである。

浦野 正樹

うらの・まさき / 早稲田大学文学部社会学専修 教授

東海大地震の警鐘に伴い、地域に自主防災組織の必要性がいわれました。その活動の活性化の研究が、私が災害研究に入ったきっかけです。その後、都市システムの脆弱性の問題などに取り組みながら、「防災まちづくり」の活動にいきました。自主防災組織は、いままでの社会システムを前提として、その枠のなかで緊急対策を行なうものと位置づけられています。それに対して、防災まちづくりは、自分たちの住んでいる町の環境とか、自分たちの町がもっているいろいろな不安要素を洗い出し、それに対し、土地利用、構造的な面から地域をもっと住みやすく、災害に強い町にしていこうという活動です。そういう活動とかかわるなかで、もっと広い意味で生活や安全を考える視点が必要だと考えながら、雲仙などの災害の復旧・復興過程の研究に入っていました。そのさなかに阪神大震災が起こったのです。現在は、神戸の地域の住民と、いまは何をすべきなのか、町にとって何が必要なのか、ということと話し合いながら私たちの調査を進めていくというスタイルをとって、阪神大震災の調査を進めています。私の現在の研究の中心は、災害復旧・復興過程の中期にわたる住民への影響についてです。



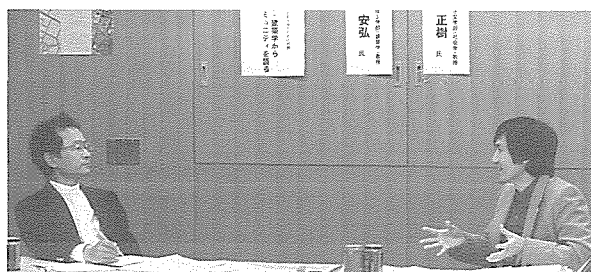
特集 ● 都市コミュニティの再認識

対談

社会学・建築学の立場から 都市コミュニティを語る

この記事は、一〇月二六日に開催したミニシンポジウムをまとめたものです。本文中の写真は、当日、延藤安弘先生が映写されたスライドから抜粋したものです。

文責＝編集部



神戸市長田区の真野地区は、「住民主体のまちづくりのメッカ」といわれるように、参加のまちづくりのいろいろな経験を積み上げてきている地区です。私にとっては参加のまちづくりの学舎みたいなところで、昭和五〇年ころからここに関わってきました。震災後三日目の真夜中に、ようやく真野の住民の一人に電話がつながりました。それまで真野地区では、一人暮らし老人給食サービスとか入浴サービスをやっていましたが、そのときにその人が言うには、「あれはまだほんの部分的なまちづくりですわ。これから本物のまちづくりをやらんといけません。五千数百人のおなかをみんなあたたためてやらないといかん。全体をお世話できるような本物のまちづくりによりやく向かえるチャンスが生まれました。これからがまちづくりの本番です」と。あんなに絶望的な状況に追いやられながら、住民が大震災のあとにすぐさまそんな言葉を投げかけてくるのを聞いて、これはまたすごいことを言う住民だなと思いました。その後、できるだけのことを支援しようと機会あることに真野に出向き、真野のまちづくりから学んだわれわれ専門家やほかの地域の住民たちと一緒に、全国的に支援の機構を立ち上げ、いろいろな活動をしてきております。

延藤 安弘

えんどう・やすひろ / 名城大学理工学部建築学科 教授



阪神大震災の特徴と都市コミュニティ問題との接点

阪神大震災のもたらしたもの

浦野 本日のテーマは阪神大震災と都市コミュニティ問題との接点ということですが、延藤先生は今回の震災をどうとらえておられますか。

延藤 きょうの主題と真つ向から切り結ぶポイントは、コミュニティの存在価値が問われたということですね。「参加のまちづくりは日ごろのお遊びじゃないか」という声が世間的にはあるようです。しかしあの非常事態に積極果敢に立ち向かって危機を乗り越えていくアクティブな動きをみせた地域で共通しているのは、やはり日常的に人間関係の網目を強くしている参加のまちづくりの体験の蓄積だと思えます。意図的に参加の

まちづくりと言わなくても、平生、人と人の関係が色濃い、人と人の間に住み良さがあるという、そういう価値観をもっている住民が多い地域では、危機を乗り越える力が発揮されたのではないかとということです。防災という点では、物としての安全システムを立ち上げることは重要ですが、もうひとつ、人と人の間に「安心」という目に見えない社会的仕組みが成立していることも大切です。物的安全システムに加えてソフトな人間どうしの安心システムの二つが車の両輪のようになつてその地域に存在しているときに、危機は乗り越えられるのではないかと。

今回の震災は、未来に向けての都市づくりとかコミュニティづくり、非常に本質的なメッセージを与えてくれたのではないかとというのが大きな印象です。

浦野 私自身は今回の阪神大震災は、災害弱者——社会のなかでも比較的弱い層、高齢な層を直撃したとい

う点に最大の特徴があると思っています。その社会がもっているシステム全体の最も脆弱な部分に災害はあらわれるものだと、改めて思い知らされました。

そういういちばん弱い環をどういうかたちで社会全体としてサポートできるのだろうか。そういう人たちを救うレベルをアップしていくことが、市民社会全体のポテンシャルだと思うのですが、そういう問題がここであらわになつたという気がします。

戦後の災害をみますと、自然災害で社会システムの一部がやられ、ライフラインが壊れてみんなが困つたというぐらゐのレベルで、そのなかで災害弱者はかなりしんどい目にあつていたとは思いますが、今まではあまり顕在化しないで済んでいました。

今回の場合には、災害の被害から復旧・復興過程に至る全過程で、そういう問題があらわになりました。

そういう意味では、社会全体のシステム、市民社会としての力量が問われたという感じをもっているんです。

延藤 市民社会のシステムの力量という点では、社会的弱者を痛撃した災害に対して、すぐさまそれをリカバーしていくときに、行政は確かに社会的弱者に対する手だてをそれなりに打とうとしたけれど、従来の行政がもっている社会システムでは、ああいう危機的状況にあつては、公平性とか平等性（行政がもっている論理としては正当なだけども）が十分に作動しえない。社会的弱者を救済して、安全をすぐさま届けるというのは地域の力であつて、生活者のネットワークです。

公平性や平等性という錦の御旗、どうもそういう近代的な考え方だけでは不十分であり、社会全体では目

が行き届かないようなことに対するサポート、かつ緊急時へのサポートが、実は社会的弱者には必要なのはなにか。目に見えない仕組みづくりは、まさに社会的システムを補う地域の暮らしの仕組みというか、暮らしのネットワークというか、あるいは暮らしのなかで時おり発揮されるようなドラマティックな活動とか、そういうものに支えられていくことが大事なんではないか。そういう意味で、それを支え、それを促し、それを引っ張り上げていく活動が、今回、ボランティアたちの活動によつて火がついたところがあると思います。

被災直後からの時系列で見る社会問題の展開

浦野 いろいろな問題がマスコミによつて取り上げられました。災害発生後一日、三日、一週間、一カ月という時系列でマスコミにおける論点がどんどん変わり、その間の脈絡が読み取れないという感じをもちました。

そのへんを整理するために、時期区分をしてみました。それぞれの時期においてコミュニティがどう働いたのか、地域のなかでの人びとの生活の共同性、つながりがどう災害時に機能を果たしたのか、そのあたりをみてみたいと思います。

災害後については簡単に、「被災直後」救出・救助期、「避難救援期」、「応急復旧・復興期」と時期区分できると思います。

「被災直後」救出・救助期は、まさに生命の安全確保が要求水準です。ともかく瓦礫の下に埋まつている人たちを救わなければいけない。当日夜になつても救い出せないという事態がけっこうあつたと思います。もちろん、コミュニティあるいは地域社会がかなりし

つかりしていて、日常的な人間関係がよく構成されているところは、これをうまくカバーできたという話もあるのですが、それはあとで紹介します。

次に「避難救援期」という段階。当初は食・住・衣の避難生活での生命維持基準の確保が重要なポイントになったと思うんです。

このとき、緊密なネットワークをもって食事を供与することが、あるコミュニティではできましたが、別のコミュニティではその段階で弱肉強食の状況が出現しました。

その後、次第に要求水準が上がり、避難生活継続の基本条件の確保というかたちで、「温かい食事がなるとかならないか」、「三度三度の食事がきちんと確保できないだろうか」、「飲料水だけではなく、生活用水が確保できないだろうか」、という話が徐々に出てきます。

この時期になると、生活不安が高まってきます。生命の危険はともかく回避したけれど、これからどうしたらいいのか。で、心のケア、精神医学的な意味でのケアの必要性の話が出てきます。

それに続いて「応急復旧期」の段階になると、家族単位でのプライベートがかりうじて確保できる空間、家族生活を確保するという目標設定がこの時期にはありました。とりわけ仮設住宅の供給が、この段階での主要な議論になってきます。

「復興期」。これは個別領域での生活再建を設計していく過程であると考えることができそうです。それに対応して、行政の施策メニューもいろいろなかたちで検討され、種々の住民団体からの要求を受けて、それに対応するかたちでゆっくりではあるが少しずつ整備されていくというプロセスがありました。

ただ、行政施策メニューに沿って、就労とか雇用確保、住宅確保、福祉サービスの問題等々がバラバラに提起されて、住民のほうはそれをトータルに考えて生活再建に向けて歩いていくことが、なかなかむずかしかったという気もします。

おそらくこういう段階でも、地域社会、コミュニティが、個々の高齢者の生活再建に向けて、サポートシステムをつくっていったり、まちづくりを考えるうえでも、行政から提示されるメニューに対して対案に近いようなものを提示していくという、そんなプロセスがあったと思います。

だいたいこんなかたちで時期区分することができそうです。さてそれで、「救出・救助期」、「避難救援期」あたりでは、コミュニティはいったいどう活動できたのでしょうか。

淡路島の北淡町富島地区では、日常的に高齢者がどこで寝ているのかを、近所の人たちも親戚も知っている。しかも、伝統的な地域社会に近い地縁、血縁関係が重層的にあり、そういうネットワークがあるので、消防団のなかにも地縁、血縁のある人がいて、高齢者が埋まっていたとしても、ここに絶対寝ているはずだと——タンスがこれだけ飛んで、家がこういうふうになっているから、おそらく階段がこうなっていて、この周辺が寝室の崩れた跡だろう——というところまで特定したかたちで救助に行く。隣り近所の人々が片っ端からそうやって救い出したのだそうです。

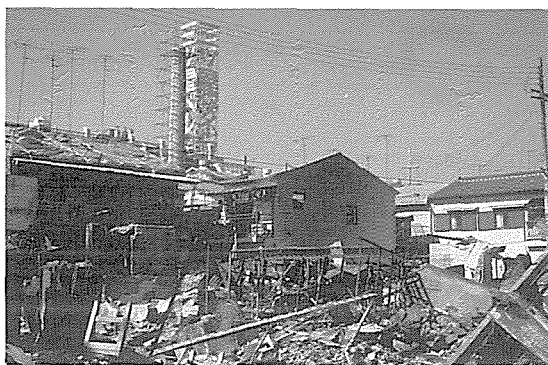
結果として、当日のうちに全部の高齢者（もちろん倒壊家屋の下敷きになって亡くなられた人たちはいるのですが）を救出できた。行方不明者が当日の段階でゼロになりました。

延藤 神戸市長田区の真野地区も老朽木造家屋が非常

に多い地域ですから、かなり倒壊して、数十名が下敷きになりましたが、二日、三日がかりで救出活動をし、死者をひと桁にとどめることができました。

伝統的、下町のコミュニティだけではなく、躯体が傾いてひどかった阪神間のマンションなんかでも、全員外に避難して点呼をし、玄関から逃げ出せなかった人を住戸のバルコニーの隔て板を破って救出しています。マンションという、一見切れ切れだと思える人間関係のなかでも、目にみえないネットワーク、人びとの関係が日常的に育っていたことが危機を乗り越えさせたという現場もあります。

浦野 しかし、同時に厳しい状況もあったわけですね。瓦礫の下で救いを求める声を出していれば、救出に駆けつけることができるわけですが、そうでなければ素通りして、ここにいるとわかっていると、もしも救出できなかった事例はけっこうあったと聞きました。そ



阪神大震災で広い範囲が壊失した神戸市長田区の中で、40ヘクタールほどの真野地区は、ほかの区域に比べ比較的、被災は軽くと済んだ。なんでこんなところで火がくい止められたのだろうかと思ふほど、ベラベラの本質アパートが残っているが、それは、背後にある企業が消火用水をわけてくれ、そして住民たちが絶えざるバケツリレーを続けることによって、大災害となるのを防ぎたのだった。

うすると、日常的な人間関係は、救出・救助という局面では決定的に生死の差を分けるとい気がしてならないんですが。

延藤 火災発生に対して、長田区は全焼地区が相当広がりましたが、同じような物的性状をもつにもかかわらず、真野では四十数棟の住宅と工場焼失という、比較的小規模な被害で食い止めました。

住民のそのときの活動ぶりを聞いてみると、火が出たらみんながパツと出て、すぐバケツリレーをしたけれど、地元の水はすぐなくなりました。で、ちょっと離れたところにある「三ツ星ベルトの水タンクからもろてこい」とだれかが指示を出した。企業もパツと対応してくれて、水を出してくれたが、ホースは途中までの長さしかない。そこで、道行く人に次から次へと、「バケツや、バケツがあつたらもつてこい！」といって、六時間ぐらいバケツリレーをやったんです。手はパンパンにはれる、指がちぎれるぐらいのときによくやく火が小さくなって、火が消えかかろうとしたときに消防自動車が出てきたそうです。そういう危機的な状況のなかで、住民の内なる力が結び合わされて危機を突破することができたわけです。まさに日常の人と人のつながりが危機を救うのだなということ痛切に現わしていると思います。

浦野 そうですね。しかし、北淡町の富島の事例を聞いて思ったことがあるんです。お互いに寝る場所まで知り合っているほどの関係がまだ都市に存在していると聞いたら、若者たちはそれに対して逆に危機感を感じるのではないかと。そういう社会はこわいと思うのではないかと。それは高齢者にはやさしい社会になります。しかし同時に、プライバシーが確保できない社会かもしれない。都市コミュニティという

限り、これはなかなか期待できないのではないかと。

都市の防災とか災害対策の問題を考えると、そういうコミュニティさえあればできるかというところ、そうではなくて、何か別の要素と絡んだかたちでコミュニティの強さが発揮できないと、うまく機能しないのではないかと思いました。

延藤 プライバシーというのは、一つの薄い面じゃなく、かなりいろいろな層をなしていると思うんです。人には知られたくないことにズカズカ入り込んでくる侵害的なプライバシーと、お互いに見て見ぬふり、日ごろは知らんぷりしているけれど、いざというときには実は知っている、そういうすごく柔らかな、他者に対する温かさや配慮に満ちたプライバシーとがあると思うんです。

都市においても、そういう配慮に満ちたプライバシーを、若者も本来的には求めているのではないでしょう。人のなかにズカズカと入ってくる侵害的コミュニティは、やっぱり拒否されるべきものだと思います。浦野 そのへんが、都市コミュニティの将来像を考えると、その一つの論点となるのでしょうか。

「救出活動」に関して、資機材とか人手の圧倒的な不足がありました。消防や救助の到着の迅速性とか交通規制等の問題は、制度上、あるいはシステムの問題だと思っております。ジャッキ等の救出用の重機の確保、そして先ほどの三ツ星ベルトの消火用水をコミュニティとの関係のなかで活用できるようにしたいというようなこと、こういう日常的な対策はどのくらいやられているのでしょうか。

濃厚なコミュニティでなくても、そういうシステムをつくっておけば、ある程度カバーできる点もあります。寝ている場所までお互いに知らなくても、ここに



現代の都市コミュニティにおいては、住民とその地域の企業が開かれた関係を持つこと、そして地域が他の地域とも開かれた関係で結び合えることが大事なのではないだろうか。写真は震災後の四月の花祭り。天の橋立から駆けつけて伝統的な龍の演舞を披露してくれたり、和太鼓を演奏してくれたり、そういった他の地域社会との開放的な結びつきが、被災した住民をはげまし、地域に力を与えてくれる。

は高齢者がいるよということを、どこかの段階で、だれかが情報を的確に出せて、そして活動できるシステムになっていけば、プライバシーは守りながら、どこかの段階でコミュニティが作動することができるのではないかと思うんです。

もう一つ、消防とか自衛隊の人たちが救出作業をするわけですが、その人たちだけではダメですね。地域に熟知した人たちが連携して、災害時に対応していくことが必要です。そういう人たちをその地域のなかでどうやって育てるか。そういう連携のシステムができれば、プライバシーの問題も、違ったかたちで議論できると思います。

延藤 その地域社会における構成メンバーには、住民だけでなく、企業という重要な存在があります。往々にして企業は地域社会と無縁な存在であつたけれども、いざというときのギブ・アンド・テイクの関係、特に

企業が地域住民に安心感、安全性を届けられるという配慮、システムを整備しておくことが求められます。

どこの地域でも企業は存在するわけですから、企業と住民の風通しのよい関係づくりが日常的にどの程度行なわれているかは、非常に大事だと思います。

浦野 真野の場合には、長い公害反対運動の歴史が、住民と企業との連携、接点を見つけて出すきっかけになったわけですね。長い公害反対運動がなければ、そういう接点はなかった。

延藤 そのとおりです。初期は対立する関係で、公害を発する工場は出ていってもらうという追い出し運動をやりました。しかしある段階からは、工場と地域は互いに共存共栄するかという発想に変わっていききました。そうでなければ、飲食店等、地元の食いぶちがなくなるわけです。だから、「不用意に出ていってください」というのはおかしいんじゃないかと住民たちが言い出しました。

工業系と居住系が相寄り添う発想をするようになってしたのは昭和五〇年代になってからです。その工場があるおかげで生計を立てることができる小さい商店等があります。そういう地域の経済関係を支えるためには、企業と住民がどのように折り合うのか、その議論を相当深くやり、かつ、みんなの間で発想を高め合ってきたというところがありますから、今回の震災においても企業がいち早く住民に協力、供与を惜しまなかったわけです。

避難場所は小学校が主でしたが、企業の体育館とか、大空間も避難所に使われていました。そういう避難所の提供も、企業の協力関係の一つです。

避難生活とコミュニティの機能

浦野 真野では、避難場所はどんな様子でしたか。

延藤 小学校の教室、講堂、大企業の体育館が避難場所に使われました。それから公園に続々とテント村ができました。

でも、テント村と大空間の避難所とはものすごく違うんですね。大空間というのは、助けを待つ人びと、まさに社会的弱者の集団がまざまざとみえてくる。ところがテント村は、自律してなんとか切り抜けようという、ある意味ではポジティブな対応をしている。類型化してしまうのはよくないですが、寝たきりの方とか、サービスがくるのを待っている受身の人びとと比べて、テント村はなんと生き生きしていたことか。山にハイキングにきたんじゃないかというような……(笑)、アウトドアライフを楽しんでいる。

「きょうは広島からカキとアマダイを運ってきたから、今晚はこの場所に来て一緒に食べてね」とか、「この町内でいちばんおいしいものをつくってくれろコック長はこの人やさかい」といって、まさに一緒につくり、一緒に食べる。

コレクティブハウジングとか、北欧型の共に住み合う暮らしの場という提案が、日本でも最近、非常に議論されていますが、震災直後の現場は、共に食べ、共につくり、共に後片づけをするという、まさにコレクティブな住まい方、生き生きとした姿が幾つもみられたんです。

浦野 しかし逆の例もありますよね。避難所で給食サービスをするときにかなり争い合うような……。そのへんのところ、たとえば真野地区だと昔からの町内会、連合会等の組織が機能して、かなりシステムテイ

ックに、うまく配食サービスができたというふうに聞いているんですが……。

延藤 でも、二日目、三日目になってそういうシステムが立ち上がったわけで、初日は混乱状態でした。お年寄りが水が一杯ほしい、パンがほしいといって並んでいるのに、力の強いおっさんがおぼあちゃんのパンをとっていかるとか、弱肉強食的な、「悪い人間がなんでもこの町にこんなようけおるねん」というぐらい、どつき合い、言い合いが絶え間なかったんです。初日の極限状態ではそういうことが起こりました。

でも、二日目から小学校をセンターにして、二四町内、末端の住民にくまなく物が配られる配給システムが立ち上げられました。

浦野 すごくですね、あのシステムは。

延藤 尻池五丁目の町内会は、三年間、まちづくり会議に一回も出てこない働かない町内会長でした。その



地震の2〜3か月後に学校に戻ってきた子どもたちは、学校の正門で住民に水を配る仕事を手伝った。地域社会で困っている住民に子ども自らが手を差し伸べ、そのことに喜びを見出す。いわばコミュニティにおける子どもの教育のありよう、地域社会を学舎(まなびや)にするという環境学習の仕掛けみたいなものが、ここにもものぞいている。従来の教室に閉ざされた学校教育とは対照的に、子どもたちは生き生きと関わっている姿を見せている。

ときも放つたらかしていたから、末端の住民が町内会長に任せておけないと、自分たちで仕組みを立ち上げました。

当時、乾燥した食料品は届きましたが、生野菜がいちばん不足していたんですね。末端の住民にまで丁寧にキャベツを四分の一に切つてみんなに配る。そういうキメ細やかな仕組みができたんです。

浦野 町内会とかコミュニティが集合的に機能するための条件が、やっぱりあると思うんですね。

まず第一に、拠点がなければいけない。拠点到自治会長とか町内会長が恒常的にいること。シンボリックにそこにいるということが非常に大事です。もし町内会長、自治会長がいなければ、役員のだれかが代行できる、そういうシステムができていくかどうか。町内会長が年齢が高い人だとすれば、サブリーダー層が厚くなつていて、年代的に散らばつていて、そのコミュニティを支えていけるようなシステムができあがっていること。これがやっぱり必要だと思うんですね。もちろん、町内会長が陣取る場所が確保されていなければなりません。

次に、住民の消息が把握できること。これが決定的に重要です。住民がどこに行っているのか全然把握できないような状況だと、コミュニティは機能しません。もう一つは、行政とのパイプです。コミュニティが自前で食糧を確保できるケースもあると思うんですが、だいたいのコミュニティはそこまでいかなくて、行政と連携をとることでパイプをつくっていくことになりましたから、行政が安心して地域の代表者として認められるようなシステムが地域の側にはないといけません。

そして、町内会長、自治会長、コミュニティのリーダーにあたる人たちが、物的配給を公正に行なつてい

るという安心感が住民側にないと、そのシステムは機能しないでしょうね。

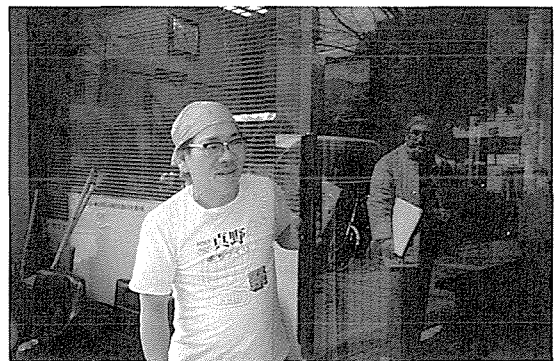
延藤 加えてもう一ついえば、命令指示系統がしっかりしているということ。それに加えて、真野では、在来的な発想をする町内会長さんが動かなかったり指示が出ないときに、末端の住民一人ひとりがすぐさま自由に関わり、この町内のお年寄りの面倒をみんなで見ようやないか、と動き出しました。

浦野 それはすごいですね。

延藤 末端の住民が自発的に動き出す。その自律性、まさに個が中心になつて全体を支えているという発想が現場で見えてきました。大震災は物を揺さぶり、物を壊したけれども、人のコミュニティ組織の古い体質も揺さぶつた。新しい仕組みを芽生えさせたのではないのでしょうか。

浦野 それはいろいろな地域で私も聞きました。町内会長が高齢で町内会がほとんど機能しなくなつてしまつた。それで、どこかの段階でこれではいけないというところで、住民の名簿を揃えていって、避難所にどういう住民がどれだけのかを把握しながら、徐々にコミュニティを立ち上げていったということですね。そのへんの地域による差が、今回の震災の場合でも、後々の復旧・復興に向けての歩みを相当左右したという気がします。

延藤 救出活動から、だんだん安心できる居場所づくりへと整備していくときに、体育館という広大な避難所で寝ている人びとは不安感がいっぱいなんです。そこで、少しでも安心できる居場所づくりをしようといういろいろな試みをしました。真野では、ある企業から二ミリの厚の分厚い段ボールをたくさん寄付してもらつて、世田谷でまちづくりをしている専門家がボラ



ンティアとして入つて、避難所で寝ている住民たちと家具づくりをしました。

きつちりした素材だし、専門家の知恵と技が支援されてつくられたものだから、できあがった家具ユニットは、「将来、ちゃんとした住まいができたときにも使えるええもんができた」と。住民たちはすくく力を得て、「自分らでこんなええもんができるんやわ。自分らでなんとかやつていかんといかんのやわ」という気持ちになつていったんです。

災害時の救済においては、従来、物量主義の発想がすくくあると思うんです。しかし物量主義では、困っている人の内なる気持ちとか、人間の内在する力を呼び覚ますことができませぬ。もちろん、必要な物は供給し、配給し、きちんと行き渡らせる必要があるし、そのことは大事だけれども、とにかく物、物、物だけで救出できると思うのは、ちよつとおかしい。

非常に苦しんでいる当事者たちが生きようとす
る力、意思がある限りは、その意思やパワーをふくらませて、
みずから自分たちの町を守り、自分たちの生活環境を
再構築していくという、いわば内発的な力が高まって
いくのを手助けするのが外なるボランティアたちの救
出、救援活動の大事なポイントであると思います。

物による支援と人の心を高めるといふソフトな支援
救済の思想。しんどいことも、意見が対立することも
住民がみずから乗り越えていく。必要な資金とかテク
ニックでは行政や専門家が支援する。それとともに、
住民の主体、内発的な力を高める、そこにポイントを
置いたボランティアの活動、支援の活動がすくく求め
られたのではないのでしょうか。

浦野 とくろが、都市コミュニティという枠をつく
たときに、そういうかたちの発想とノウハウが蓄積し
ていられない。そうすると、それはシステムの性能を高
めて技術力でカバーするしかないじゃないか、という
議論も当然出てくるわけです。

しかし、システムの性能を高めても、行政ではやり
きれない。住民のほうも、自分たちではやりきれない
。その空隙部分を事前の計画ではやっただけにしない
としようがないじゃないかということで、これまでの
災害対策は、なんとなくかたちはできてはいるが心が入
らない部分があったと思うんですね。

まさに「そのギャップをどうやって埋めるのか」が、
都市コミュニティ、安全性を考えていくうえでいちば
んのキーポイントになっている。その意味で、阪神大
震災は大きなテーマをもたらしたと思います。

だから、真野はやっぱり優等生だと。問題は、どう
いうかたちで優等生の裾野を広げていけるのかという
ことだと思っんです。

延藤 いや、優等生とは思わない。むしろ「はみ出
しっ子」ではないかと思うんです。要するに、行政の
システムからはみ出したんです。ある時期までは参加
のまちづくりのモデルとして神戸市は非常に活用して
いる面もあったけれど、ここ一〇年はほとんど援助し
なかった。善意に解釈すれば、真野のような参加のま
ちづくりを他地域に広めるといふ、そっちのほうに展
開していました。

真野は、最初は公害と闘い、しんどいことを二〇年、
三〇年続けながら、いわば自分から脱却する、行政と
いう網の目からこぼれた活動をやってきているという
意味では、決して優等生ではなくて、はみ出し者では
ないのでしょうか。はみ出し者のなかに、実は未来のま
ちづくりや都市行政のあり方をもう一度見直す視点が
提起されているのじゃないか、とぼくは思います。

地域からのアクションありき

浦野 中長期の復旧・復興期の問題になると、各地で
さまざまなまちづくり協議会等がつくられて、いろい
ろな活動が展開していると思うんです。

私が見てきた事例でも、たとえば長田区の、大正筋
のあたり、久二塚地区のまちづくり協議会では、昭和
六二、三年ぐらから街路整備事業をやって、地下鉄
の海岸線の計画がありましたから、それとの関連でま
ちづくり活動を進めてきました。

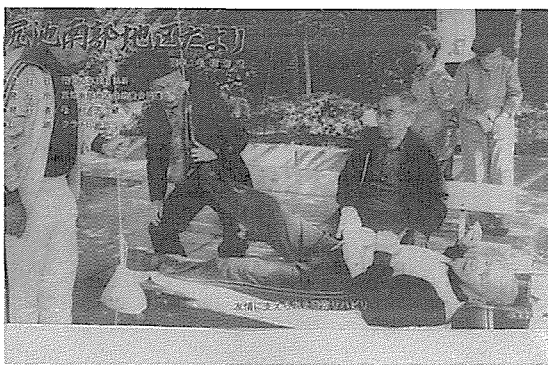
災害後どういふことをやったかという、緊急対応
に関してはあまり力を発揮しなかったんですが、一月
二五日には、中心メンバーが集まって、今後のまちづ
くりと生活再建に関しての会合をもって、まちづくり
協議会を再度立ち上げ、二月一〇日の時点では、手紙
を渡し、立札を立てて、住民のうち二五〇名ぐらいを

集めるということをやっているんです。

この地域がなぜそういうことができたかという、
徹底した情報作戦なんです。地域の住民の土地利用の
状況——地権者がだれで、借地人がだれで、住んでい
るのがだれであるのか——そういう情報をまちづくり
協議会できちんとストックしており、震災後、避難所
とかに散り散りバラバラになっていても、その人たち
がどこにいるのかきちんと把握していったんです。

ここは、パソルバザールの略で「パソール」とい
う仮設店舗の新しい商店街を最も早く立ち上げること
ができたまちづくり協議会なんですが、この借地契約
などもいち早くまちづくり協議会がやっているのです。

神戸市は、当初はそういうものに対してあまり積極
的ではなく、むしろまちづくり協議会のほうがどんど
ん先行して、うまく業者と話をつけて、仮設店舗の計
画を立ち上げ、同時に、それによって動かなければい



脳溢血で倒れたお年寄りが、退院後も寝たきりで外に出られない
でいた。仲間の老人たちが、「寝たきりではかわいそうや」と毎日
公園に引っ張ってきては、ロープと滑車を使って背空りハビテ
ーションを続けた結果、仲間へ肩を支えられて町を歩けるよう
になった。このように、高齢者たちの友愛に満ちた人と人との関係
によって、高齢者たちが安心して住める居心地のよい場所づく
りが行なわれてきている。(写真は「池尻南部地区だより」より)

けなくなつた人たちのための仮設住宅を地域のなかにつくりあげました。それが程度軌道にのつて、建設業者が入ったりしていく過程で、やっと神戸市から仮設店舗、仮設住宅に対する助成金を獲得できたのですが、それはかなりあとになってからなんです。

地域の人間関係とかまちづくりの伝統というのは、緊急事態への対応には必ずしも直接結びつかないとしても、中期、長期的な過程のなかでいろいろなかたちで作用していくのだなど、本当に学ばされました。すごいなと思いました。

延藤 いまのお話ですごく示唆的だと思うのは、いわば危機的状況のなかで、アクションありき、むしろ地域からのつぶやきと振る舞いありき。実は、そういうところからまちづくりが始まり、共同建て替えがうまくいくんですよ、ということを示している。日ごろ行政が発想するまちづくりというのは、制度ありき、事業ありきの発想なんです。

でも、住民というのは、どんな道具立てがあるかわからない。だから、危機にあつて、その危機をどうりカバーし、どう町を再創造していくかということについて、システムよりアクションを積み上げていって、そのアクションのなかであるシステムがみえてくるわけです。

日本のまちづくりの制度、手法はシステム先行型で、引出しを開けたら、よくこんなに混乱したものがあつたというほどたくさんある。

浦野 どうなつていいのか、わからないですよ。

延藤 もう蜘蛛の巣がごとき制度体系ですよ。でも住民、地権者たちは、そんなものは全然知らない。知らないがゆえに強い。無知による創造みたいなものがある。道具がいっぱいあつて、知りすぎると、それに枠

をはめられてしまつて、なかなか動きがとれません。

浦野 自分たち自身の力でやるのは、住民どうしの関係を調整したり、何が問題なのか、どういう地域像を相互に合意してつくりあげることができるのか、そのへんを煮詰めていくということなんです。でも、彼らも空手では立ち向かえないですね。

たとえばまちづくりとか、復旧・復興に向けての土地区画整理事業という話になると、行政でどのくらい許容できるのか、どういうメニューがあるのか、自分たちの状況に合わせどんな手法が可能なのか、ある程度アドバイスする人たちがいないと、自分たちで全部やるのはなかなかむずかしい。それに、地域像なんていう発想は住民の側からはなかなか出てきません。

延藤 権利関係の調整とか、対立している状況を解きほぐすのは、やっぱり地元の人びとであつて、どういふふうに物を立ち上げていくのか、お金は幾らかかつて、そのための自分の負担はどれくらいで、どういう制度を活用すれば公共からそれなりの助成がもらえるのか、そういう仕組みについての知識あるいは情報は、もちろん専門家や行政が側面的にアドバイスする必要があります。あると思うんです。

真野で印象的な出来事に出くわしました。震災後一カ月目ころ共同建て替えの話をやりました。ほんとにちっぽけな借家経営者が店子を呼んで、「全壊したから再建設したい。再建設にあつては、できた隣りの建物のオーナーと一緒に共同建て替えしたい。そのためには、まず店子さんたちの同意を得ないことには再建設ができない」と、小学校の教室に集まつて話し合いました。

地主と店子の対立はなかなか解きほぐせない一面もあるのですが、やりとりのなかで非常に感動したのは、

ある人が、「共同建て替え、まちづくりというのはありたいもんですな。こんなものがこの町のなかにあるとは知りませんでした」と。「共同建て替え」「まちづくり」という言葉を「ありがたいもんです」といつてくれる住民が末端におられるんです。

そこには、宮西悠司さんというよき専門家がいつてじつとみつめているわけです。その借家経営者も宮西さんに相談して、店子との集まりの場をもちえたわけです。そういう積極的な借家経営者だから、日ごろからまちづくりに参加していたかといつたら、一回も出たことがない。震災後はじめてそういう場に現われたのです。

地道な参加のまちづくりを二〇年、三〇年かけてやってきたことが、末端の住民にはある種の皮膚感覚でとらえられているのです。共同建て替えという専門用語とか、それを実現するための公的な支援制度をちゃんと勉強して、店子さんたちに資料を渡しているのです。そういう日常的な専門家と住民の間のコミュニケーション、濃密な輪というものがどれだけ形成されているのかということが大事なんだと感じます。

浦野 地域のなかには社会階層が違つたり、社会的なバックグラウンドの違う人がたくさん住んでいるんですよ。日常的には利害が対立するところまでいかないから、共同で生活していて、両方とも無関心でいられるけれども、災害なんかがあると、利害関係がもろに噴出して、階層別に考え方が違つて露呈する。問題への対処のしかたが違つてくることあります。

そのとき、共同建て替えによるまちづくりは、一つのシンボルとして、その両者をつなぐ手法を提示しているのだと思うんです。もしそういう手法が全然頭のない存在しないと、その複数の社会階層の人たちは、

対立したまま平行線で最後までいっちゃうと思うんですね。

問題は、そういう違う階層が抱く地域イメージをどういうかたちですり合わせながら、合意のとれる一つの地域の大きなイメージに育てあげていくのか。それに対して専門家の人たちがどういうかたちでサポートできるのか。知恵を出し合いながら、接点をみつけて、地域のイメージを共有していく、共同で育てていく、そういうシステムをつくっていかないと、新しいコミュニティとか都市のコミュニティといっても、うまく機能しないでしょうね。

都市再建の四条件

延藤 都市を再建設していくときの最大の手だては、一に住民たちの想像力（イマジネーション）だと思っています。でも、それは夢々しい話ではなくて、「もうあかん」と思うのも想像力だし、「まだまだいける」と思うのも想像力だと思えます。「まだまだいける」。いままで以上に神戸はええ街になるんや」といっているラーメン屋のおちゃん、街角のお好み焼き屋のおちゃんたちがゴロゴロしていますからね。そういう意味で、まずはイマジネーション。

二番目に、人材のネットワーク。住民の思いを実現するためのテクニクとか制度、計画、技術を用意する専門家と行政と住民のマンパワーのネットワーク。

三番目に、その間の信頼関係。共同建て替えとか公園づくり、区画整理等、事業を行なうと、必ず思い違いとか意識水準の違いとか、階層の対立も含めてギャップがたくさん出てきます。そのむずかしいこと、ややこしいことを解消していく信頼関係があるかどうか。四番目は、やっぱりお金です。「金がないからなん

にもでけへん」。これは非常に深刻な問題です。たとえば、コミュニティ住環境整備事業というのがありますが、その事業を適用すると、震災前は不良住宅除却費という補助金が出たんです。ところが震災後は、不良住宅は存在しなくなったという論理でもって、除却費が出ません。

また共同建て替えて集合住宅にすると、階段室、エレベーター、廊下などの共用空間については、みんなの町空間だという論理で補助金が出ていたんです。不良住宅除却費と合計で建設費の三割ぐらいは補助金が出た。ところが、震災後、不良住宅除却費というのは、制度的にアウトにされたがために、ほんの一割ぐらいしか補助金が出ません。

みんなが「共同建て替え」の話に乗ったのは、個別にはできないからと追い詰められた人もいたし、よりいいものができると思った人もいるし、国と自治体から三割も補助金がもらえるんやったらそれは得やな、と損得勘定で乗った人もいる。いろいろな理由が重なって、これまで共同建て替えが幾つか成功してきたわけです。

ところが、本来なら、あれだけ壊滅的にやられ、自治体は手足を奪われたようなものだから、基本的に国の補助が全体の仕組みのなかで強化されないといけないのに、弱体化した。このシステムの欠如の問題は非常に大きいです。

浦野 コミュニティ住環境整備事業もそうだと思うのですが、最初はモデル事業で始まっているわけですね。地域でいろいろアイデアを出し合ってきたことが、まちづくり活動を通して成果を生み、それが一つの制度として定着していくというプロセスをいつもたどっている。ということは、制度そのものも、まちづくり

とかコミュニティのなかでのいろいろな議論を踏まえて、その活動の蓄積でないとなかなかつくれないというところがありますね。

延藤 地域からの、まるで草木が伸びていくようなフツツとした有機的な運動が、必要とするものを制度化していくわけです。でも、ひとたび国の制度になると、制度だけがひとり歩きしてしまう。運用していくときの柔らかな判断とか、状況のなかで生き生きと活かすという、人間的なコミュニケーションのなかでの制度の活かされ方、そして、コミュニティから制度を生む、制度がコミュニティを豊かにする、この連関関係が切れてしまうわけです。

だから、そういう意味で大震災後も、参加のまちづくりの現場では、困難にもかかわらず新しいシステムを下から生み出そうではないかという動き——発想をふくらませ、そして専門家が理論化を図ることによつ



東京世田谷区太子堂では、今年90歳になる小林松太郎さんが、自宅を町づくり活動の場「楽働クラブ」として開放し、住民とともに花と緑の町づくりを展開している。公共的な緑道の整備にあっても、管理は我々住民に任せろということで、世話がめんどろなのでふつう公共は植えない実のなる木を、住民自身が植えて生み出された。

て、世論の支持を受け、新しい制度を生み出していく——という動きが大事ななだと思えますね。

浦野 制度をつくり出していくようなポテンシャルにつながるコミュニティの力がないと、都市コミュニティの意味が薄れてしまうという局面にきているんです。そういう動態的な過程のなかに都市コミュニティのあり方をみていく発想が必要なのだという気がします。

都市災害、都市生活の安全性とコミュニティ問題

浦野 シンボリックな意味で「中高層住宅地区」「木造住宅密集地区」「繁華街・商店街地区」、この三つを取り上げてみます。

おそらく地域によって、住民の地域への関わり合い方、生活全般に対する意識も違っている可能性があります。危機意識と安全観念というものを都市のなかでどう考えていったらいいのか。地域ごとにそういう問題をみることで、大都市のなかでの立体像を浮き彫りにしていけないだろうかと思えます。

「中高層住宅地区」においては、ハード面での災害対応力は近代の防災技術の向上を背景にしてかなり充実してきています。ところが、なかに住んでいる住民はソフト面の地域住民組織の災害対応力をなくしていく、防災に対する無関心が拡大していく、という様相が出ています。

「木造住宅密集地区」の場合は、狭い道路、行き止まり道路、複雑な路地・道路網、木造老朽家屋の密集、人口密度の高さがネックになる。災害時には、これらの要因が相互作用し合って、火災の発生、延焼の危険性が増し、特に避難時には避難の危険性と困難性が増

ハードの相互浸透関係を永続的に生成するプロセスだと思うんですね。都市的な環境、モンスペース、共同空間をどう豊かにするのか。それがまた豊かな人間関係を生み出し、豊かな制度を生み出し、新しい都市環境、空間を生み出していく。そういうモノ・ヒト・コトの有機的な絡み合いのエンドレスなプロセスこそ現代的な都市コミュニティなのではないでしょうか。

大するといわれてきました。阪神大震災における神戸の長田地域の問題点がそのままではまると思えます。

住民構成という点でも、こうした地域は、歴史的な地区形成、発展過程の特徴から、木造賃貸アパートが多く、単身世帯率が高い。社会的流動性の高さが指摘されていて、地域の状況に疎く、危険要因に対する関心も薄い人たちが少なくない。さらに木造賃貸アパート等に住んでいる人たちの間には社会的な交流がほとんどなく、地域情報の流通もないことから、緊急時には社会的な混乱を拡大させると指摘されてきました。

「繁華街・商店街地区」は都市の流動性の高さが問題になります。日中は他の地域からたくさんの方々が来ているのに夜はその地域に誰も住んでいないという事態になっています。この昼間人口と夜間人口のギャップに対して、その地域だけの閉じた防災対策をやっていくだけではだめで、むしろ企業と地域社会、大都市全体で防災活動、災害対策を整合性をとりながら進めていくという課題が、焦点になると思います。

延藤 居住地の類型別に議論することも必要だと思う



世田谷区太子堂で「実のなる木探しオリエンテーリング」をこの地域の住民たちがやっているところ。ふだんは何気なく通りすぎている家々の庭先に、何と見事な実がたわわになっていることと、驚きの連続だ。堅苦しく「防災まちづくり」といわずに、むしろ身近な環境で地域の宝探しをしながら、子どもからお年寄りまで自分の地域に対する感受性を高めることによって、自分たちのまちへの関心を高めていくというソフトな活動を続けている。

のですが、共通した防災まちづくり、今後安心して住めるコミュニティづくりに向けての課題があるのではないかと思います。それは「防災」をどうとらえるかということですが、「安全」という概念に加えて、「安心」という概念があります。この両義的な意味をはらんでいる仕組みが必要なのではないでしょうか。

物的システムとして構造的に強い空間が用意されていること——設備、アラーム装置、避難誘導の仕組み、構造設備上の技術の高度な発達によって人びとの生命、生活を守るとい——この安全性のシステムが第一番目ですね。

でも、いかに高度な技術システムによって安全性を確保したとしても、物が壊れるときがある。そのときに大事なものは、やはり人と人の関係です。安全システムという技術のシステムに加えて、安心の関係、人間の関わりという、その文化が問われているのではない

かという気がするんですね。

「中高層住宅地区」では、放っておくとやはり前者の安全の技術システムばかりが充実していく。それによってどうも人間関係を分断していることについて、反省が足りないのではないのでしょうか。

「木造住宅密集地区」は、安全システムの技術的客観性には乏しいが、実は後者の安心システム——人と人の関わりによってハードの弱さをカバーするという機能を果たしている。役所は老朽度とか道路の狭さ、木造率というモノサシをあてて住環境の問題地区を言い当てますが、それが高いから地震で潰れたり、火災で大ダメージを受けることには必ずしもならない。客観的な物的属性と災害発生度は相関しないというのが、いろいろなデータのなかでうかがえます。人と人の心の通い合いが、安心できる居場所を保障しているのではないかということです。

木造住宅密集地区は、建て替えにあたって、ともすると物的、技術的システムだけが先行されて、いままで大事にしていた路地文化——道は狭いけれども、軒先園芸とか道端園芸によって、花や鳥や虫がお互いに関わりあっている——そういう生命豊かな高密度な居住環境もついていたソフトの価値を十分に反芻し、評価をし、ソフトな人と人の関係によって成り立っていた高密度居住システムをどう継承、再創造するのかという視点が重要なんだと思います。

カルチャーという、人が何かに関わり耕すことによって価値を発生させるような文化のシステム、集まり住み合う生活の文化の再構築が、大震災後問われていることで、これは阪神大震災で被害を受けた住民だけではなく、どんな地域のまちづくりやコミュニティづくりでも求められていることではないでしょうか。

浦野 今回の阪神大震災で本当に実感させられたことがあります。短期的な意味での緊急対応と、中長期的な意味での復旧・復興過程の二種類の問題があるなどということですね。

防災対策というのは、従来、短期的な緊急対策をどういうかたちで充実させていくのかというところに焦点をしばってききました。行政の縦割りのなかで、防災セクションは警察とか消防になりますから、救急医療、消火、避難、避難生活をどうするのか、ということに限定されてきました。

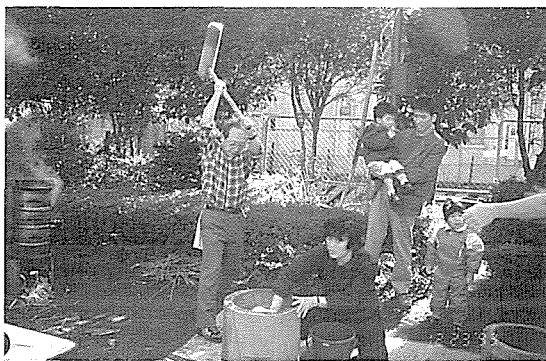
しかし「中高層住宅地区」の問題を考えると、短期的な問題だけ解決したって、実は、生活の復旧・復興にはもつと大きなダメージを抱える場合があります。たとえばいざ半壊になったときに、そのあとどう解決していくかは大変な問題です。こうした問題ではカバーしてなかったなと思うんですね。

安全対策だけに特化するようなものではなくて、地域の生活のなかで人びとの人間関係を充実させていって、ハードな面では多少問題があるかもしれないけれど、その問題点も徐々にクリアするような、動態としてのメカニズムを、きちんと防災対策の面でも考えておかないといけないと思います。

延藤 マンションが部分倒壊して、再建設なのか、修復なのか、という議論はあちこちで起こっているでしょう。問題は、人によって事情が全部違うわけですよ。経済力がある人は負担してもいいといい、お年寄りとかお金がない人は、「金ないねんから、しょうがない」という。それを経済合理性だけの仕組みで対応したら、乗り越えられません。

やっぱり一緒に住み合う間柄として、その間柄に価値を見出す発想が大切です。たとえば「あのおばあちゃん、お金がないというてるけども、この団地は四〇〇戸もあんなから、四〇〇戸がちよっとずつ金出して、おばあちゃんの家を共用空間として共同財産にしてしまつて、あのおばあちゃんに安い家賃で貸したる」という発想があつてもええやないか」という議論が起ころ。そのコミュニティだけで負担する力がなければ、行政が出てきて、それは公共住宅とみなしましょうという発想で、そこでは民間住宅と公共住宅が制度的に融合していく。そんなことも考えられます。

いまは公共、民間と縦割りの制度になっていますが、マンション倒壊の現場を再構築していくときには、コミュニティに内在する人間関係の主観の力……、お金とか技術、制度、組織という客観的仕組みだけではなく、人間の気持ちとか情念、情意、そういう主観のエネルギーもまちづくり、コミュニティづくりにおいては不可欠なファクターなのではないでしょうか。



公園といえば、ひと昔前はありきたりのブランコ、すべり台という三種の神器型だった。近年、住民たちの手づくり型の公園、街角広場づくりが行なわれており、そこには、行政がつくった堅い公園ではなく、とても居心地のいい、個人の庭先のような広場ができています。みんなの広場というコモンスペースの豊かな場所において、年末には餅つきが行なわれたり、地域の子どもたちを宝とする活動という、人と人の関係が生み出されている。

そもそも参加のまちづくりでは、関わる人びと一人ひとりもっている知恵とか技、芸がたゆまず提起されて、お互いに触発し合って、みえなかった新しい価値がお互いのなかにあらわになってくるわけです。そういう価値をお互いの間柄のなかにたゆまず発見し、つくりあげていくことが、復興まちづくり、コミュニティづくりのなかで求められている大きな課題ではないかと思えます。

浦野 中高層住宅は、それが建てられた当時は比較的似た階層の人たちが入居して、彼らだけで一つの空間をつくりあげています。価値観も似ていますから、相互にあまり接触しなくてもいい。しかし長い間に住み替えがたくさんある住宅形態なんですね。当初からずっと住み続けている人たちと、次の借り手が入っているケース、もつと短期的に何度も住み替えが行なわれたケースと、階層的なバラエティーに富んできます。

理事会をつくって管理する場合、そういう層のうちのどこかに焦点をあてて、その人たちが中心になって全体を管理しようとするから、本質的に利害対立が起こりやすい構造があります。だからそのなかでは人間関係があまり成熟していきません。隣りの人は隣りの人でいいわというような人間関係でいってしまうと、いざ何か起こったとき、いちばん弱点が露呈しやすい

都市生活のあり方とコミュニティの将来

コミュニティは「もやい綱」

浦野 同一の趣味、考え方、自分たちと生き方を同一にする同志的な意味でのコミュニティが戦後の、特に高度経済成長以降の都市コミュニティにおいて強調さ

住宅でもあるわけです。

延藤 住宅供給が階層別供給で、同一の階層を集めるのがいちばんつくりやすいし、売りやすいし、管理がしやすかったわけですね。でも、階層別のシステムが非常に安定していいというのは過去の発想です。都市全体のなかに日本人と外国人という問題があるように、一つのマンションのなかにも全然違う社会的、生活的背景をもつ人びとが混在することによって、葛藤、対立、わだかまり、すれ違いが多発してきます。

お互いに、異なった生活スタイルの持ち主を排除するエクスクルーシブな考え方は、いままでの古いタイプのコミュニティや集合住宅居住者の考え方です。そういう排除の思想ではなく、不安定で、不協和、対立があっても、それはノイズでありながら、そのうち心地よい音に聞こえてくるかもしれないと思うような開かれた心——対立する人びとが場を分かち合い経験を共有し合うことで、対立するエネルギーが融合し、お互いにわかり合うという状況——をうまく引きずり出し、相互に敬愛する関係に持ち込めるかどうか。むしろ対立を宝とみなすこと。エクスクルーシブからインクルーシブへ——その状況を生み出すためには、場の共有、体験の共有化が必要なのではないかと思えます。

れてきました。社会的なバックグラウンド、価値観が違う人たちがいかにして地域というフィールドを使いこなして、共同で生活していくか、そのノウハウがどこまで蓄積できるかが、今後の都市コミュニティのあり方を問うていると感じるんです。



都市空間のなかに柔らかい自然環境を再創造していくという点で、世田谷区奥沢7丁目にできたネコジャラシ公園は出色の公園だ。雑草ぼうぼうの原っぱ感覚の広場は、管理は全部、住民がやっつけてしまおうという参加の仕掛けがワークショップによって仕立てられている。写真はそんな「草刈り十字軍」の活動で、ある日曜日に、500kgもの雑草を抜いてしまう。環境整備が住民によってなされることにより、行政との信頼関係もいっそう高まっていく。

延藤 過去の農村コミュニティの、同一の価値観をもつ人びとのべったりした、加えてある種の拘束的關係、このまずさを戦後みんな否定しました。しかしいまもある意味で、同質の生活水準とか、同じ趣味、志向をもつ人びとのコミュニティがやや安定した仕組みをもち始めています。でもそれは、気がつくともんなお年寄りになっていて、お互いに支え合う関係が、非常に危うい関係に陥っています。

むしろ老若とか、違う経済階層、つまり違う価値観をもつ人びとの混在コミュニティ——異質な他者たちが、ときには不協和音もあるけれども、それを協奏するハーモニーに変えていけるような——そういうダイナミズムをいかに取り入れるのか。高齢社会にあっては、元氣老人はそうでない人を支え、自分が元氣老人でいられなくなったときに次の世代から支えてもらう、そういう支え合う関係づくりはどのようにすればつく

れるのか。

「もやい綱」という言葉があります。もやい綱はふだんはゆるゆるしているけれど、必要ときにはピシッとタイトな関係をとりもつ。そういう「もやい」の発想が今日の都市市民に求められていると思います。

そこにおいては、インデペンデントではなくて、インターペンデント——自律しつつ共同する——支え合う論理がコミュニティをより豊かにする、一人ひとりの方の生き方のスタンスを示す重要なキーワードになり始めています。

いままですべて、共生、開放とバラバラに言っていたけれど、それが一つの新しい、よりレベルの高いコンセプトとなっています。そういう支え合いのバリエーションをどうやって生み出せるのかということだと思えます。

浦野 同じ階層の人たちが共に生活して、考え方も一律だということになると、何かハードルを乗り越えようとするときに、ワンパターンの対応しか出てきません。ところが、考え方、生き方が多様であれば、メニューがたくさん広がるんじゃないかと。メニューが広がれば広がるほど、そのなかからいちばん環境に合った、ハードルに適した乗り換え方もみつけれられる。多文化主義のほうを持続可能なんだ、ということでもありますね。

延藤 近代・現代が築いてきた経済性とか合理性、効率性とか利便性、その良さは今後とも継承されなければならぬけれど、そのいきすぎたマイナスの部分とか悪い部分を修正し、より良い仕組み、暮らし、場所を取り戻さなくてはなりません。

男女共同参画の時代だといわれているけれど、言い方を換えると、父親とか男性が地域社会を無視してき

たこの五〇年間のライフスタイルが問い直されているということでもあるのです。地域社会に生きがいを見出すような男性のライフスタイルのあり方——「お父さんが輝くようなコミュニティ」——そういう暮らし方の作法をどう身につけていくのか。

高齢社会の公的サービスの充実だけではなく、地域ケア、さらに相互ケアという、身の回りの近しい関係のなかからケアのネットを生む仕掛けとして、コミュニティという役割、存在価値が大きく問われているのです。

子どもが一人ひとりもっている個性を最大限発揮すると、高齢者がその地域で安心して生き続けられるとか、楽しいお葬式を出してもらえような場所で暮らしたいとか、一人ひとりの人間が生きがいをもつて暮らすとか、それはどの地域においても市民が抱えている課題です。でも、それらは国というレベルでは解けないのではないのでしょうか。

生活者が、地域社会という身近な環境に対して自律的、自発的に目配りし、必要ときに支え合い、そして、あるイマジネーションで従来の疲労したシステムを越えていくような新しい仕組み、システムづくりをしていくために、コミュニティが現代社会の深い悩みを解きほぐすうえでの非常に重要な手がかりになります。それは希望の未来を開く仕掛けではないかと思えます。そのことを阪神大震災で感じました。

浦野 もつと普遍性のある、マクロな、もう少し広い地域社会を再構成するような考え方が本当に必要なんだということですね。地域、コミュニティのなかでさまざまなまちづくりの活動をやっていくことが、その地域だけに限定される価値観に基づくのではなく、もっと広いほかの地域の人たちとも共感をもて、相互に

交流できるような、そしてその交流を蓄積してもっと大きな流れにしていけるような、そういう可能性をもった活動であると考えたほうが、今後、都市コミュニティを考えるうえでおもしろいことになるような気がします。

延藤 コミュニティは小宇宙なんです。あらゆる機能が多重的に錯綜し合って、実は世界そのものをデザインしていく場なのではないかと思えます。そういう発想があちこちにみえてきているのではないのでしょうか。子ども、お年寄り、お父さん、お母さん、いろいろな世代が悩んでいることや、こうしてほしい、こうしたいという願いが次から次へ数珠つなぎのように連鎖していく。そういうあらゆる原因、結果が絡み合っている。たゆまず何かが発生して、それぞれの地域のハードな環境をより良くすることが、ソフトな生きがいを高め、ソフトがハードをより良くしていく。そういう連関的



あるコーポラティブハウジングでは、堅苦しいコンクリートに緑の網目をかぶせるような柔らかな、有機的的表情をもつ存在としての集住体づくりに向かい、その管理も、子どもたち自らが水の管理に身を乗り出す等、すべて住民たちによってなされている。震災復興まちづくりにおいても、集まって住み合う全体のかたちとともに、個々の家々の表情が自由闊達にそこにのぞく、個が自律している表情豊かな集住体をどのように生みだすかが課題だ。

な作用が、コミュニティのなかに生み出されていく可能性があると思いますね。

そこにおいては、老人福祉、子育て、自然再生、エコロジカルな環境、余暇の創造的活用、住宅づくり、広場づくり、道路づくり、等々の課題が全部一つのつながりになっていく「全方向関係主義」の考え方がいま生まれつつあります。コミュニティをフィールドにすることによって、ソフトとハードのあらゆる課題がもう一度見直され、向こうがみえてくるのじゃないかという気がします。

浦野 ボランティア運動の高まりもひとつ大きな動きでしょう。ボランティアを始めるときは、一つの価値観による同志的な集まりという趣旨で始めることが多いのですが、活動していく過程では、自分たちの価値観だけではない違う世界に触れ、地域のなかでさまざまなに生まれてくる活動、共生の作法なども体験していくことによって、いままでの同一の価値観による都市コミュニティの発想から一歩抜け出る側面があるのではないのでしょうか。

他の階層の人たちといういろいろなかたちで触れ合う機会を多数もち、そして体験し、それを自分たちなりに解釈し、視野を広げていくというプロセスを前提しながら、都市コミュニティを考えていく素地ができてきたのかなと思います。

延藤 緊急時に必要な手だてを提供するボランティアと、中長期にわたる滞在型のボランティア活動と、ボランティア活動にも二種類あります。緊急時にはなんでも必要なことをやってほしいと思う。ところが、中長期に滞在するボランティアで大事なポイントとは、「本当にその地域の住民とか地域社会が欲していることとは何だろう、この地域社会のために最も大事なこと

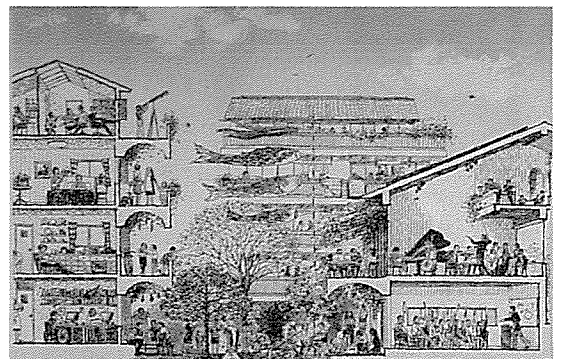
は何だろう」という引いた視点を持つことです。相手が望んでいること——それは当面は言葉によってあらわされていないかもしれませんが、じつと観察しているうちに、この人たちが自分たちで自分たちの生活の場、環境、空間を再構築していくときにこれが重要な手だてなのだ、ということがわかってきます。相手の内発性を高めるために何をアシストできるだろうかという発想がないボランティアは、結果として押し付けになり、地域住民の内発性を奪うことになっていくかもしれません。

浦野 同じ同志的な価値観をもちながら、それをエネルギー源にして、ほかの層の人たちとつき合う術を身につけたり、体験を自分たちの価値観のなかでもう一度咀嚼し直して、発展させていく。そういうプロセスがあるボランティアが望まれていて、そこまでいくと都市コミュニティの新たな位相に踏み込んでいくと思うんです。

延藤 お互いに異なる考え方や異なる志向性をもつ者どうしがオープンな関係をつむぎ出し、応答する——豊かな応答関係の経験の積み重ねは、ボランティアが、コミュニティベースドな町づくりによってじわじわといろいろなことを解きほぐし、変えていく重要なスタンスではないかという気がします。

情報機器、メディアの活用

浦野 もう一点、経済との関わりですが、コミュニティは、地域社会のなかで産業と非常に関連をもつ概念のはずだと思っんです。ところがこれまでは、消費世界あるいは生活レベルでのコミュニティが中心になっていて、経済活動との関わりがやや弱かった。たとえばマクロなレベルでの二四時間都市・東京とい



ともすると現代都市は、陰になる。枯葉が落ちて邪魔だといって木を切ってしまう人たちが多い。風という環境エネルギーを活用し、中庭や、共同空間には木を植え、枯葉がハラハラと落ちるころには、焼きイモ大会をし、枯葉がまた土に還っていく。人間と自然の間で有機的に連関するリサイクル、エコロジカルな環境まちづくりはどのようにつくられるだろうか。そんなことが震災の復興まちづくりで問われている(資料：世田谷まちづくりセンター)。

う視点とコミュニティ論がどうつながるのか、あるいは、コミュニティ論という側面から見たときに、経済活動はどういうふうにみえてくるのか。

延藤 最近、おもしろい事例にふれました。徳島県の上勝は人口が五〇〇〇人を切って、過疎で悩んでいる町です。人口定着とか経済活性化をまくろんで外から企業を呼んでくる話は一〇年前にやったが、そういうのは限界がある、おかしいんじゃないかと。そこで、この五、六年來、地域住民と行政が「1Q塾」というのをやっています。一休さんの「一休」と、みんな問題意識(クエスチョン)を一つぐらいいもとうよ、ということをかけて、おもしろいネーミングでやっている活動です。

その1Q塾のなから生まれた知恵で、この地域は山村でシイタケを栽培するのにふさわしい環境である。ただ、自然の樹木のなかで育てるだけでは生産量が上

がらないから、バイオ技術を導入して、ハウス栽培の事業を起こそうと。それにあたって、そういうことをやってくれる人びとを全国から公募しようということになりました。いままでどうやって出ていく人を引き止めようかと内側のことはかりに目がいっていたのだけれども、むしろ全国に人材を求めるという発想をしたのです。

そうしたら、百数十人の応募があった。書類審査で二〇人にしぼって、一〇人を採用した。なかには、東京の大学院を出た若手とか、北九州のラーメン屋のおっちゃんとか、ブラジルの三世で日本でなかなか働き場がみつからないけれどすぐインテリジェンスをもった人とか、いろいろな人がいました。その人たちに提供する公営住宅を建設し、山村で空家の民家が増えているので、民家に住みたい人には、そういう空家を提供しました。

地域経済を活性化するために、その地域ならではの室に着目し、現代技術を活用し、人材を広く外から吸引し、居住の場は公営住宅という制度をきちんと援用し、その成果を一Q塾に返す。わがコミュニティを活性化させるためには、お金の話と暮らしの話は実は表裏一体なのだということを実に巧みにみせたのです。

さらに、四季彩(いろどり)事業という新しいコミュニティビジネスを生み出しました。木の葉をいっぱいとってきて、それを加工して東京や大阪の料亭に供給しています。地域の住民たちを、行政、専門家がアシストしながら、ビジネスと生活の場を結び合わせ、いかに豊かにしていくかについて、なかなかの示唆をばらんでいる事例です。

他地域から「あしたまでにこれこれの料理の飾り物を送ってほしい」と農協にFAXが入ります。農協と

全戸は防災のための有線FAXでつながれていて、農家一〇〇戸全部にFAXが送られる。そのFAXをみて、おじいちゃん、おばあちゃんは、きょうは夜なべでこれをやろうかということ、「あしたまでにこういうものができる」とFAXで農協へ知らせます。FAXという現代的な情報機器装置を活用して、いわば東京、大阪という全国市場の情報端末の山奥のおじいちゃんやおばあちゃんのところにいる。

浦野 グローバルな経済システム、その中に配置される開放された人間関係を前提にして、それを蓄積して活かしていけるようなシステム——「経済システム」といつてもいいもの——がいかにか花開くのか。そういうものと、いままで議論してきたようなコミュニティ、あるいはボランティア活動がリンクしながら、新たな意味での都市コミュニティの位相を築き上げていく。なにかそんな気がしますね。

延藤 そこでおもしろかったのは、FAXはおばあちゃんたちを元気づける、というんですね。東京からこんな注文が届いたという反応とともに、農協のおっちゃん「先週は風邪をひいていたそうだけれども、おばあちゃん、元気になったか」と一言添えてあげる。

浦野 人間関係が入るわけですね。

延藤 おばあちゃんは、まるでラブレターがきたみたいに、「きのうの言葉はうれしかった」と農協のおっちゃんにいつてくる。まるで近所どうしで挨拶があるように、FAX通信によって、山奥のかけ離れたところに温かい気持ち伝わっていく。高度情報技術によって経済的なグローバルなネットワークと、ローカルな人間関係を同時に作りあげている。この仕掛けは神戸とかあちこちで使えるのではないのでしょうか。

浦野 そうですね。安心できる経済システム。お互いに顔は知っていたり、考え方がわかっていたりして、プライバシーは侵害しない範囲でかわっていく。こまではしないだろう、たぶんこういうかたちで信頼を蓄積できるような経済システムですよ。

延藤 この間、兵庫県が「フェニックス・ステーション」という仕組みを立ち上げました。地域住民に「地域のまちづくりの世話役を募ります」と公募したんです。百数十人が応募して、平成七年度は五〇人を選び、平成八年度は一〇〇人にふやします。広大な被災地域一〇市一〇町の各地区にまちづくりの世話役を育てようという、人づくりの仕掛けなんです。

年間五〇万円の現金を渡して、これで一晩どんちゃん騒ぎをしてみんなが元気をだしてくれたらそれでもいいという、おらかな助成制度です。同時に、FAXは現物貸与。それによって地域住民と行政の間、地域の横の通信のやりとりをスムーズにしようということ。

きつと上勝なみたいなおもしろい使い方を住民たちがしだすのではないのでしょうか。参加する住民の声を聞いたら、「FAXがほしいから応募した」という人もいますしね。そういう現代機器・メディアを、活性化の手段としてうまく使いこなすようなおもしろい事例がいろいろみえてくると、浦野先生がおっしゃるグローバルな関係と、濃密なローカルな関係づくりがどこかでつながっていることが、わかりやすくなりますね。

浦野 話は尽きませんが、このへんで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

〈災害とコミュニティ〉再考

——阪神・淡路大震災から考える

横田 尚俊

1 はじめに——現代都市と災害

戦後の高度経済成長に伴って急速に進行した日本社会の都市化は、その過程においてさまざまな社会問題を生み出したが、「都市災害」もそうしたプロセスの深化とともにクローズアップされるようになった社会問題の一つである。大量の機関と人口が集積し、複雑な機構を備えた現代都市、さらにはそうした都市の中核的機能に深く依存する形で編成されている現代日本社会は、災害に対してきわめて脆弱な構造をもっていると考えられるのである。

たとえば、市街地の高密度化と連担化は災害による破壊効率を高めるであろうし、工場やエネルギー貯蔵施設、交通機関といった人為的な危険要因の集積は、災害の複合化による被害増幅の危険性をもたらす。また、政治・経済・情報などに関する中核的な業務管理機能が被災すれば、その波及範囲は広域化せざるを得ないし、災害により専門機関やライフラインの機能がストップしてしまえば、生活機能障害は深刻なものとならざるを得ない*₁。実際に、戦後の日本を襲ったいくつかの災害（たとえば、一九六四年の新潟地震や一九七八年の宮城県沖地震など）は、こうした都市災害のもつ問題性を現実にもわれわれの眼前に突きつけてきた。

むしろ、これら現実の災害における教訓を踏まえて、ハードなシステムを中心とする防災体制の整備が、行政機関や専門機関（特に電気、ガスといったライフラインの維持を担う事業体など）によって一定程度進められてきた

ことも確かである。にもかかわらず、一九九五年一月一七日早朝に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は、不幸にも、五五〇〇人（その後の避難生活等の過程で亡くなった方も含めれば六〇〇〇人）を越える死者を出す「戦後最悪の大災害」となった。この災害は、すでに述べた都市社会の災害に対する脆弱性を余すところなくあらわにするとともに、高速道路高架部やビルの倒壊に象徴される近代的建造物の脆さや、「危機管理」なる言葉でしばしば話題にされた行政機関の災害即応体制の欠陥といった、まさに防災をめぐる根本観念に再考を迫るような事態を現出させたのである。

他方で今回の震災は、被災後に近隣レベルでの相互扶助や地域住民組織が果たした機能、さらにはそれらをとりに多く多様なボランティア活動の意義に対する人びとの関心を広範に呼び起こした。もちろん、大災害が発生した場合には、行政機関や専門機関の対応力には限界があり、コミュニティを基盤とした住民どうしの組織的な対応が被害の軽減のために不可欠であるという指摘は従来からなされてきた。だが同時に、人口の流動が激しく、専門機関によって供給される都市的サービスの依存とお互いのプライバシーへの不干渉の上に生活が営まれている（と考えられる）現代都市*₂において、そうした地域的連帯に基づく自主的な対応はほとんど期待できないのではないかと、この危惧の念もしばしば表明されてきたし、実際それは、現代都市の脆弱性の一つだと見なされてきたのである。

以下、本稿では、阪神・淡路大震災を対象として、最後の論点——都市災

害における地域住民の対応力とそのベースとなるコミュニティ（地域社会）の機能——に焦点を合わせ、現時点で明らかになった知見を整理してみたい。たとえば、今回の震災に際して、実際のところ、近隣レベルでの社会関係やコミュニティの住民組織はどのような時間的局面でどの程度機能したのだろうか。また、何がその対応力を左右したのだろうか。それらの知見から、今後起こりうる災害に対して、われわれはどのようなコミュニティのイメージを描き、それらを都市防災システムの中にどう位置づけることができるのだろうか。

2 災害と近隣社会

今回の震災に対するコミュニティレベルでの対応を調査していて、被災住民の方々から何度も伺ったのが、地震直後の近隣相互の安否確認行動や救出活動にかかわる経験談である。「いざという時には遠くの親戚より近くの他人だ」という声もしばしば耳にした。

実際に、神戸都市問題研究所が震災後、阪神地域の住民を対象に実施したアンケート調査（一九九五年三月五月）の結果によると、地震発生直後の「地域・近隣行動」として「安否の確認」を行なったという回答が九割以上を占めており、そのほか「救出・救助・避難の行動」や「物資の確保」に動いたという回答も二割を越えている。また逆に、「地震発生後（二、三日までの間）に自分の家や近隣の防災・救急で、誰から（どんな集団から）消火・救出・治療・看護などで……助けられたか」という問いに対しては、「近隣の人たち」（四三・六％）が最も多く、「家族」（三九・一％）、「友人」（二二・六％）という回答を上回っている。さらに、「避難場所・住居・生活物資・サービスの提供など」についての同様な質問に対しても、「近隣の人たち」（五四・一％）は「親戚」（五四・四％）、友人（四九・四％）と並んで、高い数値を示している*3。

被災地域外からのボランティア活動も含めて、こうした自発的な援助行動（愛他行動）が災害時に起こりやすいことはよく知られており*4、これらの

データは必ずしも被災コミュニティにおける近隣関係が日常から緊密であったということを示しているわけではない。だが、大災害が発生すれば専門機関を中心とする都市システムの機能が麻痺状態に陥らざるを得ないという事情を考慮するならば、被災直後から二、三日は、近隣・地域レベルでの住民の対応力が被害軽減の鍵となることは確かである。したがって、「四分の一の人が近隣社会の人びとの救援・援助にかかわっている」という「精神的土壌」を育み、その上に災害に強い社会システムを形成していく必要があるという指摘*5は的外れではない。

たとえば、淡路島の北淡町富島地区では、被災直後から消防署と地元消防団、近隣住民が協力しあいながら、倒壊家屋の下敷きになった人びとの救出活動を進めていった。結局、三八名の方が亡くなられたが、総じて救出・救助の動きは迅速であったという。近隣住民どうし、お互いの家の間取りから家族構成、誰がどこの部屋に寝ているかにいたるまで目頃のつきあいの中で熟知している。おかげで、倒壊した家屋のどの辺を探せば誰が下敷きになっているかがわかるため、迅速な救出活動ができたのだ、というのが現地でのほぼ一致した見方である。

ある町内会の隣保（班）では、二二名の住民のうち一三名が倒壊家屋の下敷きになったが、残りの人たちが救出にあたり、ほぼ三、四時間で全員を助け出している。いささか古くさい名称ではあるが、「隣保」を単位とした近隣社会の絆の強さが、人的被害の規模を比較的小さなものに押しとどめたといえそうである。

むろん、北淡町のような比較的小規模な土着型コミュニティに見られる緊密な近隣関係が、そのまま都市に移植可能だとは思われない。問題は、流動の激しい現代都市において、危機的な場面で近隣相互の援助行動が容易に成立し得るような「精神的土壌」がいかなる形で育まれるのかという点であり、これは、地域住民組織のあり方も含めて、戦後のコミュニティ論が模索し続けてきた課題なのである。

3 災害と地域住民組織

被災直後はともかく、ライフライン機能が途絶した中で応急避難生活を維持しなければならぬ局面では、避難所の管理や水・食料をはじめとする物資の配給、それらをめぐる行政との連絡といった、ある程度組織的な対応行動が必要となってくる。雲仙普賢岳災害など従来の災害事例を見ると、こうした局面では、町内会・自治会に代表される地域住民組織が核となって住民生活の維持を図っていくケースが少なくない。

それでは、今回の震災ではどうだったのだろうか。神戸市市民局が一九九五年五月から六月にかけて、市内の全自治会・町内会を対象に実施した「住民自治組織被災状況調査」によると、「震災後に活動したことおよび現在も続けていること」としては、「行政との連絡・陳情・要望」(四五・四%)が最も多く、以下、「地域のパトロールなどの防犯活動」(三九・九%)、「救援物資の配布」(三二・七%)、「地域の美化」(三二・二%)と続いている^{※6}。(図一)。「行政との連絡・陳情・要望」の内容はこのデータからは明らかでないが、行政の応急対策に関する情報伝達や広報紙の配布、必要物資や瓦礫の撤去などをめぐる行政への要望といった項目であろうと推測される。いずれにしても、「無回答」を除く八割以上の自治会で、何らかの対応がとられたということになる。

しかしながら、前述の神戸都市問題研究所による住民アンケート調査によれば、「地域・近隣の自治会等既存のコミュニティ組織は、防災・救急、災害復旧の過程で役に立った……と思われませんか」との問いに対して、それらの組織は「ふだんの生活においてもその意義がはつきり認められないし、今回の災害に際しても……十分機能しなかった」という回答が最も多く、四割を越える(四三・九%)結果となった。災害時に十分機能したという回答は、およそ三割(三一・四%)に過ぎず、一般の住民の自治会・町内会への評価はかなり手厳しいといえる^{※7}。組織のリーダー層の大半が何らかの対応をとったと回答しているにもかかわらず、一般の住民が手厳しい評価を下してい

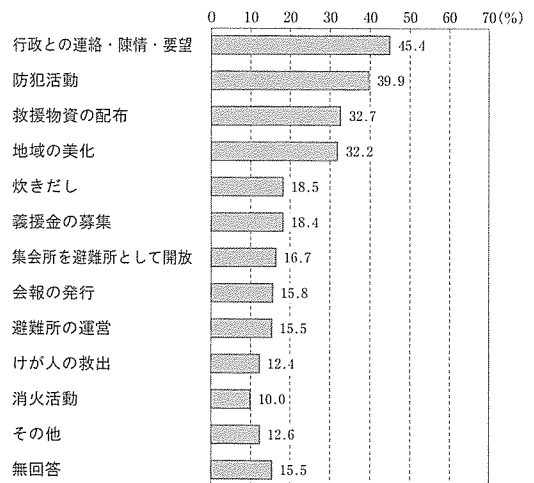
るといふこのギャップは、いったい何に由来するものであろうか。

実際には、両者のギャップは、「ふだんの生活においてもその意義がはつきり認められない」という回答に見られるように、災害以前の日常生活の場にも根をもつものであるが、被災後の局面に限定す

るならば、概して自治会・町内会組織(およびそのリーダー)が核となって避難所が運営されたケースが少なかつた点にも根ざしているのではなからうか。神戸市市民局の前記調査では、「避難所の運営」にあつた組織は全体の一五・五%に過ぎない。岩崎信彦ら神戸大学のグループによる神戸市灘区の避難所調査でも、たとえば区の指定避難場所(主として学校)では、大規模な収容者(数千単位)を抱えて混雑をきわめ、地域のリーダーの指導性はほとんど発揮されなかつたと指摘されている^{※8}。

とはいえ、指定避難場所ほど収容規模が大きくない地域集会所施設では、元の自治会のリーダーが避難生活の管理・運営(物資の搬送をめぐる行政との連絡、避難生活者の班編成など)にあつたケースも存在したし^{※9}、実際に、避難所のみならず自宅生活者への物資の配分も、外部からのボランティアの力を全く借りずに、連合自治会のメンバーの手で実施したところもあつた。三〇年にも及ぶ活発なまちづくり活動への取り組みで有名な神戸市長田区の真野地区では、地元消防団と企業の消防隊が核となり、住民どうしが協力しながら消火作業に成功したほか、倒壊家屋からの救出、瓦礫の撤去なども自主的に行なっている。震災翌日からは、避難所の代表者と地元一六

図一 自治会・町内会の震災後の活動



出典：神戸市市民局「住民自治組織被災状況調査報告書」1995年

自治会のリーダーとで「災害対策本部」が設置され、各避難所への救援物資の仕分けと配分、さらに二月になってからは「建築レスキュー隊」による家屋の被災判定といった活動も行なわれている*。地域の被災の程度にも左右されるとはいえ、こうした事例は、現代都市においてもコミュニティとそれをベースにした住民組織が、災害時の被害の軽減と被災住民の生活維持に十分な機能を発揮し得るということを示している。

なお、付言しておくならば、避難所で既存のリーダーが地域住民のために救援物資を十分に確保できなかったり、リーダーが疎開し地域から離脱してしまったところでは、彼らのポジションの正当性が失われ、避難生活の中から新たなリーダーが台頭したり、リーダー層の世代交代が起こるといった事態も進行している。いわば、災害を契機に、地域住民組織の再編やコミュニティの構造変動が進行していくケースも見られるのである。しかも、これらの地域では、災害後の時間的局面向が応急復旧期から住居や街区の再建という復興の局面へと移行していくにつれて、行政が提示した復興プランの枠組みへの対応ともからんで、既成の組織とその担い手層の再編が加速化しているように見える。

4 「コミュニティの防災力を高めるために——むらびつがね」

ところで、今回の震災は、これまで述べてきた論点以外のいくつかの局面においても、現代の都市生活の中で近隣やコミュニティのもつ意味について再考を促すものであった。

たとえば、仮設住宅の建設をめぐる、主として郊外部に位置するというその立地条件と被災者の生活期待との間に広範なミスマッチが生じ、現在にいたるまで行政と被災者との間で深刻な葛藤が続いている。被災者が、「元の場所に戻って生活を再建しようとする」ということは、災害社会学の一般命題だといつてよいが、今回は応急仮設住宅への入居をめぐる、「地元から離れたくない」、「離れることができない」という強い訴えが被災住民の間から噴出したのである。むろん、その背景として、今回大きな被害を受けた地域が、地

場の産業が集積し、職住の近接性が多くの住民の生活基盤となっているインナーシティであったということは無視することはできない。

そして、このインナーシティは、周知のように高齢化が著しく進み、老朽化した木造賃貸住宅（いわゆる「文化住宅」）に居住する高齢者が多い地域であった。亡くなられた方の半数近くが、こうした層に集中した。今回の震災が「高齢社会型災害」*¹¹と呼ばれるゆえんである。他方で、震災による生命・身体への被害を免れたものの、地域社会の絆から切り離され、仮設住宅で孤立して生活している高齢者の中で、いわゆる「孤独死」が問題化している。大規模な都市災害発生後の応急避難生活を、地域性（場所性や従前のコミュニティにおける人間関係）に配慮した形で維持していくことはできないのか、もし可能ならばどのようなしくみが必要とされるのかという難問を、阪神・淡路大震災はわれわれに突きつけたのである。

このように、今回の震災では、都市部に居住してきた多くの被災住民（とりわけ高齢者層）の間で、地域社会という「へ場」とそこで維持されてきた人間関係との確保が、生活を維持していくためのかけがえのない条件だと受けとめられていることが明らかになった。そして、重要なのは、被災後のそうした条件の整備自体が、当該コミュニティが被災以前から蓄えてきた現実への対応力に左右されるという点である。

たとえば、神戸市長田区の久二塚地区（久保町、二葉町、腕塚町の各五丁目）では、被災後いち早く地元商店街のメンバーを中心に「久二塚地区震災復興まちづくり協議会」を立ち上げ、瓦礫の撤去から地元への仮設住宅、仮設店舗の建設（市場形式の「パラール」を一九九五年六月にオープン）、さらにはそのための土地の権利の調整（地権者への説得と借地契約の締結）にいたるまで、すべて協議会が主体となって実施していったのである。しかも、神戸市や建設を担当した企業との交渉により、（のちの市街地再開発事業のための事業用仮設住宅・店舗という位置づけで）それらの費用負担を結果的に協議会が負わずに済むような形で事業を進めていった点が注目される。こうした驚くべき対応力の背景には、一九八〇年代からの、地域の再開発

を念頭においたまちづくり活動が存在していた。すなわち、三町による「まちづくり協議会」の結成と再開勉強会、まちづくりニュースの発行、地域史の掘り起こし、バザール・マーケット構想といった一連の活動の中で、専門家のサポートを受けつつ蓄積してきた地域住民の力量が、今後の地域の復興をにらんだ上での地場における生活条件の整備を可能にしたといえる。

まちづくり活動の中で蓄えられた住民の力量・資源動員力が、震災直後の消火・救出活動や避難所運営において発揮されたケースや、さらには復興に向けての建物の共同化や再開発をめぐるプランの作成、それらの行政とのすりあわせといった局面で生かされているケースは、真野地区や久二塚地区以外の地域でも見受けられる。いずれにしても、現代都市の防災力は、行政・専門機関やライフラインの防災対策の強化、ハードなシステムの整備とともに、災害後の都市システムの機能的な空白をある程度埋め合わせることで、できるコミュニティの対応力（地域防災力）に依存せざるを得ない。そして、それらをサポートするのが、今回の震災で一躍注目を浴びた、専門家も含めた外部からの災害ボランティアという構図になろう。

真野地区が先鞭をつけた「修復型」のまちづくり活動は、一九八〇年代以降、東京などの大都市でも、「防災まちづくり」という形で展開されるようになった¹²。これは、災害危険度の高い木造住宅密集地区における災害予防と居住環境の改善をめざして行なわれるもので、避難用道路の拡幅・整備や一時避難場所を兼ねた空地（小公園）の整備などの事業を、行政と地域住民、専門家との間で協議しながら進めていくものである。

こうしたまちづくりは、住民個人のレベルのみならず、住民組織や事業所組織、行政機関といった組織レベルでの諸主体の間での不断のコミュニケーションと合意形成のもとで展開されるものであり、それ自体がコミュニティづくりの活動でもある。今後は、その過程において、緊急時を想定した防災対策、防災活動を連接させ、埋め込んでいくしくみを構築していく必要があるのではないだろうか。たとえば、緊急時の情報連絡や消火、避難、物資調達などをめぐる具体的な組織間協定が構築されていくならば、コミュニティ

の緊急時における資源動員力・災害対応力は確実に高められるであろう。むろん、そのためには何よりも、モデル的な事業にとどまることなく広範なまちづくり活動をフォローできるだけの支援システム——まちづくり活動に必要な予算・資源を調達できるようなくみや専門家支援システム——の構築とその拡大が、国家や自治体によって早急に行なわれなければならないだろう。

（よこた・なおとし／山口大学人文学部助教）

〈註〉

- 1 都市災害の特質と問題性に関しては、たとえば、秋元律郎・太田英昭『都市と災害』学文社、一九八〇年、三四―四九頁を参照。
- 2 たとえば、三浦典子は、移動とともに帰属的社会関係を分断された人びとが集まって成立している現代都市の地域社会を「流動型社会」と捉えている。三浦典子『流動型社会の研究』恒星社厚生閣、一九九一年、一八一―一九頁。
- 3 神戸都市問題研究所『大都市直下型地震時における被災地域住民行動実態調査』総合研究開発機構、一九九五年、四一―四三頁および五六―五七頁。
- 4 広瀬弘忠『生存のための災害学』新曜社、一九八四年、二〇九―二一〇頁。
- 5 神戸都市問題研究所、前掲書、四一頁。
- 6 神戸市民局『住民自治組織被災状況調査報告書（神戸の自治会・町内会）』一九九五年、一〇頁。
- 7 神戸都市問題研究所、前掲書、五三―五四頁。
- 8 岩崎信彦『大震災と町内会・自治会』『住民と自治』一九九五年七月号、三三三頁。
- 9 同、三五―三六頁。
- 10 真野地区の対応に関しては、今野裕昭『大都市インナーエリアのコミュニティと震災対応―神戸市長田区真野地区の事例』『白鷗大学論集』一〇一、および阪神復興NPO編『真野まちづくりと震災からの復興』自治体研究社、一九九五年、を参照。
- 11 秦洋一『高齢社会型災害―老人死者約三〇〇〇人が語る阪神大震災の本質』『AER A臨時増刊 老人を乗せるな』一九九五年九月一五―二四頁。また、浦野正樹『被災者の生活再建への道程―高齢者を取り巻く課題』『季刊自治体学研究』第六五号、六一―六九頁を参照。
- 12 『防災まちづくり』の展開に関しては、横田尚俊『地域防災活動としての〈防災まちづくり〉の展開』『関東都市学会論集』第一号、六三―七四頁を参照。

コミュニティ復興ビジョンと復興都市計画事業

— 阪急西宮北口駅北東地区の復興再開発事業の事例から

大矢根 淳

1 「復興都市計画事業」と「コミュニティ復興ビジョン」 生活再建」

阪神・淡路大震災の復興には、土地区画整理、市街地再開発等、都市計画の手法が採られている。これに対して現地では計画決定プロセスに対する不満や、計画自体への反対意見、さらには行政そのものへの不信感までもが言われており、研究者等からもさまざまな異議が唱えられている[※]。

これらの異議では「被災者の生活再建」を議論の出発点に置き、その実現のためのあくまで一選択肢として再開発事業等を位置づけているのに対し、行政のロジックにおいては都市復興に都市計画事業が一義的に接続された。したがって両者の間には「復興は要らない、復旧させてくれ」とか「区画整理から除外してくれ」という切実な声がこぼれますこととなる。これら両者の視点・方法論のズレ自体を吟味し問題点を洗いだしておくことは大変重要な課題だが紙幅の都合上別の機会に譲るとして、ここでは、具体的な一地区における「生活再建」「地域復興」の実例をコミュニティレベルの「復興ビジョン」という視点から考えてみたい。

地域「独自」のビジョンの創案・論議・現実化のプロセスという復興ダイナミズムの文脈においては、都市計画事業も（一律に強制的にかぶせられた網」というよりは）コミュニティ復興ビジョンの一選択肢として被災地では機能的に、独自に（そして被災者によって主体的に、ある時にはあ

くまで利己的に）、解釈され始めるところに本稿では注目する。また、こうしたコミュニティ（復興）ビジョンが生み出されてくるその地域の歴史的背景および社会的な地域特性をひもとくことによって、当該被災地区の復興・復興進捗状況の独自性を再確認する。そして、個々の被災者の生活再建の事例の一つにはこうしたコミュニティの歴史的、社会的な地域特性等の文脈において解釈し、また一つにはあくまで個別具体的な個々の被災者・被災世帯の生活選択諸条件のもとに展開される生活再建として解釈していく。

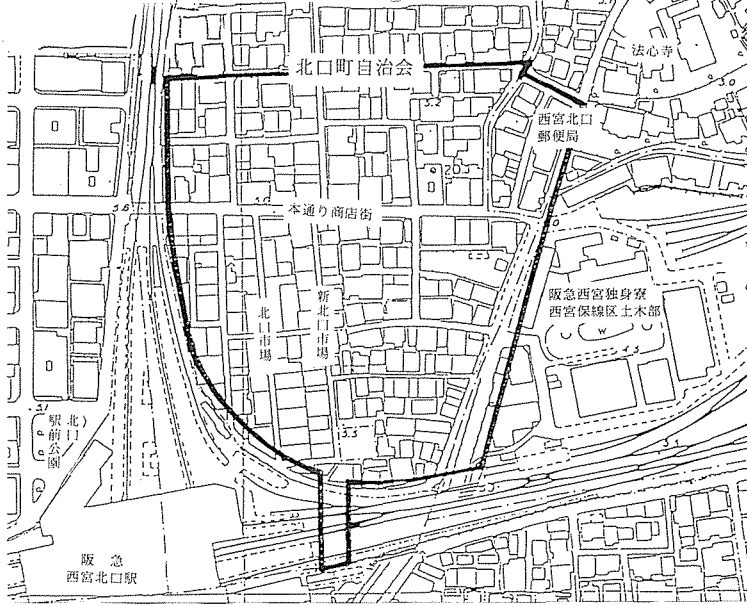
したがって本稿の基本的視点は、「行政」対「住民」という（対立）構造把握に置かれているのではなく、復興都市計画事業等、行政の復興メニューと並行して展開されるコミュニティビジョンの模索過程およびそれと不可分の関係で展開される個々の被災者・世帯の生活再建に置かれることとなる。以下、まず対象地域を概観し、次いでこの地域を三つの角度、すなわち、「歴史（これまでの再開発をめぐる動き）」「スタンス（復興をめぐるさまざまな主体の論点・方法論の違い）」「地区（対象地域内の地区）との違い」あたりから眺めてみたい。

2 阪急西宮北口駅北東（「にしきた」）復興第二種市街地 再開発事業地区の概況

「にしきた」再開発地区は阪急西宮北口駅北東の三・四ヘクタールの地域で、北口町一〜九番（二七一世帯）と隣接する高木西町一番（二五世帯）の

約三〇〇世帯が包含される地区である。地区の北方には「本通り商店街」が東西に、地区の中央部分には二つの市場（「北口市場」「新北口市場」）が南北に走り、いずれも六〇有余年の伝統を持つ（図一）。この再開地区の被災状況は表一のとおりであるが、特に北口町全域の壊滅的な家屋被害が目につく。地震直後には、隣接する阪急電車庫敷地内にある独身寮の人がとが、本通り商店街の東端から倒壊家屋の中で生き埋めになっている人びとを順に救助し、また、再開地区を含む北口町自治会では井戸水を使ったパケツリレーで一棟、火災を鎮火している。六〇有余年の伝統があり日頃から近所づき合いも密なコミュニティであった。これまで過去数十年の間、駅

図一 「にしきた」復興再開地区概況



「西宮北口駅北東地区復興第二種市街地再開事業第1回説明会資料」より

前再開が議論され準備組合等が組織されてきたが、事業の実現にはいたらず、震災を機に平成七年三月一七日、復興第二種再開事業として都市計画決定され、その後、住宅・都市整備公団の施行で復興再開事業が始められた。「きたぐち・北東ENプロジェクト／基本計画案」（平成七年七月）*2によると、同地区はSRC造り地上二階・地下二階の「西街区」（約八二〇〇㎡）と、SRC造り地上二階・地下二階の「東街区」（約九〇〇〇㎡）に、それぞれ下層より駐車場・商業業務施設・公共公益施設・住宅が盛り込まれる予定である。

3 「にしきた」再開の経緯

「にしきた」再開の議論の始まり*3を本稿では「戦時下の都市計画」*4なしは「戦災復興」*5あたりに位置づけたいところである。というのは、「本通り商店街」は六〇有余年の歴史を持ち、また、「新北口市場」は戦後の鬧市から発して小間口店舗が密集し、戦後五〇年の間に出入りの激しい複雑な権利関係を生じさせてきた経緯があるからである。しかし、いま手元にそのあたりの資料が十分に揃っていないので、ここでは、昭和四〇年代あたりから震災復興への連続性を強調しておきたい。この年代にこだわるのは、今回の震災復興都市計画事業が、この当時の都市計画事業と直接の連続性を有し、また、担当当局である市役所の窓口も「都市開発局」が「都市復興局」と表札を掛け替えた形につながっているからである。

表一2のように「にしきた」では昭和四〇年代以降いわゆる駅前再開が計画されてきたが、いずれも成果をみることはなかった。それぞれの時期の構想や計画座礁の経緯を詳細に再構成することが、現在の復興再開事業の

表一 西宮北口北東再開区域内地帯別被災状況

| 町名 | 全壊 | 半壊 | 一部損壊 | 計 |
|-------------|--------------|------------|-------------|---------------|
| 北口町 1～9番 | 263 97.0% | 7 2.6% | 1 0.4% | 271 100.0% |
| 高木西町 1番 | 8 32.0% | 6 24.0% | 11 44.0% | 25 100.0% |
| 計 | 271 91.6% | 13 4.4% | 12 4.0% | 296 100.0% |

北口町自治会資料より

進捗状況および今後の展開を見通すうえで重要なポイントとなるが、紙幅の都合上別稿に譲り、ここではその経緯の中で形成されてきた「地域団体」の諸活動を概観して次項「にしきた」復興をめぐるさまざまな主体）につなげたい。

「にしきた」復興再開発の地理的範囲は「北口町自治会」の南側三分の一ほどに該当する。自治会では「北口地域団体連絡協議会（連絡協議会）」（三五団体）をベースに、北側三分の二を含む「西宮

北口駅北東震災復興土地区画整理事業対策委員会（区画整理対策委員会）」と、

南側三分の一を含む「西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業推進協議会（再開発推進協議会）」を結成し、区画整理・再開発に積極的に取り組んで来た。両委員会・協議会とも震災以前よりの活動の実績があるが、震災以降はその名称に「震災復興」を付し改組している。

これと並行して自治会単位としては下水道整備に力を入れてきた。南側の再開発地区は準備組合も設立され計画が順調に進んでいるように見え、十数階建ての再開発ビル建設と共にそれらインフラは事業の中で整備されるが、北側区画整理地区は計画が進まず、このままでいくと北側と南側ではインフラ整備の次元で大きな格差が生じてしまう。そこで自治会では北端から次第に下水道整備の同意を取りつけ南下してきていた。すなわち、再開発事業を前提として地域組織を基盤に具体的に関連事業（下水道）を進めていたのである。この事業に積極的に関わってきた北口町自治会長のO氏は、北口町住宅地（「北口コミュニティ協会」）代表として「連絡協議会」「再開発推進協議会」に委員として名を連ねている。

いっぽう、「にしきた」内ではそれぞれの商店街・市場ごとに機能集団が

表-2 「にしきた」再開発の経緯

| | |
|---------------------------------|----------------|
| (1) 昭和40~50年代 | ①市、地区双方が計画、挫折 |
| | ②市、「北口まちづくり構想」 |
| (2) 昭和58年、市の「車庫北線測量通知」に地元が反発 | |
| (3) 昭和60年、再開発A調査 (3.4ha、市、二種事業) | |
| | 61年、再開発B調査 |
| | 63年、都市総 |
| | 平成3年、修正計画 |
| (5) 平成4年、準備組合設立、組合施行へ | |
| (6) 平成7年、阪神・淡路大震災 | |
| | 1月、都市計画決定 |
| | 3月、住都公団の施行へ転換 |
| | 5月、 |

北口北東再開発事務所資料より

組織され、ルーティンワークの処理とその延長上で活性化、再開発が議論されていた。平成四年七月、この再開発は組合施行に転換され、「北口再開発準備組合」が創設された。会長は「北口市場」で八百屋を営むA氏で、昭和八年に開市（現・新北口市場）で開業し、昭和二二年、現在の「北口市場」に移って来た。現在は北口自治会副会長を務める。「本通り商店街」で呉服屋を営むF氏は商店街会長で再開発推進協議会副会長を務める。また、「新北口市場」で洋装店を営むK氏は新北口市場を代表して再開発推進協議会の副会長についている。すなわち、震災以前から再開発に向けて自治会等をベースとして積極的な動きがあり、それが震災復興再開発事業推進の母胎となってきたのである。

平成七年九月末現在、「新北口市場」は傾いた木造二階建て店舗が添え木に支えられて寄り添うように残存しているが、「本通り商店街」「北口市場」ではガレキは処理されプレハブ仮設店舗が建設され、商店街では八月中旬に復興祭が挙行されている。この差はどこからくるのであろうか。それぞれの店舗（被災世帯）ごと、生活再建諸条件が異なるのは自明のこととして、それに、街区ごとの復興諸条件（たとえば複雑な権利関係ⅡA・地権者/B・借地権者/C・借家人、の権利錯綜に基づく権利処理の進捗状況）や特にその「戦略」（現存家屋の評価・補償または再開発事業での減歩・清算金を勘案しての状況の静観Ⅱあるいはゴネ得を狙ってか？）が異なる。次項では再開発地域をめぐって広範に展開される復興ネットワークを視野に入れて「にしきた」復興をめぐるさまざまな主体を俯瞰する。

4 「にしきた」復興をめぐるさまざまな主体

ここでは「にしきた」復興をめぐるさまざまな主体を以下のように便宜的に分類し、それぞれのスタンス・論点を抄録し、併せて若干の相互連関を記しておく。

①行 政・西宮市 都市復興局復興事業部 北口北東再開発事務所

住宅・都市整備公団 震災復興事業本部西宮再開発事務所

②自治会・北口町自治会／北口地域団体連絡協議会

西宮北口駅北東地区震災復興第二種市街地再開発事業推進協議会

本通り商店街／北口市場／新北口市場／北口コミュニティ協会

③コンサルタント・西宮復興まちづくり支援ネットワーク

④住民団体・阪急西宮北口北東部のまちづくりを考える連絡会準備会

まず、行政当局であるが、こちらは都市開発局が震災後改名した都市復興局の北口北東再開発事務所が震災以前同様「にしきた」復興再開発にあたる。また、この再開発は震災を経て「準備組合」による組合施行から「住宅・都市整備公団」の施行へとかわり、市再開発事務所とは別に地区内に「住都公団震災復興事業部西宮再開発事務所（住都公団事務所）」が設けられた。この両者が『きたぐち北東復興プレス』（再開発事業ニュースレター）を発行し、地元説明会を開催し、事業を推進する。

自治会は前述のとおり再開発・区画整理に震災以前から積極的に関与し「準備組合」を経て住都公団施行の地域母胎となっており、いわば推進派である。これは、他の復興都市計画事業地区において事業に自治会が中心となつて反対し、コンサルタント等と共に対案を提出しているところとは対象的である。

したがって、「にしきた」へのコンサルタントの関与は緩やかである。「支援ネットワーク」は大学、コンサルタント会社等が「にしきた」を含む市内一一の地域にグループをつくって参画し、被災当初はそれぞれの被災現地の踏査地図を作成し、「西宮復興まちづくりパイロットプラン」を検討し、復興にあたっては共同化事業等整備課題の洗い出しや、「まちづくり・すまいづくり」の各種支援等を行なっている。しかしながら行政担当者および自治会との関連はさほど強くなく、行政の復興事業推進プログラムにその存在が明記され、相互交流や議論が全面に出ているわけではない。しかし一方、震災以前、昭和四三年頃のいわゆる万博道路（R11）建設に伴う甲東瓦木区画整理事業の都市計画決定以降、批判的に活発な議論を展開してきた研究者グループも存在し、それらが次にあげる住民団体と微妙に意思疎通しながらこ

れまでの「にしきた」再開発に、そして、現在の復興再開発に関与している。

次にその住民団体であるが、これまで見てきたいわゆる推進派に対して反対派と呼ばれるものも当然存在する。前述のとおり他地区では自治会自体が反対運動を展開しているところもある。「にしきた」に関しては、「阪急西宮北口北東部のまちづくりを考える連絡会準備会（まちづくり会）」が震災以前から都市計画事業に批判的な議論を展開し、震災後の三月中旬、これまでの名称（「阪急西宮北口周辺の開発を考える会」）を現在のものに改めた活動を興した。震災後には分譲マンション居住者で区画整理にかかって新たに減歩・清算金の問題の渦中に投げ込まれた被災者や、再開発区域にかかるところでは比較的被害の軽かった一戸建て住宅居住者等を取り込んだ。ところで、先に私は本稿の基本的視点が、「行政」対「住民」の対立構造把握（作為阻止型住民運動の把握）にあるのではないと記した。災害復興には個々の被災者の生活再建の諸条件・ネットワークから行政当局の復興プログラムまで、さまざまな主体の思惑が交錯し、それぞれがもつともな主張を展開する。海外の復興事例を見ると、その活発な議論のベースには必ずといっていいほど、人種・民族・宗教・階級そして政治的イデオロギーが露骨に登場し、それらが時には武闘を伴う激しいコミュニケーション過程を経て、「災害復興」＝「地域振興」の文脈で（個々の生活再建をあるところで犠牲にしながら）収斂していく。「にしきた」にも表面化こそしないが、階層・イデオロギー等々のコミュニケーション・ギャップ、あるいはそれに基づく復興戦略の差異が存在するが、それについてはこのわずかな紙幅で記すには余りある。したがって、ここでは、「にしきた」復興のコミュニケーション過程に登場するさまざまな主体の総覧までとしておきたい。

5 まとめにかえて

復興「コミュニケーション」過程と「コミュニティ復興ビジョン」

さて、このように復興コミュニケーション過程におけるさまざまな主体を概観すると、当該地区の既存・新規の復興諸主体の相互連関という平面的な

関係に加えて、これまでの再開発事業をめぐる論点、状況の変容という被災前後のそうとう長い時間軸を盛り込んだ地域環境の変容を前提として、現復興諸主体のロジックを解釈していかなければならないこととなる。「にしきた」(復興)再開発は、六〇有余年の伝統を持つ商店街・市場の活性化プランが、昭和四〇年代の状況を呈した時期の万博道路・都市計画事業や高度成長期の「北口まちづくり構想」、さらにダイエー、ニチイ、コープ等大規模店舗の進出とバブル崩壊に伴う商店街・市場の低迷を経て構想されてきたものであり、そうした「にしきた」の歴史的・社会的背景のもと独自の復興ビジョンが描かれ、それを前提に個々の被災世帯の生活再建がはかられているのである。

最後に一言、コミュニティ復興ビジョンには行政の復興プログラムとの有機的な連関があるべきことを記しておきたい。自治会や街区ごとに激しい反対運動を展開し対案を提示しているところは当然として、「にしきた」のよう以前からの再開発まちづくりの連続性の上に復興の網ががぶせられているところにおいても、住民を「説得でなく納得させる」⁴。青写真なり事業手法が必要となる。「にしきた」においてそれは駅周辺四地区(北東/南東/南西/北西)を射程に入れた広域商業ゾーンの集客バランスに基づく「絵(住・職再建のための都市計画)」となるが、その「絵」の詳細設定の過程において、個々の被災世帯の(住・職)生活再建の諸要求が地区の要求として昇華して取り込まれ、「絵」の詳細にフィードバックされていく、まさに世帯レベル→再開発事業レベルにおける動態的な復興コミュニティション過程が尊重されなければならず、他地区で叫ばれる「住民参加のまちづくり」もこうした文脈で解釈されるべきであろう。したがって作為要求・阻止型の住民運動を超えたコミュニティ復興ビジョン創造のための土俵設定は、「住民の痛みを緩和するために存在する手法」⁵を行政側を求めるばかりでなく、双方が既存の法・制度の弾力的運用や新手法の創案を徹底的な討論によって導き出すことで、その可能性が見えてくるのではないかと考えられる。

(おおやね・じゅん/江戸川大学社会学部応用社会学科助手)

〈註／参考文献〉

- 1 塩崎賢明「復興都市計画と民主主義」『世界』平成七年五月。
五十嵐敬喜「阪神・淡路大震災と都市計画」『法律時報』六七巻七号。
遠藤哲人「暮しの再建なしに復興都市計画はない―阪神・淡路被災地での復興の何が問題か」『住民と自治』平成七年五月。
- 2 「西宮北口駅北東地区復興第二種市街地再開発事業 第三回説明会資料」より。
- 3 「にしきた」形成のプロセスは明治以降の沿線開発、大正後半以降の武庫川改修計画の推移、昭和初頭からの耕地整理・区画整理、そして戦時下の都市計画・戦災復興の流れの中で把握されるもので、以下の文献・資料に詳しい。『西宮市史 第三巻』昭和四二年、二五九―二八七頁、三四一―三六三頁、六〇三―六三二頁、西宮市建設局都市整備部「甲東瓦木地区 土地区画整理事業推進調査 概要報告書」昭和五九年。
- 4 Anthony Oliver-Smith, 1990, Post-Disaster Housing Reconstruction and Social Inequality: A Challenge to Policy and Practice, in *Disasters* Vol. 14, No. 1.
- 5 似田貝香門「街づくりという集合行為と(合意(同意)の原則)」第六八回日本社会学会大会(阪神・淡路大震災と社会学)報告「震災による地域社会の崩壊と復興―災害からの復興過程―サバイバーズ・スピークアウト(生還者の声は社会を変える)」。
室崎益照「説得の都市計画ではなく納得の都市計画」、同右学会での討論より。
- 6 神戸大学震災研有志「都市計画決定と住民参加に関する意見―みんな痛みを分かちあってまちづくりをしよう」、平成七年三月一〇日。

〈付記〉

脱稿後、一二月末現在までに以下の動きがあった。

- ① 「にしきた」再開発ビルの青写真の変更。A街区Ⅱ一八階、B街区Ⅱ二四階を、構造計算上の理由等で、B街区Ⅱ一八階とする。全高を抑えて厚みのあるビルとする。
- ② 「北口・高木まちづくり協議会」(二月三日)が発足。主に区画整理地域を対象とするが、再開発地域との意思疎通も図られている。
- ③ 「設計改良案・土地鑑定評価」(二月一九日)の説明会終了。「個別説明会」(二月二七日)実施。今後は「事業計画認可」(九六年二月予定)、「管理処分認可」(事業計画認可から半年程度を予定)の段階に進む。

生活の場と都市コミュニティ

—多様な関係を支える都市の仕掛け

橋 弘志／鈴木 毅／篠崎 正彦

1 はじめに

今回の阪神・淡路大震災を契機に、都市におけるコミュニティを見直そうという動きがある。また、社会の大きな動きとしても、生活の場を中心とした地域の重要性が指摘されてきている^{＊1}。

それでは「都市コミュニティ」という言葉から何がイメージされるだろうか。「都市」に住んでいる人びとは地域と関わりを持たずにバラバラに生活しており、そこではもはや「コミュニティ」に連想される拘束性の強い「ムラ」的共同体は成立しないように思われている。あるいは一部の下町に今も残ると思われている密度の濃い「向う三軒両隣」的な近所つき合いのことを、いくぶん懐古趣味を含みつつ想像するかもしれない。それとも都市の生活とは、一部の「ベタベタ」と大多数の「バラバラ」に二極分化しているものなのだろうか。

都市に住む一人ひとりの日常生活に焦点を当てていくと、決してそのようなステレオタイプに当てはまるものではなく、それぞれが地域との関わりを持ちながら個人の主体的な生活を確立していることがわかる。この報告では、その部分に視点を当てることで、旧来的なコミュニティとは異なる新たな都市コミュニティの側面を見いだそうとした。主に東京大学高橋研究室で行なった都市居住者の生活実態を追ったケーススタディ^{＊2}をもとに、報告する。

2 都市生活のケーススタディに見られる特色

例1～3（33頁）は、都内の既成市街地に住む単身者の生活の様子を記述した例である。単身者といえば地域との関わり方が希薄と思われるが、実際はさまざまな場所や人と関わりを持ちながら生活をしているようだ。

それぞれの生活スタイルの確立

例1のOさんは、長い年月をまちで過ごしてきたが、地域のしがらみに拘束されているわけではない。さまざまな定期的活動（クラブ・サークルなど）を自分で選択して参加しており、それぞれの活動で盛んに仲間と交流している。活動も地元だけで完結するのではなく、隣町へも足を延ばしている。

これに対し、やはり地域での生活が長い例2のGさんは、より気軽にアクセスできる馴染みの店や飲み屋・銭湯など、自分の行きたいときに人とコンタクトできる場所をまち中にくつも持つっており、それらをその日によって選択している。そのようにして地域と関わりを持ちながら、自由に外に出ていって自分の時間を過ごしている。

最後の例3のSさんは、二年前からのいわば「新参者」である。地域との関わりを持ちにくい、昼間まちにいない単身通勤者でありながら、人や場所を介してまちのひととの関係を広げていき、いろいろな形で地域と関わった生

活を送りながら、まちにとけ込むことができている。

ここはいわゆる下町といわれる地域であるが、これらの例に見られるように、まちに住む彼らの生活はそこに閉じているわけでもなく、画一的な人間関係に縛られているわけでもない。それぞれが地域の中のいろいろな場にいるいろいろな人との関わりを深めながら、三人三様の生活スタイルを築き上げている。そのような一人ひとりの主体的な生活を支えているのが都市の環境であり、都市のコミュニティなのではないだろうか。

地域への移行を可能にする弾力性

一般に都市生活というと、「隣は何をする人ぞ」といった人間関係の希薄さが指摘される。また「向う三軒両隣」のような濃密な人間関係のでき上がった場所では、新たに越してきた新参者は「よそ者」として地域にとけ込みにくいと思われている。しかし例3のSさんを見ると、そのどちらにも当てはまらない。新たな居住者であるSさんは大家や店の主人などのキーパーソンの存在を介して、次第に関わりを深めながら地域に受け入れられている。

また例2のGさんは、退職による「仕事コミュニティ」からの離脱という環境の変化に対し、大きなギャップを感じることなく地域にとけ込んだ生活をするようになった。Gさんは、仕事をしていたときから気軽にアクセスできるような場所をいくつも地域の中に持つており、それらを介して地域との関係を持ち続けられたのだろう。

このように、新しい人、外部の人が地域生活へスムーズに入り込める、すなわち地域への移行を可能にする仕組みがまちには存在する。このことは、都市コミュニティが持つかなり重要な側面として捉えるべきだろう。都市は決して閉鎖的なコミュニティでも、人のつながりのない場所でもなく、多様な人を受け入れていく弾力性と開放性を備えたものなのである。

あつさりとした近隣関係

冒頭の三例に限らずこの地域では、「コミュニティ」という言葉に連想さ

れがちな全員参加型の町内会的つき合いや、醤油の貸し借りをしたり隣の晩のおかずまでわかるような「向う三軒両隣」式のべたべたした近所づきあいなど、拘束性の強い人間関係はほとんど見られなかった。町内会組織は現在でも地域空間の管理などの役割を果たしているが、しかし個人個人の生活に占めるウェイトは今やかなり弱い。

ここに見られる近隣関係は、隣の人やどんな人かは知っているが、道で会っても挨拶する程度で立ち話したりすることも少ない、といった意外とあつさりとしたつき合いが多い（もちろん、なかには、特定の仲良しの人とお互い訪問したりすることもあるが）。そこには、深いつき合いこそしないが、さまざまな気遣いや暗黙の合意などによって、お互いに何となく信頼感のある関係——いわば成熟した都市の近隣関係ができあがっている。

重層的で多様な人間関係

まち中のさまざまな場所では、多様なコミュニケーションが重層的に行なわれている。この三例に見られるものだけでも、たとえば、老人クラブやサークル活動などの定期的な集まり。毎日顔を合わせているラジオ体操や銭湯での仲間。気の向いたときにふらっと立ち寄るような飲み屋での会話や、古いなじみの店の主人との世間話。まちかどで出会う人との一瞬のコミュニケーション。そして自宅近隣の意外とあつさりした近所づき合い。ある一つの関係だけに収束するのではなく、さまざまな人とのいろいろな形での人間関係が、地域の中で重層的に行なわれているのである。

また、これらの関係は重層的であるだけでなく、関係の幅（レンジ）自体が多様である。まず集まりの質として、老人クラブのように公共的に提供されているものと、銭湯や飲み屋での自然発生的なもの。時間的な拘束性として、ある決まった時間に行なわれる活動と、いつでも気の向いたときに起こりうるコミュニケーション、あるいは偶発的な出会い。また参加（アクセス）の契機として、グループの一員となるべく何らかの入会手続きを必要とするものと、単に同じ場に居合わせることが重要であるもの。これらの違いはそ

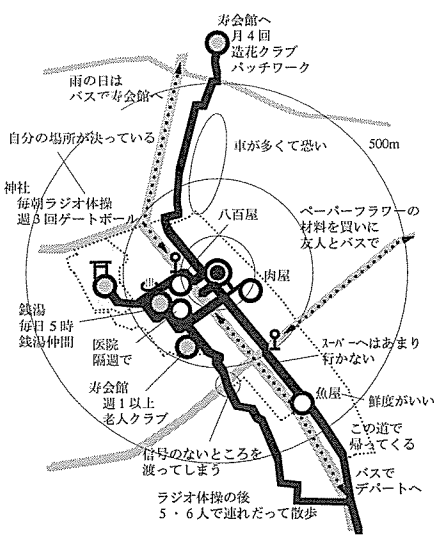
例1 長年住み続けてきたOさん

●76歳女性

二階建ての四軒長屋に五三年間暮らしている。昨年夫と死別し、現在はひとり暮らし。近所の人たちとは長い付き合いだが、立ち話をするのはなく、挨拶をするくらいだが、遠くに出かけるときには声をかけるようにしている。

朝はラジオ体操で始まる。ラジオ体操の会に所属しており、毎朝神社での体操後は、体操仲間五・六人で連れだつて一時間程度散歩をする。昼間は加入している老人クラブの活動を盛んにしており、ゲートボールに週三回、ペーパーフラワーに週一回参加しているほか、老人クラブの役員として月一回は近所の寿会館で集まりがある。また隣の寿会館で行なわれているパッチワークや造花のクラブにも入っている。

日頃の買い物はスーパーではなく、近くの肉屋や八百屋などの小売店を利用する。魚屋だけはちよつと離れた鮮度のいい店まで足を延ばすことにしている。毎日夕方五時に銭湯へ行き、銭湯仲間とおしゃべりをする。

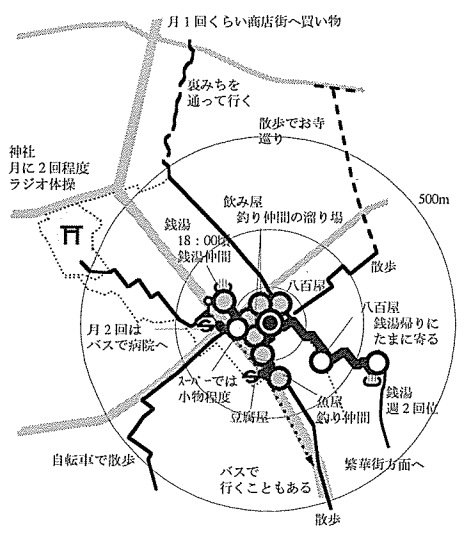


例2 最近仕事を辞めたGさん

●65歳男性

生まれも育ちもこの土地で、一五年前から現在の二階建ての長屋に暮らしている。数年前に妻と死別し、ひとり暮らしとなる。最近、長年続けていた塗装屋の仕事を辞めたばかりである。近所の人とは挨拶程度の付き合いであるが、お互いに家の前に水を撒いたり撒かれたりという関係が自然にできあがっている。

近くの公園や神社、学校などは、子どもの時から遊んでいた場所、気が向けばよく散歩に出る。買い物は、自宅近辺の店をいろいろ使い分け、その日によって店を変えてみる。どこも古いつき合いで顔見知りなので、買い物ついでに店先で世間話をする。スーパーはほとんど利用しない。近くの銭湯へ六時に行くと、いつもの銭湯仲間が来ていて、いろいろ話をする。銭湯から上がった後は、夕食をかねて近くの飲み屋に行くことが多い。特に何曜日と決めていくわけではなく、気の向いたときに行くと、たいてい気の合う仲間の誰かが来ていて一緒に飲む。

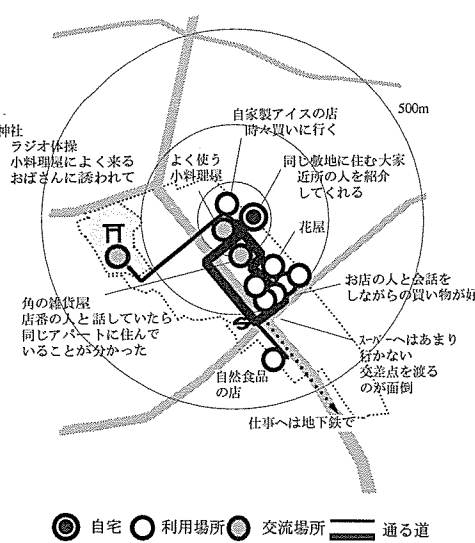


例3 まちが気に入って住み始めたSさん

●36歳女性、会社員

二年前までは郊外に住んでいた。会社に行くにも実家に帰るにも交通の便がよいことがあるが、何よりもまちといま住んでいる部屋が気に入って住み始めた。近所の人との付き合いはあまり多くないが、何人かの人を大家さんに紹介してもらった。また、毎日駅に行く途中に会う、立ち話をしていられるおばさんたちや日向ぼっこしているおじいさんとは挨拶を交わすようになった。

部屋の斜め向かいにある小料理屋さんをよく利用する。特にちまきが好き。ここには、お茶の間のようなしつらえの座敷があり、お客さんどうしや店の人と話をしやすい。ここで出会った、近所の人や店の人と話をしやす。このお店にも来る向かいのおばさんに誘われて、神社でのラジオ体操を始めた。買い物はスーパーは使わずに、商店街の小売店を利用する。商品を選びながら、お店の人と話をしながらの買い物が好き。内風呂があるので銭湯に行くことはない。



● 自宅 ○ 利用場所 ● 交流場所 — 通る道

の場における人との関わり方や自分の場での「居方」にも影響を与え、他人の期待する振る舞いを半ば強要されることもあれば、自分が自由に主体的に振る舞えることもある。まちの中にはこのような多様な人間関係の場が展開しており、その中から一人ひとりがその都度、関係の深度を選択しながら生活している。

3 都市の多様な関係を支える資源

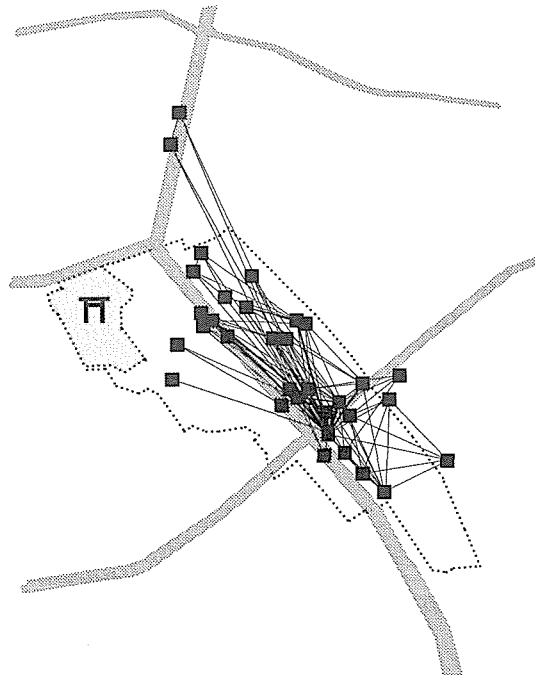
自由な選択を可能にする多様な選択肢

都市の中には人が利用し、人の集まる場が数多くあり、居住者はそれらを選択しながら生活している。図-1、2はこの地域で買物の店を選択する様子、ある公園住宅団地*と比較したものである。これを見てわかることは、この地域の選択肢の数の多さだけでなく、利用者によって店を使い分けるパリエーションの豊富さである。つまり、一人ひとりが自分なりに店を選んでいくのだ。このことは、それらの選択肢が質的・意味的にも多様であることを示唆している。

例2のGさんの生活は、都市の選択肢の質的多様さをもっとも反映したものであられない。ここには「気の向いたとき」「何となく」「その日によって」といった、いきあたりばったりあるいは明確な意図を持たない行動が特徴的に現われている。これらの行動の特徴は、生活の必要性や何らかのスケジュールに縛られていないことである。ある意味で、本質的により主体的な行動なのではないか。とすると、それだけ地域の中にその都度主体的に関わるさまざまな場を持っているということになる。

これとかなり対照的と思われるのは、公園住宅に住む人たちの中に、かなり明確な目的を持った行動、たとえば毎日散歩に行く場合でも「健康のため一時間は歩くようにしているのです」というように、自分の生活を自分で意識的に組み立て、目的に応じた場所に向いていくような行動が多く見られたことである。ここには、上記のGさんとは、かなり質的に異なる生活が展

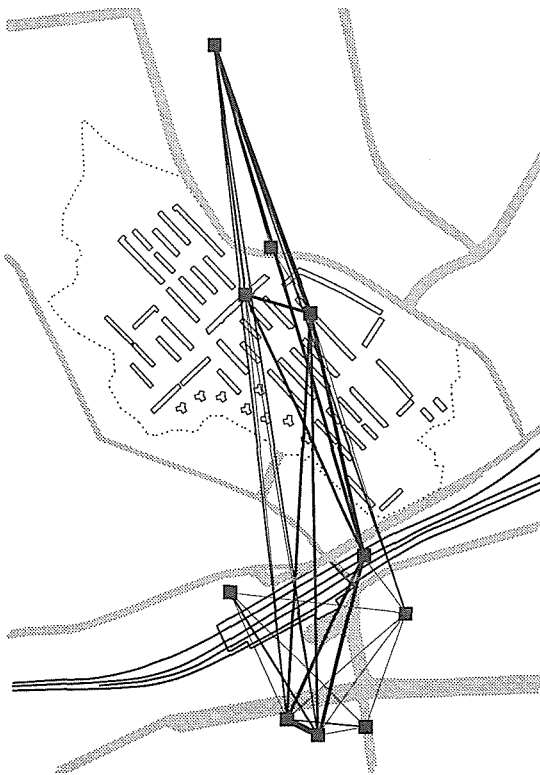
図-1 店の使い分け：既成市街地



一人の利用する店をすべて線で結び、それを人数分重ね合わせたもの。線が太いほど、その両端の店を利用する人が重なることを意味する。

右の既成市街地に比べ左の公園住宅団地では、限られた店が太い線で結ばれており、同様の店を多くの人が利用することを示す。

図-2 店の使い分け：公園住宅団地



開されている。

このような生活の質の違いは、居住者の生活観だけでなく、居住環境自体の質的な違いを反映している。都市の選択肢の多様さが、本人は無意識的・無意図的であったとしても、より自由な選択を可能にしているのだろう。

人と人をつなげるまちの主

小売店の主人やアパートの大家などは、長年まちに滞在し、(会社員であれば通勤している)昼の時間帯もまちにいる主(ぬし)としての存在である。このような店は、単に買い物をするだけの場所ではなく、人と人との関わり合いの一つの場としても機能している。例2のGさんや例3のSさんには顔馴染みの店が何軒もあり、自分の行きたい時間に行きたい店で、その主人とコンタクトをとることができる。

またこういったまちの主は、ときにさまざまな人を直接的・間接的に結びつけ、それによって新参者や外部の人をまちに受け入れる重要な役割を担うことがある。例3のSさんもこのような大家や店を媒介として、何人もの人と知り合っており、Sさんがまちの生活に受け込むきっかけになっている。このようなまちの主のいる場合は、人びとを結びつけること自体を目的とする場ではないが、まちで生活する人びとが特定の手続きなしにアクセスでき、選択的に人間関係を構築できる場となっている。

さまざまな「居方」の許容される居場所

銭湯は、誰でも入ることができ、また実際さまざまな人が集まってくる場所である。例1のOさんや例2のGさんのように毎日同じ時間にやってきて、そこで知り合った風呂仲間と毎日のようにおしゃべりする人がいる。自分体が不自由だが、知り合いがいて手伝ってもらいながら入浴する人もいる。顔見知りはあるが、会釈をする程度で会話は交わさない人、友達どうしで連れ合って来ている人、特に知り合いもなく一人で入浴しているが、人の言葉を何となく聞いている人。このように、銭湯で見られる人との関わり方は多

様であり、個人がなんら縛られることなく、その人に応じた関わり方を選択してその場にいられるのである。

これに対し、高齢者が無料で入浴できるような高齢者向けの公共施設はどうだろうか。ここは(高齢者であれば)誰でも自由に利用できるはずの場所なのだが、実際は「一度も使ったことがない」(Oさん)「一度行って懲りた」(Gさん)といった人が多いようだ。というのも毎日のように通う常連の人が顔を利かせており、そうでない人はかなり肩身の狭い思いをすることになるという。また、そんな老人ばかりのところには行きたくないという。ここでは、ある特定の居方・関係が強いられるのである。

これは公共施設のあり方を考えるときにかなり示唆的なことだろう。本来誰にでも開かれているはずの「公共」施設のほうが、実際にはある特定の人たちによって「閉じられて」おり、それに対し銭湯のほうがさまざまな人に「開かれた」居場所となっているのである。

都市の生活「資源」としての場

次ページの図13、4は、ヒアリングから得られた、既成市街地・公団住宅団地の両地域での人とのコミュニケーションの行なわれる場を、その場所へのアクセスの質によって表1-1のように四分類して表わしたものである。計画された団地に比べまちの中には、量的にも質的にも人と人との出会う場が豊富に存在していることがわかる。これら数多くの場が人と人とをさまざまなレベルで結びつける仕掛けとして機能しており、そのような多くの仕掛けに支えられることによって前に述べたような多様な人間関係が都市の中に展開されている。それらは都市の「資源」といっても良いだろう。これらの「資源」の果たす機能が、決して専門家の計画によって与えられたものではないことは、計画団地の中にそれがきわめて乏しくしか実現できていないことから明らかである。また団地の建設以来三〇年という時間だけで自然と醸成されてきたあがるものでもなかった。都市の「資源」は、そこが人びとの日々の生活の舞台となり、「人びととの生活の中で場所は創られ、また反対

に場所が人びとの生活を形づくっていく」*4。ような人間と環境との関わり
過程を経て構築されてきたものといえるだろう。このような点で計画者が
「ふつうのまち」から学ぶことはまだまだたくさんある。

4 開かれた都市コミュニティの形成

生活の場としての都市

もともと都市は多様な人びとが集まる場所であり、そこには異質な人たちが一つの地域に集まって住むための共生の作法があったとする見方がある*5。それは「人によって違う」ことを前提としながらもお互いの存在を認め合うものであり、統制化された集団の中で役割分担をしたりお互いに助け合うような（ムラの）コミュニティとは質的に異なるものである。都市に住む人にとっては、組織としてのコミュニティを機能させるためではなく、都市に住む一人ひとりがその内外で主体的な自分の生活を構築するためにこそ、地域との関わりが重要になってくるだろう。そのためには都市の側に、多様な人のそれぞれの生活を包み込む許容性と、新しい人を受け入れていく弾力性があることが必要である。その許容性・弾力性を支えているものが、ソフトとしての「共生の作法」やハードとしてのまちの「資源」なのではないだろうか。だからこそ、都市における個人個人の生活の場を支える基盤となる「資源」をここでは「都市コミュニティ」の重要な要素として扱ってきた。

都市コミュニティと「開かれた」仕掛け

言い換えると、都市コミュニティを成り立たせているのは、政策や制度などの大きなシステムではなく、個人と都市との関わりとの焦点となるさまざまな場や人などの個々の小さな仕掛けといえる。これは単に空間的な近接性（近くに住んでいること）と時間的な歴史性（長く住んでいること）によって自然に成立するというものではない。そこにさまざまな仕掛けが存在することによって、居住者のアクセスし得る多くのチャンネルが確保されている

図-3 コミュニケーションの場：既成市街地

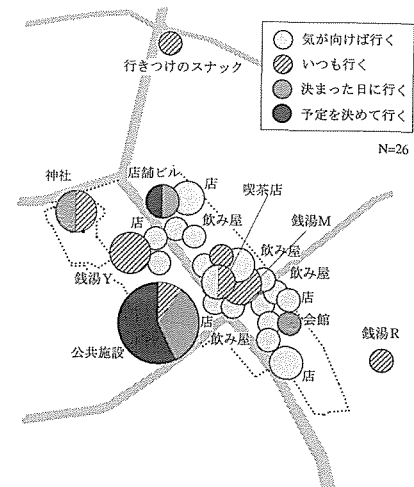
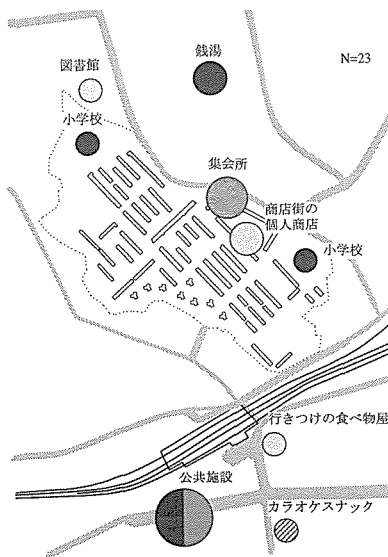


表-1 コミュニケーションの場の4分類

その場にアクセスする際の時間的拘束性によって、4段階に分類した。横軸に集まりの規模をとって、それぞれの場を位置づけてある。一般的に下・右に行くほど、その場での自分の居方や他人との関係が限定される。

図-4 コミュニケーションの場：公団住宅団地



| アクセスの質 | 個人的 ← | → 集团的 |
|----------|---------|---------------|
| 気が向けば行く | 買い物 | 店の人と懇意 たまり場の店 |
| いつも行く | 銭湯仲間 | ラジオ体操の会 常連仲間 |
| 決まった日に行く | 習いごと | カルチャーサークル |
| 予定を決めて行く | 個人的な集まり | 組織の会合 |

ことが大事なのである。それらの仕掛けがまちの許容性・弾力性を支えるためには、それが特定の人たちに対してだけでなく、どの個人にとっても「開かれている」必要が

ある。それは単に開けっぴろげなオープンさではない。利用したいと思ったときに自由にアクセスし得るきつかけが与えられており、自分の働きかけの程度によって、その場での振る舞いや他人との関係を限定されることなく自然と選択し得るということである。まちの中の「開かれた」チャンネル一つひとつは、そのようなまさに現在行なわれている人間と環境との相互作用・相互浸透によって構成されているのである。

そういった複雑なしくみによって支えられた「開かれた」仕掛けが都市の中に数多く、多様に存在していることが、都市の重層的で多様な人間関係を構築していく。その結果、多様な個人の生活を許容するような、都市として「開かれた」コミュニティを形成することになる。

「開かれた」建築・都市計画へ

「開かれた」仕掛けという意味からすると、現在広がりつつある電子ネットワークはさまざまな可能性を持っている*。ただそれは地域に置き替わるものというより、既存の地域に重ね合わせて存在していくものだろう。特にその従来にはない多様なアクセシビリティは、かなり強力なツールとして新たな一つの選択肢を供給してくれるものであろう。現状では、まだリアルな社会に対してクローズドなものになっているが、今後まちの中にアクセスポイントが適切にデザインされていくなれば、開かれた仕掛けが地域から次第に減少している現在、人と人を結びつける新たな仕掛けとしての意味・可能性ともに大きくなっていくと思われる。

また、市民活動のレベルでも、旧来的で閉鎖的な町内会に異を唱え、単一価値的な反対運動を脱皮した市民たちが、地域の価値を見直し、新たな「開かれた」仕掛けとしてのまちづくりなどの活動を目指して動きつつある。

これらの社会的動きに対し、これまでの都市計画や建築計画では、このような「開かれた」場を提供することをどれだけ考えてきたのだろうか。さまざまな使われ方を想定し、それぞれに対して機能を割り当てていくという考え方からは、なかなかそのような場所は生まれそうもない。都市が「開かれ

た」場所であることを認識しながら、昔どおりの「閉ざされた」施設によって人をつないでいこうとする計画の考え方は、もうとつづくに改められる時期にきているのだろうか。

（たちばな・ひろし／早稲田大学人間科学部人間健康科学科助手
すずき・たけし／東京大学大学院工学系建築学助手
しのぎ・まさひこ／東京大学大学院工学系建築学博士課程

〈註〉

1 社会学の分野では、ライフスタイルの変化や高齢化の進行などにより、個人の地域生活の重要性が相対的に増加すること、また現在の肥大化した中央集権型システムの限界から、地域規模の問題処理システムが重要となることが指摘されている（蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会）。

経済学の分野でも、脱産業社会の到来に伴いサービス要求の個別化が進み、サービス供給主体の縮小化・地域化が求められることなどが指摘されている（山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』中央公論社）。

2 東京大学建築学科高橋研究室では一九九一年から「特定地域の包括的研究」として、東京都内の住商混合した低層密集市街地に焦点をあて、子ども・高齢者・住環境などのさまざまな視点から調査・研究を行なってきた（高橋鷹志、鈴木毅、橋弘志他「人間環境系としての地域に関する研究」一九九三年度日本建築学会大会学術講演梗概集E）。

3 前註の研究の際に比較対象として、昭和三〇年代後半に建設された都内の大規模な公団住宅団地で調査を行なった。

4 開宮陽介「都市と社会的共通資本」（宇沢弘文・高木郁朗編『市場・公共・人間』第一書林、一九九二年）。

5 倉沢進編『現代のエスプリ328——地域社会を生きる』至文堂。ここで倉沢らは、都市生活の知恵として「人のプライバシーには余り立ち入らない、そっとしておく、しかし人が本当に困ったときには手助けをする、またそのような心的用意をする、つまりは程の匿名性とサラサラとした共生の作法」があったと述べている。ここでいう「共生の作法」とは、さまざまな意味での異質・多様性を認め合って相互に折り合いながらもに築く共同生活の規範・様式を指す。

6 鈴木毅「場所としての電子ネットワークその公共空間としての可能性」（アーキファォーラム in OSAKA, No.2 一九九四年）。

すまいのテクノロジー

住環境整備と

コミュニティの

組織化

——フィリピンの事例から

薬袋 奈美子

1 はじめに

海外へ、特にフィリピンなどの国々へ行つてま
ちづくりにかかわる人に案内をされた時に、「あ
なたの職業は？」と聞くと「community organizer」
という答えが返ってくることが多い。コミュニテ
ィ・オーガナイザー、コミュニティを組織する人
という意味である。日本語に訳しにくいことから
みても、日本ではあまりコミュニティを組織する
という概念が定着していないと考えられよう。
コミュニティとは何であるか。近年多様な意味
に使われているようであるが、ここではフィジカ
ルにまとまっている住居等の単位をさすことにす



コアハウスの建設。コミュニティ内の人を雇って行なう。

る。その規模は五世帯程度かもしれないし、一十
世帯にものぼるかもしれない。どちらにおいても
コミュニティとは地域的な単位であると考ええる。
さらにそれは単に集合して住んでいるに留まらず、
何らかの共通の関心事について話し合いのできる
ような関係を築いている集合体であることが必要
だ。このような状態になることをコミュニティが
組織化されたという。

本稿では、フィリピンの首都マニラのある中低
所得者の住む地域の活動を紹介する。どのような
活動をとおしてコミュニティを形成し、住環境を
整備したのかを見てみたい。

2 マリガヤ地区の概要

フィリピンでの中低所得者層の住宅問題は深刻
であり、その中でも不法占拠者(squatter)の問題
がことに大きい。スラムという言葉よりも不法占
拠地区という言葉が使われる。人口が急激に増加
し経済の発展とともに住宅の需要が急増していく
なかで十分に供給されないまま、遊休地に不法占
拠をする人びとが非常に多い。

フィリピンでの住宅問題の解決には、まず住民
が積極的に問題に取り組む姿勢が求められる。特
にこのような不法占拠地区ごとに住民が組織化さ
れ、問題に組織として取り組む方法が多々みられ
る。マリガヤ地区もそんな地区の一つだ。

マリガヤ地区はフィリピンの首都マニラ郊外の
ケソン市ラグロ地区に位置する。ここは必ずしも
通勤に便利な場所とはいえない。マニラの中心部
からジブニー(一種の乗り合いバス)でラッシュ
時でなくても一時間ほどかかってしまう。多くの
人はジブニーの運転手や日雇いの建設労働といっ
たインフォーマルセクターに従事しており、収入
はかならずしも多くない。一九九一年のヒアリン
グ調査の時点では、この地区の住民の平均月収は
四〇〇〇〜五〇〇〇ペソであり、最低限必要とさ
れる六〇〇〇〜七〇〇〇ペソの三分の二程度しか
なかった。そのため不法占拠して質の悪い住宅に
住むという不安定な生活環境の中で、子どもたち
にも十分に学校に行かせてあげられない等の問題

を抱えていた。そのような状況で、同じような問題意識を持つ人びとがカトリックのシスターの尽力で組織され、この地区で土地購入の交渉を地主と行ない、現在は新しい住宅の建設をすすめている。活動の結果、生活が向上し住宅環境も良くなったという成果は、周辺地区にも知られるところとなった。この地区自体は約二〇〇世帯を対象としているが、その後、関心を示した近隣地区の住民が、この地区の人びとのアドバイスを得ながら同様な活動を行なっていることから、この活動の成果がうかがわれる。

3 組織化への活動を分析する

(1) シスターによる語りかけ

この地区の組織化はカトリックのシスターの為せることが大きい。シスターは不法占拠をしている家庭を訪問し、今、何に困っているのかを聞き出し、住民自身も改めて現状を認識する機会とした。そして重要なことは、ここでシスターのみが住民の話を聞き、組織化を誘導するのではなかったことだ。住民自身が自分たちで組織化できるよう、シスターが住民どうしでの話し合いを働きかけたのである。住民は自分だけが問題を抱えていたのではなく、多くの人が似たような問題を抱えていることに気づいた。このような話し合いをすることから、組織をつくって問題を共同で解決していくという意志が芽生え、それがこのコミュ

ニティの組織化につながった。

住民どうしではたとえ共通の問題を抱えていることがわかりそうな状況であっても、何かのきっかけがないと、問題に正面から取り組み、話し合いをして解決の糸口を見つけたことは困難なのである。話をするきっかけをつくりだす人の存在は重要である。そしてその際大切なのは、住民自身が組織化の主役となれるようにすることではないだろうか。

(2) 生活を向上する努力

共に語り合いを始めた仲間には、新たにコミュニティを形成して生活を営むことのできる場を探し、ラグロに現在の地を見いだした。まずは、雨露をしのげる程度の簡素な住宅を建設し、コミュニティを形成し、新しいまちをつくりあげる計画を練ることから始めた。

入居してからは週一回以上のペースでミーティングを開き、計画をたてていった。その際、当初語りかけを始めたシスターも当該地に住み込みアドバイザーとしての役割を果たしていったことを忘れてはならない。そのミーティングでは、具体的に新しいまちのフィジカルな計画ばかりでなく、生活を向上させるためには何ができるのかという点も話し合われ、実際にさまざまな活動を行なった。その中でも初期に始めたのは米の共同購入である。彼らの食料事情は決して良いものではなかった。十分な栄養が摂取できないために子どもたちの

健康に支障がでることもあった。そこで食料の基本となる米を安価で確保できるようにする努力をコミュニティですることになり、共同購入を始めた。この共同購入は米を入手できるということだけでなく、コミュニティとして一つの活動を展開することで、共同意識を高めることにつながっている。

米の共同購入ということは、各人の生活を向上させることであり、潜在的な要求の一つでもあった。それを集まって話し合う中から見いだして実行し、さらにその行動をもって各人が意志を確認しあう場をつくりだしている点は興味深い。共同体の一員であることを確認する行動ともなっている。

(3) 家畜の共同飼育

このグループの活動は、多くの外からの支援によっても支えられている。シスターがかかわっていることも勿論その一端であるが、日本からのグループの財政的な支援もその中にある。「アジアレインボウの会」[※]はこのグループに対して、共同で豚を飼育して育った豚を販売して収益をあげることを支援している。レインボウの会では個人に対して支援を行なうのではなく、グループに対して支援を行っており、コミュニティとしての活動が活発になることを願っている。

豚の飼育では、毎日の飼育においても、個人で行なうよりは当番を決めて行なうことで個人の負担が軽減し、住民自身もやってみようという気に

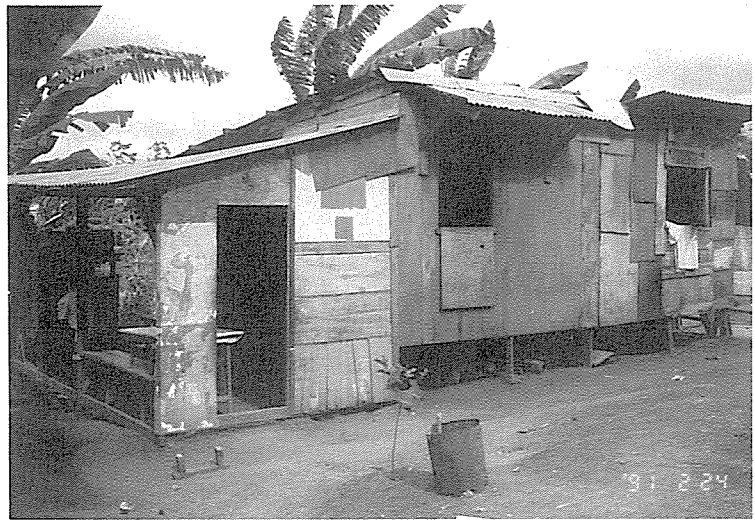
なるであろう。そのいっぽうで、「SUNDAY WORK」と呼ばれている共同作業として、家畜小屋を建設することになり、実際に共同で一つの建物を建てる過程でコミュニティ意識も芽生える仕掛けとなっている。

コミュニティの組織化には、住民自身が問題意識を持ち、自分たちで活動を展開することも大切ではある。しかし外からの支援として、コミュニティでの活動や組織化を自ずと意識することになるような仕掛けを提供することも大切であろう。

(4) 共同体意識の上になりたつ融資

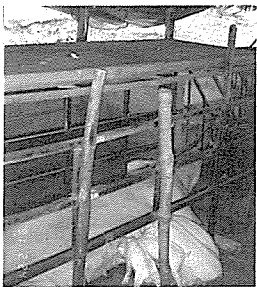
このように住民が十分に共同体としての活動を展開し、意識が芽生えたことで、大きな支援を得ることができた。地主からコミュニティとして共同で土地を買い上げるための資金を、スペインのNGOであるマノソニドスから提供されることとなった。これを受けて、地主とコミュニティとして交渉をし権利を得ることができた。

さらに一部のメンバーを大工として雇ってコアハウス[※]の建設も始められた。財政的に全員に対して一度に供給できるわけではない。収入が安定し、返済を継続的にできる見込みが立てられた世帯から順に完成した住宅に入居し、返済された資金からまた次の住宅を建設するという方式をとっている。コミュニティとしては非常にリスクの大きい方法であるといえよう。入居者がコミュニティの財産をきちんと返済する意識が育っていないと、



従前の住宅。とりあえずここに入居していた。

結局、コミュニティ内に新たな「不法占拠者」を生み出すことになってしまう。さまざまな活動を通してコミュニティの一員としての意識が十分に持て、かつ収入にも問題の無い状態になっていく必要がある。



共同で飼育している豚。小屋は共同建設。

現実にはインフレによる住宅建設価格の急騰によって、当初予定していたように住宅建設計画が回転していない。しかし、コミュニティの一員としての自覚ができた上での事業として非常に興味深い。

4 「コミュニティ組織化のステップ」

以上、フィリピンのマリガヤ地区でのコミュニティ活動をたどり、その組織化へのきっかけをみてきた。それらを復習する。

- ① シスターによる語りかけ
 - ② 生活を向上する努力
 - ③ 家畜の共同飼育
 - ④ 共同体意識の上になりたつ融資
- 以上の四点は、各々次のような意味を持つ活動だといえよう。項目ごとに挙げてみる。
- ① コミュニティ活動へのきっかけをつくる人的存在を確保する。
 - ② 解決が比較的容易な問題を共同で解決する。
 - ③ 共同での活動が行なえるしくみを提供する。
 - ④ 共同体の一員としての自覚を持った行動をとる。

以上の四ステップは、どのコミュニティにも必要なステップではないだろうか。その過程で生まれるものは地域内の高齢者介護であるかもしれないし、都市計画的な課題であるかもしれない。いずれにしてもコミュニティの一員としての自覚が住民の一人ひとりに芽生えることで、解決される

問題は多い。以下に各ステップにおける他の活動例を挙げてみる。

①はいわゆるコミュニティ・オーガナイザーやコミュニティ内でのリーダー育成によって行なわれよう。②は、地域内での小さな問題から解決しようとするればよい。ゴミ拾いなどといったこともその一つかもしれない。③は外から仕掛けることでコミュニティ活動を促進するものであるから、行政による事業等も考えられよう。フィリピンで近年注目を集めているコミュニティを単位とする不法占拠地区に対する住環境整備のための低利融資事業「コミュニティ抵当事業」³もその一例である。④では、実際に責任をもって住民が地域の計画を考えることなどがあてはまる。

コミュニティの組織化とは非常に対象範囲の広い仕事である。フィジカルな改善としての住環境整備という大きな課題に取り組むためには、コミュニティが十分に組織化されている必要がある。そのためには住民がコミュニティの一員としての自覚を持っていることが大切であるが、逆にフィジカルな改善に取り組むことを契機として自覚を持てるようになることもある。いずれにしても常にコミュニティの組織化は意識されるべき課題である。

5 おわりに

本稿ではフィリピンという近くて遠い国での活

動を中心にコミュニティの組織化の一考察を行なった。しかし、これはよその国だけの話ではなく、日本での住環境整備にも適応できるものである。意識的にはないかもしれないが組織化のための四ステップが踏まれるべきだ。

にわか仕立ての都市計画事業を遂行するためのコミュニティではなく、生活のためのコミュニティが大切である。それができていれば、いつでもフィジカルな改善は、良き専門家にさえ出れば容易である。フィジカルな改善もわれわれの生活をよくするために行なうものであることを忘れてはいけない。

(みない・なみこ／ACHR JAPANメンバー)



入居後に増築した例。サリサリストア(雜貨屋)になっている。



完成した住宅。棟割になっていて、これで2世帯分。

〈註〉

1 アジアレインホーの会・障害児の親等で発足した会。自分たちの問題に留まらずに、さまざまな形で問題を持っている人びととネットワークを持ち理解を深めようとしており、フィリピンを中心にネットワークを広げている。実際にこの地区を訪れて、財政的な支援を見えないところで行なうに留まらず、人と人との交流を深めようとしている。

2 コアハウスとは、住宅の水まわり及び外壁、屋根のみを建設しておいて、それ以外の部屋の間仕切り等は入居者が必要に応じて漸次建設するタイプの住宅である。発展途上国で低所得者の住宅供給手段として、たびたび用いられる方法である。参照・中村哲也・他「フィリピンにおける住環境改善事業に関する調査研究」その5 住民によるコアハウスの増改築の考察」日本建築学会大会学術講演梗概集、一九九三年九月。

3 コミュニティ抵当事業については、以下の論文等を参照。内田雄造・他「フィリピンのコミュニティ抵当事業に関する調査研究」都市計画論文集No.28、日本都市計画学会、一九九三年一月。葉袋奈美子・他「フィリピンのコミュニティ抵当事業における「オリジネーター」に関する研究―中間セクターとしての特徴と役割について」都市計画論文集No.29、日本都市計画学会、一九九四年一月。

〈参考文献〉

・安田奈美子・他「フィリピンにおける住環境改善事業に関する調査研究」その3 住み手による総合的な住環境改善事業の幾つかの事例」日本建築学会大会学術講演梗概集、一九九三年九月。

・Housing the Poor - The Asian Experience, J. Anzorena, Asian Coalition for Housing Rights, 1995.

・穂坂光彦「アジアの街わたしの住まい」明石書店、一九九四年一月。

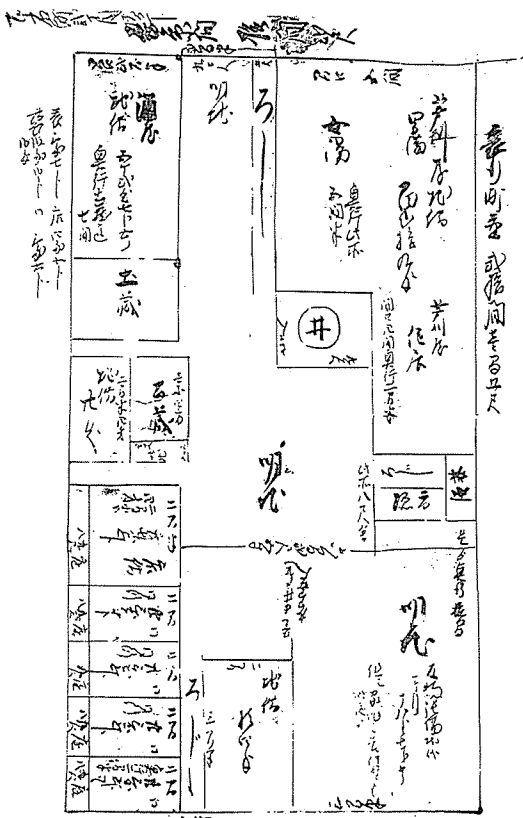
私のすまいるん

特集●都市コミュニティの再認識

江戸・明治の庶民住宅

家居は至而粗末にて、上方ニ似るべくもなし……

小木新造



本石町二丁目の五軒長屋（国立歴史民俗博物館所蔵史料）左下の部分が五軒長屋。

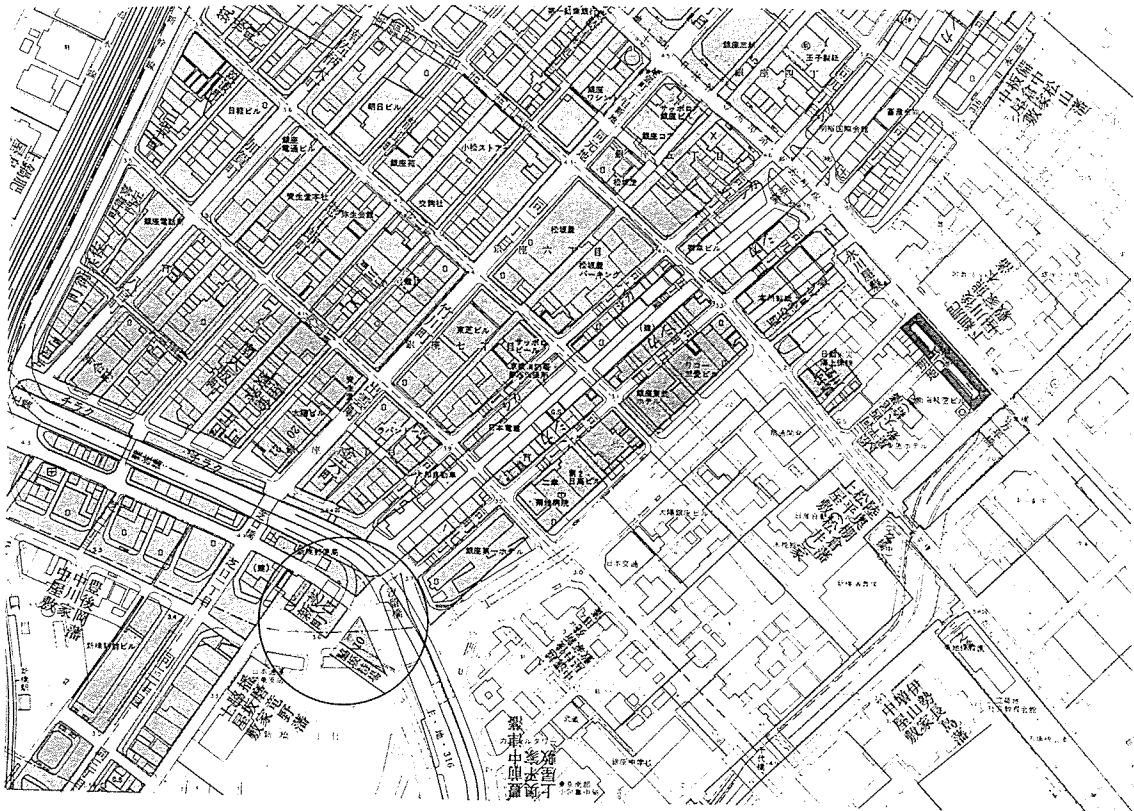
一、裏長屋

川柳『柳樽』に「ひとり者店賃ほどはうちに居ず」という句がある。男性過剰都市江戸下町の長屋の住人の様子を詠んだ句に違いないが、たまに

帰った長屋で朝寝を楽しもうとすると、隣家から合図がある。

「椀と箸持つて来やれと壁をぶち」と親切な隣

江戸復原図（東京都）丸印を付したところが汐留新町・三角屋敷のあったところ。



りのかみさんが朝飯を馴走してくれる。

鍵もなければ、壁の破れに錦絵を貼っている程度
の明け放しの住人どうしのコミュニティは簡単に
できあがる。神田上水、玉川上水の桝桶のある
井戸端は、かみさん連中の世間話の場であり、町
内に一軒や二軒あつた髪結床は男の女性評の場
もあつた。

職人には大工、左官などの出職と、桶屋や指物
屋のような居職があつたが、雨天続きの出職の経
済状況も考慮した居職のかみさんが、前掛けの下
に惣菜をドンブリに入れて「つくりすぎたから食
べてよ……」ともつてくるあたりは、出職の家計
を思いやる心のぬくもりを感じさせるものがある。

長屋の生活規範とでもいうべきものがあるとす
れば、「引越そば」などがあげられよう。新しく長
屋に住まいするときの仁義として、「よろしく」と
挨拶があつてはじめて仲間入りできるが、それを
怠るような人とは付き合わぬということは固く守
られていたようである。

紀州藩付の医者が江戸っ子を評して「人気の
荒々しくは似ず、親切なること感に堪えたり」(『江
戸自慢』)とは、いいえて妙である。常に出入りの
激しい江戸社会では、どこの国の人でも相手を尊
重する姿勢があればすぐコミュニティができたの
が、その特徴であつた。

こうした裏店の標準サイズは九尺二間、間口九
尺(二・七メートル)に奥行二間(二・六メート
ル)、畳四畳半に一畳半が出入口と台所、押入もな

ければ便所は外の共用である。鍋釜は自前として
も、行灯や蒲団、冬季のこたつなどの家庭用品は、
すべてリースを行なう損料屋の仕事である。「損料
屋夫婦喧嘩の門に立ち」という川柳は、足繁く通
う損料屋と長屋の住人との関係を象徴するかのよ
うに思える。

長屋の構えも、たび重なる火災で、次第に粗末
になり「九尺店長辛らしい梁ばかり」という有様
で、屋根は柿葺き(トントン葺き)か、かきがら
葺き、まさに吹けば飛ぶような住まいである。勿
論、言葉も人氣も荒い。それでいて、「人気の荒々
しき二似ず、道を問へば下賤の者たり共、己が業
をやめ、教えること叮嚀にして、言葉のやさしく
恭敬する事、感ずる二堪たり」(『江戸自慢』)と、
紀州藩の医者は江戸っ子の人情味のあるところを
ほめそやしている。

この『江戸自慢』の著者は、江戸の家の造りを
和歌山と比較しながら次のように述べている。

「家居は至而粗末にて、上方二似るべくもなし、
壁土は汚漬泥ニ粘なく、風雨の堪へがたき故、壁
の上を板張ニし、瓦をふくも僅かに端の方ならで
土を不用、蹴れば瓦は悉く落るなり、かまどは清
き粘土を用ゆれど価貴く、実に土壺升錢壺升と言
ふべし、火ニ焼くるも、江戸の家十軒は上方の一
軒にかけ合ふ、箸で家建て糞で壁ぬるとは、江戸
の小家の事なるべし、瓦の価は若山に三倍す」

これが幕末の江戸の庶民住宅、ことに裏長屋の
実態であつた。

これより先一八世紀半ばには、これとは全く異
なるケースもあつた。利根川筋の河岸間屋が江戸
のど真中、本石町二丁目横丁に間口二間半と二間、
奥行三間位とおほしき五軒長屋を経営していたこ
とが、国立歴史民俗博物館所蔵文書でわかる。し
かもそれには八、九尺幅の裏庭がセットされ、十
畳ないし八畳に押入付きの長屋で、裏長屋のイメ
ージを変えさせるものがある。

二、明治二年汐留の町屋

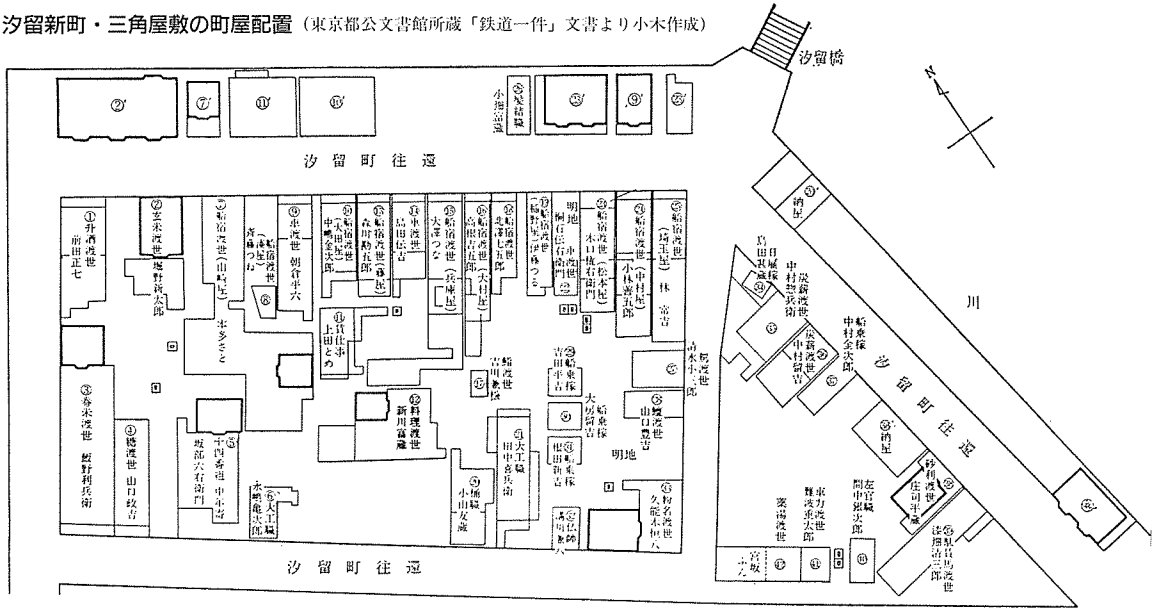
汐留新町・三角屋敷は、新橋ステーション用地
の一角にあつた。ここは浜御殿にほど近く、旧播
州電野藩脇坂淡路守上屋敷の隣接地に当り、四二
軒の町屋があつた。

この土地を政府が買収すべく東京府に民情調査
を依頼した際、東京府が工部省へあてた上申書が
公文書館に残され「鉄道一件」としてまとめられ
ている。ここには面白いことに職業が明記されて
いる。

船宿一、船乗稼人四、車屋三、大工職二、炭
薪屋二、のほか駄賃馬、駕、車力、砂利、玄米、
升酒、春米、粉名、糠、料理、鮓、鱧、左官、日
雇、桶、髪結、賃仕事、仏師、薬湯、中年寄各一、
計四二となつている。

これを見ると、江戸東京に数多くあつた船宿町
の一つで、「右之場所二居住のもの共は、船宿又は
水主渡世のもの二面」とあることや、「右渡世之者

汐留新町・三角屋敷の町屋配置 (東京都公文書館所蔵「鉄道一件」文書より小木作成)



引払い対象建造物建坪、査定引料手当一覧

| 番号 | 職業 | 屋号 | 氏名 | 柿葺平家 坪 | 同二階建て 坪 | 瓦葺平家 坪 | 同二階建て 坪 | 土蔵 | 穴蔵 | 河岸 柿葺 | 同納屋 | 河岸瓦葺平家 | 同二階建て | 河岸土蔵 | 査定引料 | 査定手当 |
|----|-----|-----|---------|-----------|------------|-----------|------------|------|------|----------|-------|--------|-------|-------|-------|------|
| 1 | 酒米 | | 前田 正七 | | | 8.50 | | | | | | | | | 96 | 14 |
| 2 | 玄米 | | 堀野 新太郎 | 8.00 | | | | 8.75 | 1.00 | | | | | 24.50 | 1,270 | 190 |
| 3 | 米 | | 飯野 利兵衛 | 27.65 | | | | 6.25 | | | | | | | 280 | 42 |
| 4 | 糖 | | 山口 正吉 | 13.00 | | | | | | | | | | | 29 | 4 |
| 5 | 中年寄 | | 坂部 六右衛門 | 0.80 | | 15.50 | | 5.00 | | | | | | | 306 | 46 |
| 6 | 大工 | | 永嶋 龟次郎 | 6.00 | | | | | | | | | | | 13 | 2 |
| 7 | 船宿 | 山崎屋 | 木多 さと | 46.00 | | | | | | | | 2.30 | | 4.00 | 496 | 74 |
| 8 | 船宿 | 湊屋 | 森藤 つね | 3.50 | | | | | | | | | | | 11 | 1 |
| 9 | 車 | | 浅倉 平六 | 10.25 | | 1.00 | 4.00 | | | | | | 6.00 | | 287 | 43 |
| 10 | 船宿 | 大田屋 | 中嶋 金次郎 | 7.25 | | 1.00 | 12.00 | | | | | | 15.00 | | 189 | 28 |
| 11 | 船宿 | | 上田 富蔵 | 1.75 | | | 3.00 | | | | | | 13.33 | | 65 | 9 |
| 12 | 料 | | 新川 五郎 | 18.25 | | | | 3.00 | | | | | | | 162 | 24 |
| 13 | 船宿 | 藤屋 | 森川 勘五郎 | 2.00 | | 1.00 | 9.00 | | | | | | | | 93 | 13 |
| 14 | 船宿 | | 島田 伝吉 | 4.50 | | 4.50 | 6.00 | | | | | | | | 77 | 11 |
| 15 | 船宿 | 兵庫屋 | 大沢 つな | 4.44 | | 1.00 | 12.25 | | | | | | | | 131 | 19 |
| 16 | 船宿 | 大村屋 | 高根 吉五郎 | 4.00 | | | 6.75 | | | | | | | | 75 | 11 |
| 17 | 船宿 | | 吉川 兼松 | 1.75 | | | | | | | | | | | 3 | 2 |
| 18 | 船宿 | | 北沢 七五郎 | 2.75 | | 0.75 | 4.50 | | | | | | | | 54 | 8 |
| 19 | 船宿 | 稲野屋 | 伊東 つる | 0.50 | | 0.75 | 6.50 | | | | | | | | 63 | 9 |
| 20 | 桶 | | 小山 友蔵 | 6.50 | 4.00 | | | | | | | | | | 34 | 5 |
| 21 | 大工 | | 田中 嘉兵衛 | 5.50 | 12.00 | | | | | | | | | | 79 | 13 |
| 22 | 車 | | 桐石 伝右衛門 | 3.00 | | | | | | 3.75 | | | | 12.00 | 341 | 46 |
| 23 | 船宿 | 松本屋 | 木口 権右衛門 | 4.00 | | 2.00 | 6.00 | | | | 6.25 | | | | 89 | 13 |
| 24 | 船宿 | 中村屋 | 小林 善五郎 | 5.00 | 4.00 | 1.00 | 6.00 | | | | 6.00 | | | | 112 | 16 |
| 25 | 船宿 | 埼玉屋 | 林 常吉 | 10.00 | | 1.00 | 7.00 | | | | | | | | 99 | 14 |
| 26 | 船宿 | | 小畑 富蔵 | 6.00 | | | | | | | | | | | 13 | 2 |
| 27 | 駕籠 | | 清水 小三郎 | 6.00 | | | | | | | | | | | 13 | 2 |
| 28 | 船宿 | | 山口 豊吉 | 5.25 | | | | | | | | | | | 10 | 1 |
| 29 | 船宿 | | 吉田 平吉 | 3.50 | | | | | | | | | | | 7 | 1 |
| 30 | 船宿 | | 大房 留吉 | 3.00 | | | | | | | | | | | 6 | 3 |
| 31 | 船宿 | | 根田 新吉 | 3.00 | | | | | | | | | | | 6 | 3 |
| 32 | 船宿 | | 溝川 兼八 | 3.75 | | | | | | | | | | | 7 | 1 |
| 33 | 粉日 | | 久能 木恒 | 10.50 | | | | 7.50 | | | | | | | 282 | 42 |
| 34 | 薪 | | 嶋田 甚蔵 | 2.00 | | | | | | | | | | | 4 | 2 |
| 35 | 炭薪 | | 中村 惣兵衛 | 6.99 | 8.75 | | | | 3.00 | | | | | | 87 | 13 |
| 36 | 炭薪 | | 中村 留吉 | 5.25 | | 6.00 | 5.00 | | | | | | | | 54 | 8 |
| 37 | 船宿 | | 中村 金太郎 | 5.50 | | | | | | | | | | | 11 | 1 |
| 38 | 砂利 | | 庄司 平蔵 | 5.50 | | | | 5.00 | | | 10.00 | | | 15.00 | 679 | 101 |
| 39 | 駄賃 | | 添畑 清三郎 | 15.65 | | | | | | | | | | | 31 | 4 |
| 40 | 左車 | | 間中 銀次郎 | 3.33 | | | | | | | | | | | 6 | 1 |
| 41 | 車 | | 難波 重太郎 | 3.75 | | | | | | | | | | | 7 | 1 |
| 42 | 薬 | | 宮坂 ぶん | 4.00 | 6.00 | | | | | | | | | | 42 | 6 |
| | 雪隠 | 請負人 | 坂上 政七 | 0.50 | | | | | | | | | | | | |
| | " | 地主 | 青柳 嘉七 | 0.25 | | | | | | | | | | | | |
| | " | " | 溝川 兼八 | 0.50 | | | | | | | | | | | | |
| | " | 請負人 | 小林 銀之助 | 0.75 | | | | | | | | | | | | |
| | " | 請負人 | 中村 惣兵衛 | 0.50 | | | | | | | | | | | | |

| | 麹町区 | 日本橋区 | 神田区 | 京橋区 | 芝区 | 麻布区 | 赤坂区 | 四谷区 | 牛込区 | 小石川区 | 本郷区 | 下谷区 | 浅草区 | 本所区 | 深川区 | 合計 | |
|------|-------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|---------|-------|
| 煉瓦家屋 | | 4 | | 105 | 2 | | | | | | | 1 | 4 | | 3 | 119 | |
| 2階 | | 3 | | 814 | | | | | | | | 1 | 1 | | | 819 | |
| 3階 | | | | 3 | | | | | | | | | | | | 3 | |
| 土蔵 | | 5 | 157 | 20 | 40 | 7 | 3 | 1 | 2 | | 3 | | 8 | 7 | 1 | 254 | |
| 平家 | | 18 | 381 | 40 | 464 | 13 | 13 | 6 | 17 | 1 | 3 | 1 | 7 | 6 | 3 | 973 | |
| 2階 | | | 28 | 3 | 13 | | | 6 | 17 | 1 | 3 | 1 | 7 | 6 | 3 | 44 | |
| 3階 | | | 23 | 13 | 38 | 5 | 1 | 1 | 1 | 4 | | | 8 | 5 | 5 | 99 | |
| 金属葺 | | 1 | 18 | 6 | 23 | 2 | | 1 | | | | 1 | | 3 | | 55 | |
| 2階 | | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | | 1 | 2 | | 7 | |
| 3階 | | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 6 | |
| 硝子葺 | | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 6 | |
| 2階 | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | 3 | | 6 | |
| 塗家 | | 5 | 47 | 35 | 512 | 10 | | 2 | 1 | 1 | 2 | 4 | 3 | 27 | 3 | 664 | |
| 平家 | | 1 | 157 | 48 | 903 | 10 | 3 | 3 | 1 | 3 | | 5 | 2 | 80 | 1 | 1,229 | |
| 2階 | | | 2 | 4 | 1 | | | | | | | | | 6 | | 13 | |
| 3階 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 杉皮葺 | | 11 | 18 | 27 | 111 | 51 | 42 | 23 | 19 | | 32 | 11 | 41 | 50 | 95 | 531 | |
| 平家 | | | 3 | 6 | 18 | 5 | 4 | 1 | 2 | | 1 | 1 | 9 | 1 | 8 | 59 | |
| 2階 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 葺・藻葺 | | 3 | 1 | | | 138 | 453 | 268 | 107 | 644 | 839 | 247 | 320 | 147 | 195 | 74 | 3,436 |
| 平家 | | 1 | | | 20 | 62 | 4 | 5 | 33 | 56 | 8 | 22 | 4 | 4 | 2 | 221 | |
| 2階 | 1,751 | 5,793 | 6,027 | 6,296 | 4,551 | 1,578 | 1,122 | 2,082 | 2,715 | 1,833 | 3,415 | 3,299 | 5,382 | 2,960 | 2,689 | 51,493 | |
| 3階 | 851 | 4,350 | 3,274 | 1,786 | 1,782 | 401 | 497 | 514 | 373 | 229 | 830 | 623 | 1,332 | 528 | 579 | 17,949 | |
| 瓦葺 | | 4 | 1 | 1 | 5 | | | 2 | | | 5 | | 3 | 1 | 1 | 23 | |
| 平家 | 1,559 | 1,292 | 1,817 | 1,327 | 1,910 | 755 | 350 | 409 | 1,151 | 1,029 | 1,481 | 1,392 | 2,995 | 3,281 | 1,938 | 22,686 | |
| 2階 | 1,123 | 4,998 | 2,826 | 1,982 | 3,238 | 606 | 297 | 193 | 612 | 691 | 1,139 | 1,288 | 3,893 | 2,471 | 2,350 | 27,707 | |
| 3階 | | 5 | 12 | 7 | 4 | 6 | 3 | 1 | | | 5 | 2 | 2 | 1 | 2 | 51 | |
| 西洋造 | | 7 | 2 | 11 | 16 | 4 | 2 | | | | 1 | | | | | 43 | |
| 平家 | | 9 | 5 | 12 | 6 | 4 | | | | 2 | | | | | | 39 | |
| 2階 | | | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | 4 | |
| 3階 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 4階 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 5階 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| 紙瓦葺 | | 4 | 2 | 2 | 2 | | | | | | | 1 | | | | 9 | |
| 平家 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | |
| 2階 | | 3 | 1 | 14 | 4 | | | | | | | | | | | 22 | |
| 石造 | | 4 | | 47 | 1 | | | | | | | 2 | | | | 54 | |
| 平家 | | 2 | | 12 | | | | | | | | | | | | 15 | |
| 3階 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | 5,354 | 17,318 | 14,184 | 14,543 | 11,769 | 3,926 | 2,569 | 3,343 | 5,553 | 4,719 | 7,158 | 7,008 | 13,956 | 9,574 | 7,664 | 128,638 | |

共、稼先得意場水辺二面」とある史料が、これを裏付けている。

この地区の引き払い対象建造物の全容を一四番組中年寄（江戸時代の町名主）坂部六右衛門から東京府への上申書を整理し一覽表にまとめてみると、右のとおりとなる。

この表で目に付くのは、一戸建ての家として、船宿、春米屋、升酒屋、糠屋、中年寄、料理屋、大工、粉名屋、炭薪屋、駄賃馬屋、葉湯屋などこの時代の建物としてその坪数は妥当と思われるが、

あとは狭隘な一戸建てが極めて多いことである。そして棟割り長屋の住居空間に相当する三坪の独立家屋も存在する。船乗り稼ぎ人大房留吉・根田新吉の家屋がそれで、同じ職業の吉田平吉の家はそれより〇・五坪、つまり畳一畳分だけ広い。また日

雇い稼ぎ人嶋田甚蔵の家は二坪、仮に畳三畳を敷いたとすれば、あとは押入れ、便所のスペースもなく畳一畳分の土間のみが残るだけである。さらに鮎屋吉川兼松の家は一・七五坪で最狭小の住居空間である。これはもちろん行商の鮎屋と思われるが、一人身ならともかく、夫婦二人だったらどのような生活をしていたのか、その様態を想像しても見当もつかない。

また大工、左官、髪結い、鱷屋、仏師なども六坪以下の住まいで、ことに髪結い、鱷屋など店舗部分の当然必要な職業の場合、六坪ないし五・二坪の建物全体から推して、その居住部分の狭隘さは、船乗り稼ぎ人や日雇い稼ぎ人などと変わらない条件下にあったと判断されるのである。

またこの資料で気付くのは、瓦葺き家屋に住まうのは升酒屋前田正七と、車屋島田伝吉、それに炭薪屋の中村留吉の三軒だけで、あとは柿葺きの家である。

この柿葺きは杉の薄板を女竹で押えたトントン葺きといわれる粗雑のもので、俗にこの柿葺きの家を「焼家」と称していた。それは別表「明治十二年東京十五区人民家屋棟数一覧」で見るとおり、この時期でも東京十五区全体の五四パーセントを占めていたのである。火災の際、付け木の役割りをする柿葺きだけに「焼家」といわれるのも無理はなく、火災都市江戸東京の汚名は明治期後半まで続くのである。

(おき・しんぞう／東京都江戸東京博物館館長補佐)

コレクティブハウジング——家族スタイルとコミュニティ

小谷部 育子

私に与えられた仮題は「家族スタイルとコミュニティ——高齢者の独居生活」であった。我が国では、二〇二〇年には六五歳以上の人口比率が二五・五%、しかもその半数以上が七五歳以上という超高齢社会の到来が予測されている。都市化、核家族化、女性の社会進出がさらに進み、このような社会の潮流の必然として高齢者のみの世帯、あるいは高齢者の単身世帯が飛躍的に増大すると予測される今日、特に不安に満ちた高齢者の一人住まいに対して夢と希望が持てる処方箋は無いものか、というのが仮題趣旨であろうか。

しかしここでは、高齢者の独居生活に新しい家族スタイルとコミュニティの必要性、という短絡的な構図ではなく、社会人として成熟した個人主義を身につけた自立する大人たちが、子育てを終えた第二の人生を、あるいは定年退職後の人生を、自分らしく生きようとしたときに選択し得る、しかし自身の直接的インヴォルブメントによってのみ可能なもう一つの家族スタイル——オルタナティブファミリー——があることについて述べてみたいと思う。

最近話題の本『脳内革命』（春山茂雄著）からの孫引きではあるが、心理学者のA・H・マズロー博士の「欲求段階説」によれば、人間の基本的欲求には、①生理的欲求、②安全の欲求、③所属と愛の欲求、④承認の欲求、⑤自己実現の欲求の五つがあり、その欲求は①から⑤へと段階的に、一つが達成されると次が生ずる、という。欲求の次元が高いほど社会や他人との関係性の中で自覚できる自己存在といえないだろうか。一人であろうが、血縁、非血縁関係であろうが、高齢期ほど身近な物理的、人間的住環境のありかたや

住環境への自身の関わり方が、いわゆる「生活の質」を左右するのだという理解のための、また一つ有力な理屈に使わせていただいた。

本稿は、全体から見ればマイナーな存在とはいえ、コレクティブハウジングが都市居住形態のタイプとして定着してきたスウェーデンでの一事例についての報告である。その建築のつくられ方、参加した人たち、そして生活実態について紹介し、スウェーデン社会における位置づけを考察する。超高齢社会を迎えようとしている、しかし都市居住のかたちを未だ見いだしていない私たちが何を学べるかは、読者にまかせることとする。

熟年層が選択したコレクティブハウス・フェルドクネツペンの理念と実現まで

フェルドクネツペンは、国鉄ストックホルム南駅を含む住居を中心にして再開発された新市街と、一〇〇年、二〇〇年前の建物が残る旧市街のエッジに位置し、一九九三年に完成したコレクティブハウスである。特徴は、公共の賃貸住宅にもかかわらず、プロジェクトそのものが特定のグループにより発案され、入居条件に年齢枠を設け、企画から設計まで将来居住者の主体的参加のもとに六年がかりで実現したものだ。そのグループのコンセプトとは、子どもたちが成長し独立をした後は、今まで住んでいた大きな家は子どもたちの世代に譲り、親世代はコンパクトで便利で社会的コンタクトと相互扶

助のある、そして自分らしい老後を安心して住み続けられるもう一つの家を、まだエネルギーのあるうちに自分たちで創ろう」というものである。高福祉国家といわれるスウェーデンにおいて、高齢者福祉のより高い質や経済の効率性が求められているとき、必要に応じた行政サービスを期待しつつも、可能な限り自由で自己決定に基づいた自立した老後を、居住者自身が物理的、人間的な環境づくりに関わることに依って実現したい、という考え方は、充分、社会的説得力を持つものであり、ストックホルム市の非営利住宅会社の一つが供給を引き受けることになった。

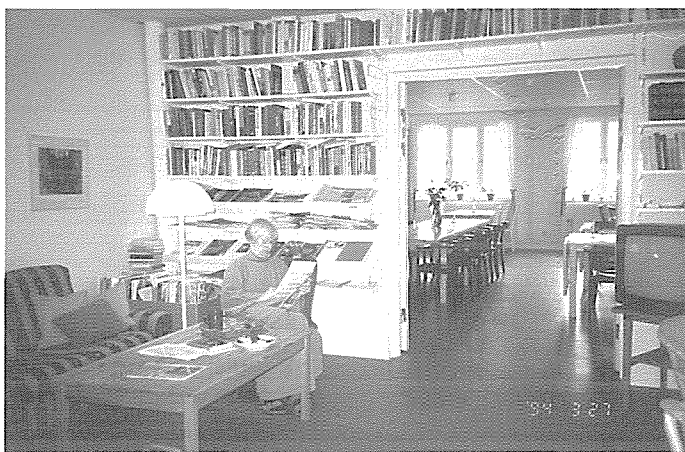
しかし、ユーザイニシアティブのプロセスは長い時間を要した。オリジナルグループが提唱する、コンパクトな住戸とセルフワークへのこだわり、後に参加した、終の住処として十分な広さの住戸と地区在宅サービスのステーションの施設を組み込みたいグループの調整はむずかしく、結局、後者のほとんどのメンバーは途中で去っていった。実現までの期間が長くなるにつれて、メンバーもかなり入れ替わった。しかしながら、その長さ故に培われたコレクティブリビングのコンセプトや合意形成の手法のメンバーによる共有が高く評価されるべきであろう。当初の考えでは、生き生きとした大人のコレクティブハウスとして四五歳以上を対象にしていたが、現実にもっと若い入会希望者が現われ、最終的な入居の資格は四〇歳以上、同居する学童期の子どもがいないこととした。現在（一九九五年一月）、四〇歳から八五歳までの単身または夫婦の四三世帯、五三人が住んでいる。将来的にも、高齢者のみにならないよう年齢バランスをとっていききたいとしている。

コンパクトで個性的な住戸とリッチな共用スペース

この住棟は四三戸の住戸と、住戸の延長として組み込まれた共用室群、および廊下、階段、エントランスホール、各種機械室などいわゆる集合住宅のパブリックスペースからなる。住戸は日本的に言えばワンルーム住戸から2LDKで、規模は三六㎡〜七六㎡とスウェーデンの基準（四五㎡〜八三㎡）

とくらべるとかなりコンパクトであるが、これは各住戸の持ち分から一〇〜一三%を供出し約五〇〇㎡の共用室用面積を生み出した結果である。コンパクトにした各住戸のプランやバスルームの設備内容、内装材料や色彩については、公共住宅の枠内とはいえ、将来の入居者の意向が反映された。

共用室としては、一階に大きな厨房と食堂、談話や図書・シンコーナのある多目的室、織物・アイロン室、工作室があり、地階には写真暗室、サウナと将来介護入浴を可能にする大きな浴室、屋上に暖炉のあるサニールーム、またゲストルーム二室と居住者組合のオフィスがあり、それらの内容や大きさ、配置はもちろん、設備や内装に関しても設計段階で建築家と入居者組織が協力して決定されたものである。その他、集合住宅として、ランドリー、トランクルーム、駐輪場、ゴミ室等も当然設備されている。ランドリーは一階の多目的室、アイロン室



左/図書コーナーでモーニングコーヒーを。
下/明るいランドリー。



に接した明るい南側に配置された。

また、省エネルギーや環境問題についても意識の高いフェルドクネットペンの入居者組織の要望により、各住戸の冷蔵庫をはじめ、共用部分の設備機器は省エネタイプが選択され、庭にコンポストの設置も実現された。

このように、空間のつくられかたの中に、密度の高い参加のプロセスで築かれてきたコレクティブワークの成果が、そしてこれからもフェルドクネットペンらしいコレクティブリビングの舞台として機能するハード、ソフトの下の地が埋め込まれているのだ。

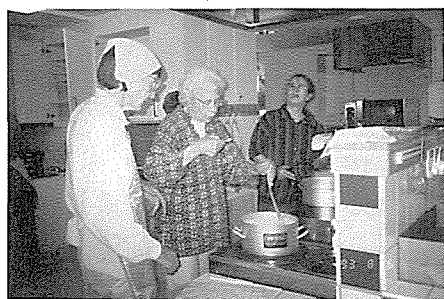
共同の食事運営を核とした協働居住 ——もう一つの家族のしくみ

フェルドクネットペンの運営組織としては、対外的な理事（五人）とプランニング、インテリア、アート、庭、図書、クリーニンングなどのアクティビティグループがあり（一九九五年現在二グループ）、居住者は少なくとも一つのグループに属することを原則としている。日常的に起きてくるコレクティブリビング上のほとんどの問題はインフォーマルな個人間やアクティビティグループの中で解決されるが、全体の連絡や決定機関としては、月一回のハウスミーティングと年一回の総会がある。さまざまなアクティビティへの参加や発案はもちろん自由であるが、他のセルフワークタイプのコレクティブハウジングと同様、ここでもウィークデーの夕食の共同運営と共用スペースの清掃への参加が居住者として義務的作業となっている。

クッキングチームは八〜九人で構成されており、一グループが月曜日から金曜日までの夕食の準備片づけを一週間担当する。夏の二か月およびイースター、クリスマス休暇の週を除き、六週間に一度当番が回ってくることになる。グループは老若組み合わせているので、仕事をする時間や仕事内容をグループ内で調整しあい、また個人的に都合をつけあっている。食事づくりへの参加は原則として義務であるが、食堂での食事は本人の自由であり、食べ

る場合は前もってゲストも含めて予約をしておく。メニューは担当チームが一週間前までに決めて掲示してあるので、メニューによって参加・不参加も自由である。ベジタリアンやアレルギーを持った居住者のための細かい配慮もされる。温かいメイデンティッシュの他、定番としてチーズ、パン、クネツケボード（西洋煎餅）、サラダ、コーヒー、紅茶が用意され、金曜日には手づくりのデザートが出る。食費は予めクーポンを購入し、月曜から木曜までは七クローネ券（約一〇〇円）二枚、金曜日は三枚で、入居二年の現在も不足なく運営されている（食材だけでなく、厨房の光熱費、食器や調理器具の補充、洗剤、食堂のキャンドルや小さな花までまかなっている）。ワイン、ビールなどアルコール類が飲みたい人は各自持参する。大皿一枚とサラダプレートですむシンプルな食事といえるかも知れないが、熟年層のコレクティブハウスだけあって、調理や栄養学の元

右/コモンダイニングでの食事風景。
下/コモンキッチンの一風景。



口がいたり、料理愛好家の居住者も多く、この食事の味はなかなか上等である。毎回平均三五人ぐらいが食堂で食事をしているが、フルタイムで仕事をしている年齢層が不規則にならざるを得ないことを考えると、高齢者の多くはほとんど食堂で食事をしていることになる。入居一年半後の調査では、コレクティブリビングにおいて食事サービスがあること、食事準備片づけへの義務的参加があることは、いずれも全ての年代層に非常に重要だと評価され、特に六五歳以上の高齢層は、クッキングチームでの仕事に対する満足度が高く、「日常的な生活の中で真の仕事を持つことの喜び」と表現した人もいることは特筆すべきことであろう。一人住まい、あるいは夫婦だけの生活が長かった高齢者、あるいは高齢者と日常的にふれあうことのない四五〇歳代にとって、六週間に一度、共に台所に立って三、四〇人分の料理をつくり、食事のサービスをし、片づけの作業をすることは、おおいに刺激的で、豊かな人間関係を築く機会となるだけでなく、新しい家族の一員としての帰属感と自覚を意識させることになるのではないだろうか。共同の食事運営がコレクティブハウジングの心臓部であるといわれるゆえんである。

賃貸住宅では階段や廊下、共用のトイレ等、いわゆるパブリックスペースの掃除は本来住宅会社の地区管理センターが担当しているが、ここでは、居住者組織が住宅会社から請け負ったかたちで自分たちで分担して行ない、その分、個人が支払った管理費から一部、居住者組織が払い戻しを受ける契約になっている。この払戻金が共用室の整備やアクティビティグループの活動資金となるのだ。

ウィークデイの夕食準備・片づけと共用部分の掃除の分担。もともと日常的な家事、いわばケの部分の協働化が、生き生きとしたもう一つの家族関係を築いているのがわかる。

都市居住とコレクティブハウジング

以上のように紹介すると、コレクティブハウジングでは日常生活において

やや面倒な高い共同性を持っているようにみえるかもしれない。しかし実は、居住者は毎日の家事や家の手入れ、家を留守にすることの不安から開放されて、戸建て住宅に住んでいた以前よりもずっと自由なリラックスした個人の生活、活動的な社会的生活を享受しているのだ。フェルドクネッペンの居住者の住まいに対する満足度の高さの要因の一つとして、その立地とトータルな生活と地域との関わりを挙げないわけにはいかない。入居希望者は、もともこの地域に、あるいは近くに住んでいたり、親兄弟が近くにいたり、職場に近かったり、という人も多いのだが、徒歩圏内でも多様なショッピングや新旧のバーやレストラン、またスポーツ、映画館、劇場などの文化施設があり、散歩しながら水辺につながる公園や緑道があり、地下鉄、国鉄、バスへのアクセスも非常に便利、隣接する新しく開発された住宅群には若い家族と子どもがいっぱい、まさに、職・住・遊が、そして新旧の文化が共存する地域なのだ。仕事や趣味、友人づきあいなど、社会的な接点を持ち続けた自立した大人たちにとってこのような都市的環境は魅力的だ。そして、この都市的環境がフェルドクネッペンの自由な雰囲気の開かれたコミュニティを成り立たせているともいえるのではないだろうか。

高齢社会のオルタナティブ住宅として

子どもは一般的に一八歳になると親から独立して生活するようになり、結婚して三世代の同居はまずない。社会的サポートがあるので単身でも仕事と子育てが可能だ。老後の経済的・生活も医療も保障されている。というスウェーデンでは、高い出生率（特殊出生率二・二人）にもかかわらず平均世帯規模は二・二人（一九九三年）と少なく、単身世帯は全世帯の三分の一を占める。人口八〇万人のストックホルムでは全世帯の四〇％近くになるといわれる。現在六五歳以上の高齢者は全人口の一八％で、今後は後期高齢者が増加し緩やかに高齢化が進むと予想されている。一方住宅は一九九〇年現在人口一人当たり平均二室（居間、台所を除き一室）四七㎡に達し、住宅ストックの四分

の三は一九四〇年以降の建設のものであり、規模以外に遮音性や音熱環境、バリアフリー化など量質ともに高い水準を誇っている。

このような恵まれた住宅事情の中で、高齢期の住まいの選択肢も、大きな家に住み続けて、必要であれば住宅改造をし在宅サービスを受けるか、安心のために街の中心部にある公共のサービスハウスに住むか、あるいはコーポラティブのシニアハウスを購入（居住権）するか、といちおう整っている。一般的には、クリスマスやイースターに帰ってくる子どもたちのためにも住み慣れたわが家で生涯を送りたいと思うのは洋の東西を問わない。福祉の方向も在宅ケアである。

では、第二の人生のために、あるいは最後の住処^{すまか}としてコレクティブハウスを選んだ人たちは、どのような住居観を持ち、そこに何を期待しているのだろうか。フェルドクネッペン^{フェルトクネッペン}の入居予定者の調査（一九九二年 小谷部）から、従来の戸建て住宅や集合住宅、あるいはサービスハウスでは得られないもう一つの生活の質に対する強い指向が伺える。

彼らの考えるもう一つの生活の質とは、

- 静かな、しかし刺激的な成熟した大人の住環境
 - 日常的なコミュニケーションを通して育つ計画しない相互扶助
 - 物理的、心理的、生態的に安全で健康な生活
 - 相互理解により保障される自由とプライバシー
 - 日常生活の一部を共同化することによる時間、空間、経済の節約
 - 参加と自己決定の結果としての創造的生活
 - 豊かな人間関係を通して自分自身を育てる可能性
 - 豊かな文化的、社会的生活が享受しうる都市の生活
- というものであり、このような生活の質を保障するもう一つの住まいがコレクティブハウス・フェルドクネッペンなのだ。

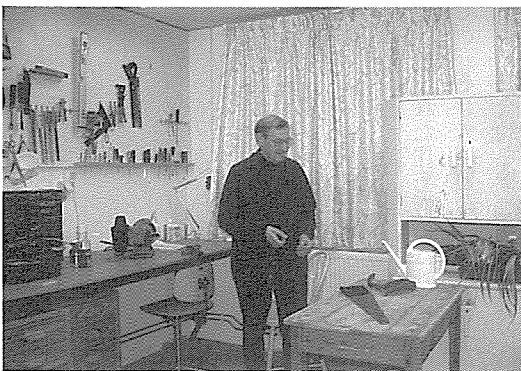
コレクティブハウジングは、個人生活の最大限の自由とプライバシーを前提にして成り立つ、緩やかな協働を組み込んだ集住形態ともいえる。居住一年半後の調査（一九九四年二月・アンケートによる居住評価 小谷部）では、このコレ

クティブコミュニティでの生活は、共同の食事運営を核として、居住者の多くが私的生活、共同生活ともに期待以上に満足できるものであると評価している。そして人びとは明らかに入居前よりもリラックスして生き生きとしているのが感じられる。入居まだ間もない時期に総合的な評価をすることは避けるべきであるが、日常生活の中で起きてくるさまざまな問題を居住者自身で解決し、状況にフレキシブルに対応しつつ成長していく姿が読みとれる。しかし、現在の居住者のまま高齢化したら協働の生活はどのように変質していくのか。自立が不可能になったときコミュニティとしてどう対処するのか。空き家が出た場合、計画どおり年齢のバランスが取り得るのか、等々、やがて居住者が直面するであろう課題は大きい。それらを取り越えながら居住者があえて心構えを意識しないで「私の家」と思えるとき、熟年層のコレクティブハウジングは、彼らにとっても一般的にも、高齢社会のオルタナティブ住宅になり得るのだろう。

（こやべ・いくこ／日本女子大学家政学部住居学科助教授）

下／木工室で趣味の工作を。

（写真はいずれもフェルドクネッペン 写真／小谷部 育子）



〈論文〉—— 1

日本の現代住宅設計に何が見えるか

——日本の小住宅設計における特性

植田 実

この論文は、シンポジウムへ向けての他の三編の論文と併せて、『研究年報』22号(一九九六年四月刊)に掲載いたします。



まず、ここ四、五年の間に出現した、建築家の設計によるいくつかの住宅を紹介したい。それぞれのタイトルのはじめに、第一の家、第二の家、と、少し気取ったナンバリングをしているのは、それぞれの住宅の気分によって、できれば文体や語り口をちよつと変えたいという意識があるからだ。筆者は研究者ではないので、先立って設定したテーマのもとにいくつもの作品例を見ることを避けている。この稿では当然、全体を貫くテーマを一応考えざるを得ないが、それによって住宅の見方を限定されることをおそれている。それによって設計者の意図が痩せて見られることをおそれている。

だから、事例1、事例2、ではなく、第一の家の物語、第二の家の物語のつもりである。

第一の家

●伊東邸

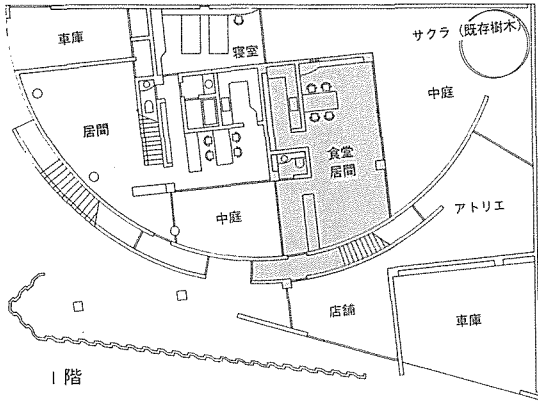
東京・世田谷区 一九九一年 設計・安藤忠雄建築研究所

東京の高級住宅街にあり、敷地の周囲に高い壁をめぐらし、その内側に正方形グリッドに乗った部屋が重なる三世帯住宅の複合体。といえは、五年前につくられた同じ小田急線沿線の代田の「K邸」(設計は同じ安藤忠雄建築研究所。以下、この項で触れている住宅はすべて同様)にも通じる立地と建築構成である。よく似ている。しかし全く違つともいえる。

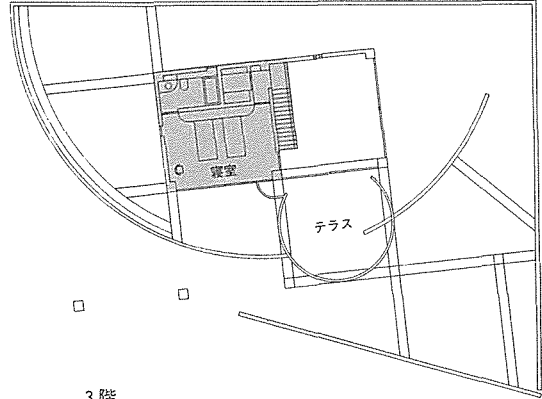
K邸は、世田谷の台地特有の入り組んだ道のなかに隠された屋敷で、ほぼ正方形に近い敷地を囲む壁の中央に立方体が置かれ、周壁の一部が円弧状に曲げられ

て、エントランスガーデンの目隠しや二階入口へのアクセスになっていたが、それに対して「伊東邸」は、成城の平坦で格子状の道路が広がる、その一交差点に思いがけないほど長い壁を見せている。K邸では、あまりにも整然とした立方体の壁の一部に動きを与えていた円弧の壁が、今度は矩形の敷地をギリギリに切り取る直径一五メートルの半円に大々的に増幅されているからだ。つまりふつうなら道路に面してL字形に囲われるべきところを、一枚の高いコンクリート壁が、端から端までぐーんと連続して延びているのである。

この半円の壁のなかに、部屋のほとんどがとりこまれている。奥深く、静謐感を漂わせているK邸に比べて、家のなかまで強く支配する大きな円弧のかたちは、ある活気を生み出している。それは、前者が、若い夫

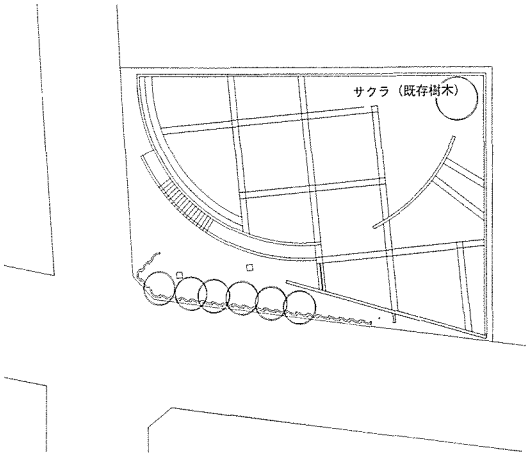


1階

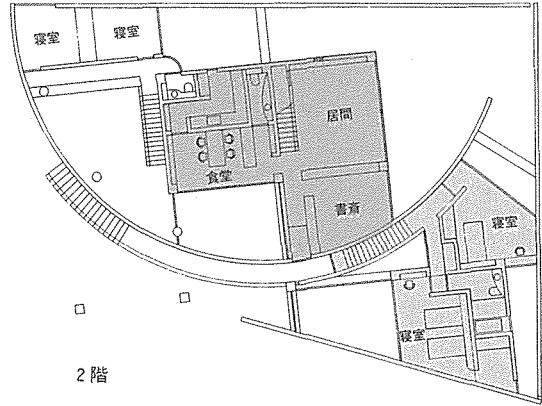


3階

平面図 1/400



断面図 1/600



2階



■ 住戸A ■ 住戸B □ 住戸C

婦の住まいを上階に乗せ、下階に親の住まいを据えているのと反対に、上に親の家、下に子供たちの家を重ねているからだ。さらにその一戸は道路側にブティックを開いたりしているためもあるだろう。それぞれの住まいが十分に独立している点と同じだが、上階のエントランスへと円弧の壁に沿って張り出されたブリッジを歩いてくると、突き当たりの透明ガラス越しに下の家の階段室が垣間見えたり、中庭に、上下の家族の部屋が顔を出していたりと、どこか賑やかだ。それ以前につくられた「九条の町屋」や「野口邸」のようなコンパクトで下町風な都市住宅にどこか通じるとさえいえる。

だからといってこのような開口部の構成が、それだけの家族のプライバシーを侵す気配はない。むしろ、この複合体は、各住戸のなかに、さらに独立した領域への焦点をもっている。

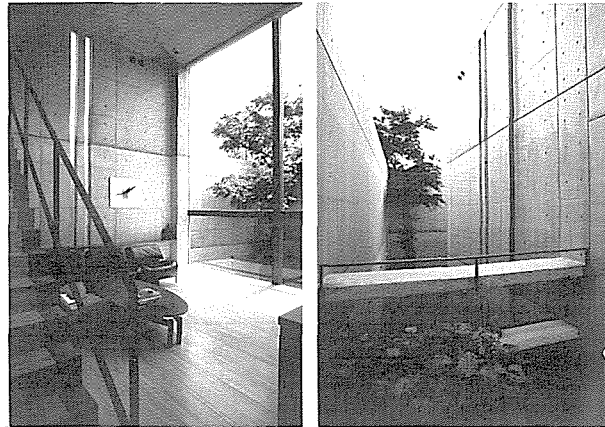
だいたい、この複合体における三戸の住まいは、安藤のこれまでの住宅にはなかったと思うほど、それぞれに空間と仕上げの表情が変えられている。ブティックのある住まい（図面では住戸B）は円弧壁の外と内とに店舗空間と居間・食堂がうまい具合に分けられており、その境界壁のなかに収められた階段室で二階の寝室と結ばれている。居間・食堂はコンクリート打ちし、寝室は白いプラスチック仕上げである。この住戸と、玄関が向かい合う（円弧状のブリッジの下、中央で途切れている部分）もうひとつの交差点寄りの住戸（図面では住戸C）は、くびれた小さな入口ホールから居間に踏み込むと、二層吹抜けのなかに円柱が立ち並ぶ真っ白な空間に驚かされる。しかも円弧の壁は室内から中庭まで連続しているために、居間そのものまで特別な庭でもあるかのような感覚にとらわれてしまう。

●伊東邸

東京・世田谷区 1991年 設計：安藤忠雄建築研究所

居間と食堂を結ぶ階段わきの狭い通路は、その奥の主寝室への通路や収納棚と一体になってひとつの節目をつくり、二つの部屋の性格も大きく変えられている。スカイライトや円柱やカーブする壁でカッコよく装った居間と、お茶の間的な気さくな雰囲気のある食堂と。中庭はこの二つの部屋のいわば交差点に位置して、それぞれの外部空間として無理なく連続している。つまり、二重の性格が与えられている。この住戸は他の部屋もすべて白いプラスチックで壁が仕上げられている。安藤の住宅としては本当に珍しい。

上階の両親の住まい（住戸A）は、いちばんシンプルで開放的だ。入口ホールとスタジオ、二層分の高さの居間、台所・食堂がL字形に連結され、三階の寝室は居間上部と屋上に開かれ、二層の住まいが二つの中庭に挟まれている。ここはすべて打放しコンクリート。若い夫婦の二つの住戸にとりわけ顕著なのは、それ



住戸Aの居間から桜の木を見る。

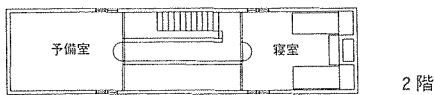
住戸を囲む壁と桜の木。



道路側外観。

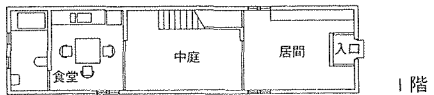
●住吉の長屋

設計：安藤忠雄建築研究所

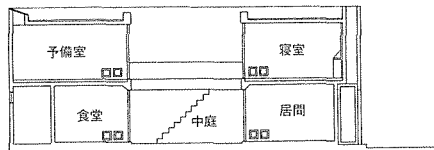


2階

平面図
1/300



1階



断面図 1/300

それぞれの部屋がくびれたかたちで結ばれ、さらにその延長であるテラスや中庭が不整形であるために、前に言いかけた、独立した領域の焦点の分散が強く感じられるのである。つまり空間形状にしろ仕上げにしろ、各住戸の総体としての個性は十分に感じられるのだが、それぞれの部屋を束ねる中心としての部屋がどの住戸にもない。居間や食堂に全体が収斂しない。逆にまた寝室は個室として閉じていない。居間や食堂と強く結びついていない。

不整形によって部屋の分散が強く印象づけられる。それが伊東邸の大きな特性だが、安藤が住宅に対して新しく考えはじめた課題とみるよりは、むしろ「住吉の長屋」以来、一貫してもち続けてきた彼の住宅観が、遠く視角から一段と明確に見えてきた形である。三家族、いや大人六人・子供三人の共同生活が、多焦点的に、季節や時間や行為によって見え隠れする風景がこの住宅においてもつとも際立っている。それはたとえば、各住戸を連続・遮断する、玄関脇の大きな摺ガラスの扱いひとつにも投影されている。

この九人の住み手をひとつに束ねている唯一の焦点は、実はそれぞれの部屋の外側にある。居間も食堂も寝室も、室外の焦点に向いている。だから部屋同士の直接の結びつきが、それだけを見るかぎりには淡く感じられるのだ。焦点は、敷地の南東隅に残された大きな桜の木である。

K邸も、同じ南東隅にL字形の二本の木が守る中庭がある。それぞれの独立した部屋からの視線を緩やかに集める場所だが、この伊東邸ではその視野はより狭窄的になり、とりわけ南寄りと東寄りのそれぞれの寝室からは望遠鏡を逆さにして覗くような効果を強めている。最上階の寝室からも、その開口部と居間の開口

部を重ね合わせた視界がつけられており、その焦点は一本の桜に絞られている。それぞれの部屋から見える桜の木の身振りは少しずつ変わる。桜の木はボックス席から見る演劇舞台の背景であり、同時に主役でもある。伐採の手から逃れて家の内側に逃げ込んできたといった風情の姿は、高い開放しコンクリートの壁を背景にした、たった一本の樹木であるために、その花のひとつひとつ、葉の一枚一枚が、見る者の脳裏に克明に刻み込まれる。東側の壁沿いに植えこまれたシユプリカの鮮やかな緑とあわせて、この住宅における自然は、他に例を見ないほどに、ある切迫した表情を見せている。

住み手同士のプライバシーは高い。しかしどの部屋にいても見える桜の木の光景によって、家族という形式、あるいは居間に集うという形式を超えて、お互いが結ばれている。この桜の木や小さな中庭が、異なった部屋や窓を束ねているのである。

同じ自然に触れていることで、家族の身体性が発生する。この家は風通しがいい。そして人も通りやすい。視線だけが共有する焦点は強烈である。同時に、孫の個室を祖母がこっそり訪ねて行けるような、思いがけないドアや抜け道があちこちに隠されている。

第二の家

●葛飾の住宅

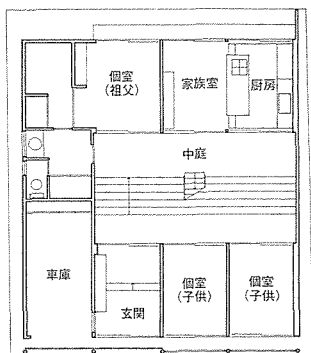
東京・葛飾区 一九九二年 設計：山本理顕設計工場

一九九二年のほぼ同時期に、山本理顕による二軒の住宅が完成している。まず「岡山の住宅」が彼の提唱した方向をよりいっそう強調しているといえるだろう。最初期の「山川山荘」あたりからの平面形がここに至

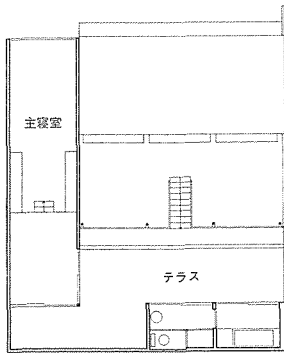
●葛飾の住宅

東京・葛飾区 1992年 設計：山本理顕設計工場

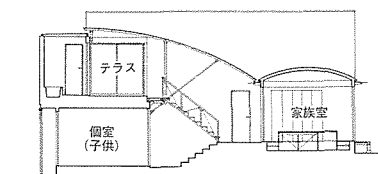
平面図 1/300



1階



2階



断面図 1/300



道路から見る外観。

つては驚くべき形で徹底しており、個室、厨房、水まわりの三つのブロックが情け容赦もなく引き離される。その結果、それぞれの棟が自立するための広いテラス、高い壁と屋根に覆われた前庭、開閉できる天井、等々の仕掛けが保護膠質のように現われてくる。家族構成やそのアクティビティの性格によっては、これは極端だという感想もあるだろうが、たとえばわが家の日常を頭の中で詳細に再現してみつつ、この家のプランを見ていると、絶対に住みやすそう。雨や雪の日もつといい。

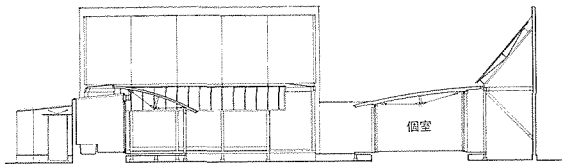
となると、この「岡山の住宅」に対しての「葛飾の住宅」は、どうしても中間的な位置に置かれてしまうかもしれない。

山本の言葉を借りれば、「家族という単位は今、実に中途半端な状態」にあり、個人住宅を設計することとは、この中途半端なままの家族と、そのなかにおける「私」との「しのぎ合い」を形にしていこうことだという。そして「岡山」は、「そのしのぎ合いから、「私」が家族をはるかにしのいってしまった図式」であり、一方「葛飾」は「今の家族の状況そのものを忠実に反映している住宅である。「私」と家族とは今、この「葛飾の住宅」のようにバランスしているという意味である」。

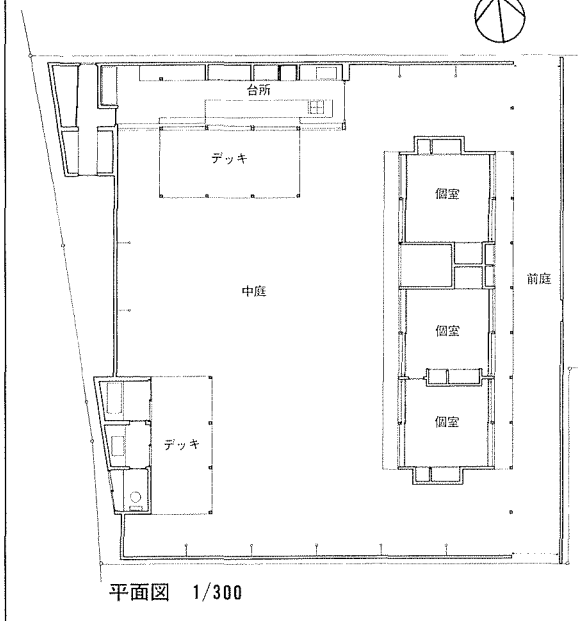
そう。「葛飾」のバランスの良さは、最近、他の建築家の手掛けた個人住宅群のなかでも、ある意味では際立っていることが注目されるほどである。

何といっても表通りに面して、普通の店舗みたいな顔をしているところがいい。「ストアフロント」は四つに等分割されていて、東寄りの二つの内側がいきなり子供たちの個室である。その奥に半屋外・段状の中庭、さらに奥に祖父の部屋と家族室がある。中庭を別

●岡山の住宅
設計：山本理顕設計工場



断面図 1/300



平面図 1/300

にすれば、家族が集まる部屋は、子供室と同じ広さのこの家族室だけである。夫婦の部屋は、この奥行きをそのまま反映するように南北に深い。祖父の部屋を要、あるいは切り換え点として、またその奥には、妹2家族の既存の家がある。つまりは、全体で四世帯の家族を、嫁の立場も考慮に入れつつ、幾重もの層空間のなかに、山本固有の平面形を重ね合わせているのだ。

子供室には、玄関―中庭を経なくても、道路から直接入れるようにもなっている。とはいえ「岡山」のように強烈に個室が自立していない。祖父の部屋も、よくあるように片隅に押しやられることなく、旧い家と新しい家を結びつけている。そして日常のハウス・キープイングの主役を果たす夫人の部屋は、主寝室と一応はなっているが、この家のなかではもつともくつろげ

る、おそらくは多目的なスペースを確保している。このあたりの気配りのよさ、そして結果として整然たる部屋構成に、建築家のバランス感覚を感じるのである。それにしてもこの平面は見飽きない。あたりまえの計画になっていない。それは、非情とも思える部屋構成の割り切りようにある。まるで中庭を挟んで、共同の浴室・洗面所を別に設け、玄関部を大きくとった木質アパートみたいだ。つまり、家族の形をとってはいるが、それを束ねる糸はルーズでもある。中庭は各個室を剥き出しにしていると同時に、部屋相互のクッションともなるだろう。生活のアクティビティしだいで微妙に相応を変える場所のように思える。多分、この住宅そのものが、現代の日本においてとりとめない家族と「私」との関係の変化を映しているのだろう。私

には山本の自邸「ガゼボ」よりむしろこの家に、彼の幼時からの住まい体験が反映されているような気がしてならない。

第三の家

●葉山の家

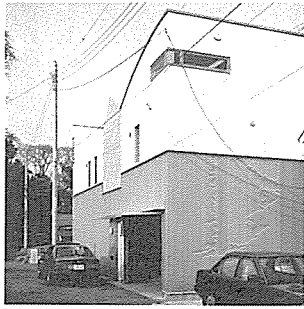
神奈川県 一九九二年 設計：飯田善彦建築工房

親と子が住むという点では、一般的な家族の住宅であるはずだが、母親と成人した娘二人、息子一人の家族構成で、しかも四人とも独身かつ独立しているとなると、平面形の様相は一変する。母も娘たちも一階北東のウイングに均一的な寝室（各部屋を仕切る引き戸を開けると長方形の一室空間になる）をもち、息子は南西のウイングに玄関とトイレ、ロフト付きの寝室という分離した領域をもつ。

といって、黒沢隆がかつて提唱した個室群住居とは微妙に違う。家族の方々の話だと、就寝時以外は個室にすることは少なく、皆が二階の広間に集まっているという。広間は集まって家族の団らんを楽しむこともあるし、あちこちのコーナーに散って（さまざまなテーブルや椅子や棚が具合よく配置されている）、ひとりひとり好きなように時を過ごすこともある。それだけの広さをもった部屋だ。大きなカフェテリアみたいな場所と思えばいい。しかもこの広間は、そのまま南東端のテラスや開かれた階段室やそれに続くテラスへと流れ出ている。二階テラスのオープン・エアのユーティリティには洗濯機が二台置かれていて、アパートの共同水場みたいな活気がある。ついでにいえば一階南端の浴室も小さな共同浴場みたいだ。ここは皆が寝静まった夜中に帰宅しても、庭から直接入れるよう

●葉山の家

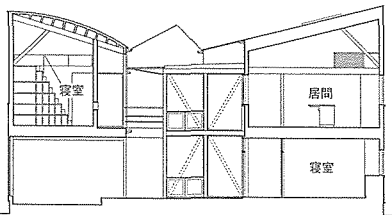
神奈川県 1992年 設計：飯田善彦建築工房



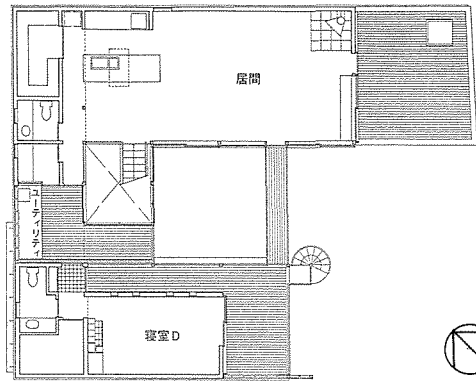
外観。



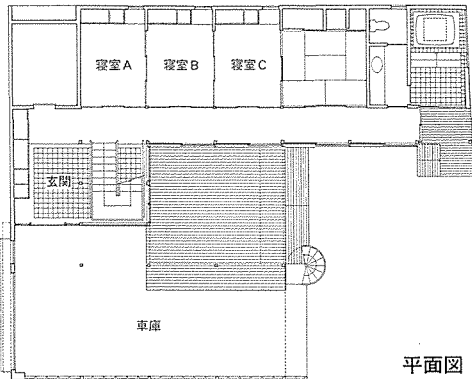
食事室より居間を見る。



断面図 1/300

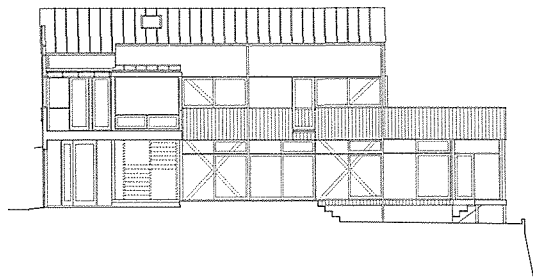


2階



1階

平面図 1/300



北東のウイングの個室群が、「個室にこもる」という機能を大胆に捨象することで、逆に、新しい家族像のリアリティを獲得している。むしろリッチな個室である南西ウイングの部屋の使い方はまだ流動的のようだ。同時にこの部屋は、総領息子、つまり家長の役割りを秘めた者の空間的位置づけがされているわけでもなく、いちおうは女のゾーンと男のゾーンを分けたといった印象である。このへんの曖昧な性格が面白い。

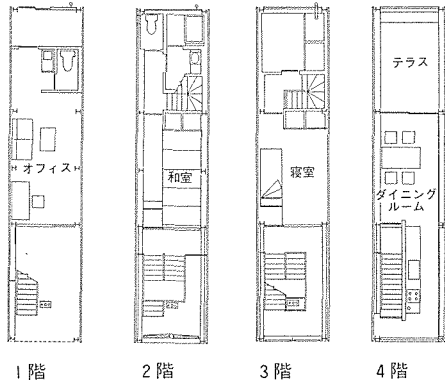
南側の庭の先は崖になって落ちている。だから、葉山の山々の眺望は思いきり広がり、こちらには外からのアクセスはない。北側の山の間を縫う自動車道路から南へ真つすぐ下っていく狭い道を左に入ったアクセス道路の突き当たりがこの家が建っている。家の形が南に全面的に開いているためにアクセス側の北面のファサードは閉じ、車庫のわきの小さなドアを開けて車庫と木のデッキと階段室がまる見えの、農家のようにのんびりしたスペースに入り、そこから改めて玄関ホールに入る。ドア一枚で道路から一挙に開放的な家の領域内へと転換する。「住宅」の枠に収めきれない空間がそこにある。ガラスで囲われた大きな階段室、自然に対してあまりにも開けっぴろげな室内と半屋外が広がっている。

閉じた北西面ファサードではあるが、北東と南西のウイングの異なる形態を、その断面形を寄せ集めて雄弁に語っている。さらに二階中央のユーティリティのような小さな場所においても、山型の目隠し壁が桧舞台に押し出している。

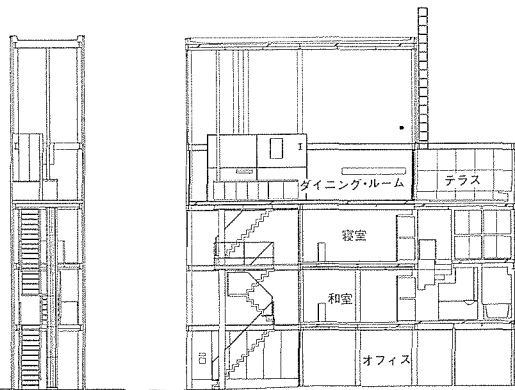
飯田善彦は、「多様な外部と単純な内部を併せもつ」と説明する。改めてこの住宅と家族像との関係を要約すると、個室として完結することのない寝室群、居間

●日本橋の家

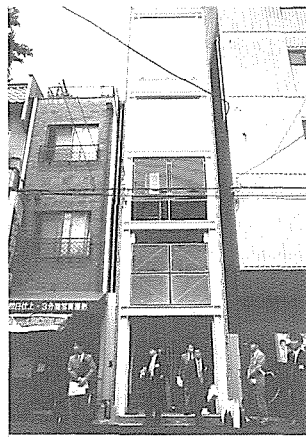
大阪市 1992年 設計：岸和郎建築設計事務所



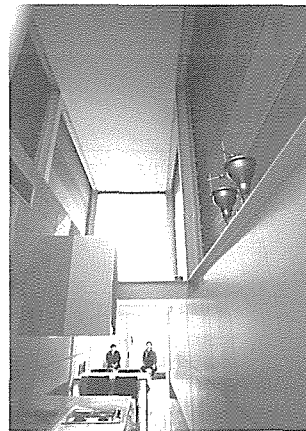
平面図 1/300



断面図 1/300



外観。



4階の台所からダイニング・ルームを見る。

として家の中心を形成することのない広い部屋。そこに生じている、個々人の団らん、家事労働、接客の具体的性格。そしてこうした建築計画を成立させているのが、自然と住宅内部を結びつける手の込んだ屋外・半屋外の装置なのである。

第四の家

●日本橋の家

大阪市 一九九二年 設計：岸和郎建築設計事務所

「大阪の日本橋という街は、東京でいえば秋葉原で」

と教えられたが、たしかに生半可ではない活気あふれる、しかし繁華街でなく生業の街の、その両側もビルに挟まれた敷地いっぱいの間口二・五メートル、奥行き一三メートルの建物である。二・五メートルといえどその両端に立てた壁のあいだにタタミ三畳間を嵌め込んだらもう隙間がないというスケールである。

老夫婦と子供一人の家族。一階にオフィス、二階に夫婦の部屋（和室）、三階に子供部屋を、天井高も思いきり抑え込んで重ね、最上階のダイニング・ルームは突然六メートルの天井高と、狭い間口だけにほとんど空に抜けんばかりの印象で、一挙に空間の質を転換している。二、三階の個室がハイテクな素材による茶室だとすれば、ダイニング・ルームは、壁の基本的な構成材は下階と同じアスロック素地露出だが、その壁の一部と床全面は大理石貼りの、岸和郎の比喩を使えば「屋上庭園」である。実際に、大理石の床はそのまま敷地奥のオープン・テラスに続いている。いずれにしても住宅の日常性をおもいきり裏切るような素材とスケールが全体を支配している。

家族が一緒になるところはこのダイニング・ルーム―テラスのフロアということになるのだろうが、なにしろ途方もない非日常空間（内部空間の素材やスケールだけでなく、この街のなかでは思いもかけない純粋無垢の青空雨空が室内に飛び込んでくるという点でも）では、家族の集いの質が変わってしまいそうな気がする。非日常という意味では下階の「茶室」も同様だから、案内二、三階のどちらかの部屋で親子三人がくつろぐことがあるのかもしれない。つまり、住宅のなかの私的領域と公的領域という構図が、この家では相対化されてしまっている。

岸は、上で引用した「屋上庭園」について、その場

かぎりの比喩ではない、深い考察をしている。彼はシヤンゼリゼに面したビルの屋上につくられた、コルビュジェのペイステギ邸について言及している。これは屋上の生垣や芝生に暖炉や家具を置いて、一般的な地上の室内のように見せている住まいだが、その向こうに見えるのはパリ市街を高めから見渡す光景である。それは「卑俗な空間と特権的なまなざしが近代のテクノロジーによって出会うということではないか」。そして、普通の室内のようにしつらえて実は天井がないということ、その浮遊感を、近代建築におけるフラットルーフが「積極的に屋根を排除しようとする意志」にあったことと結びつけて説明している。

日本橋の家で、建築家のデザイン上の手腕がもっとも精緻を極めて目に見えるようにつけられているのは、建築のファサードを形成しているといっている、グレイチングの階段とエキスパンドメタルの配管カバーである。かつて邸宅の格を示すために建築家が力を注いだ正面の装飾やオーダーに似て、岸も何物かを表わすために、この半透明で深いファサードに人の目を集め

ようとしている。そこから「住宅」を隠すためである。家族の形を隠すためである。家のもつ卑俗さから遠ざかり、それを凌駕する観念を現実の空間にすること、現代日本の住宅を設計する者の、それが命題になっている。

第五の家

●堺町の家

広島市 一九九三年 設計・村上徹設計事務所

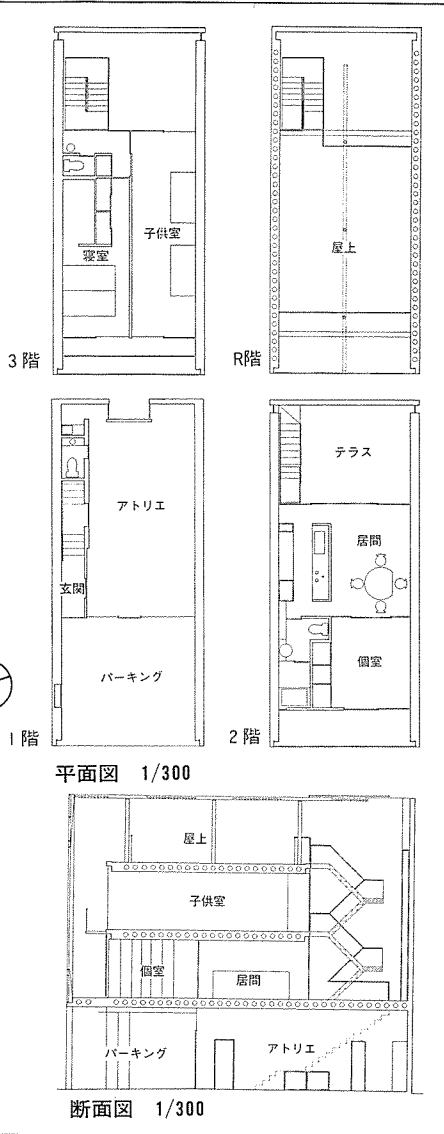
市街地型住居は、村上徹の建築としては、このほかには「出汐の家」があるだけである。彼の郊外住宅に見られる独特の、外部にゆったりと開く空間は、店舗併用のビルのなかに入った「出汐の家」においても、大胆な吹抜けのコートと、それに面する室内ではできるだけ建具を排した部屋の連らなりによって、同じように確保されている。

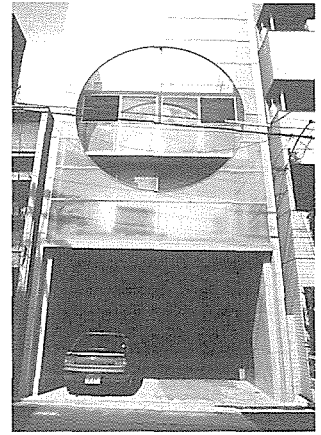
「堺町の家」は、この構成がよりいっそう徹底している。やはり街なかのビルの、二階から上三層に三世

代の住居が重なる。一階はパーキングとアトリエ。このアトリエわきの狭いアクセスと階段を通って、二階のテラスに出たときの驚きと爽快感は何ともいえない。このスペースが三層分、どんと高く広く空に抜けている。それだけではない。このテラスが同時に、とんでもない入口ホールとして、三層の住居を垂直方向に束ねていることが痛快なのだ。

一階は居間と台所、奥におばあちゃんの個室。奥に、といつても、一階パーキングから通路と階段を抜けて出てきたテラスは表通りからみればいちはん奥にあるわけだから、この個室は表通りに戻ってきていることになる。三階（住居の第二層）に主寝室と子供室。間口六メートルの部屋をコルビュジェのユニテのように二つに縦割りの細長い部屋である。第三層が屋上。テラスの吹抜けを上り下りする外部階段は、いわば入口ホールから屋上までを直接結びつけている。だから三階の寝室階前の階段踊り場もその階の入口の圍（しきい）となっている。そして屋上は、この住まいのいちばん奥の庭であると同時に表通りを見下ろす家の外でもあるのだ。

平面のほぼ三分の一を占める三層のヴォイドに最小限の部屋がとり付いている。居間と台所をひとつにした部屋も個室と変わらない広さである。市街地型住居のなかのテラス（中庭）が通常はせいぜい光井として、部屋部屋の隙間を縫って辛うじて確保されるのに対して、ここでは入口ホールの性格を残したテラスと外階段（事実、そこには植木鉢や椅子と一緒に、靴や傘が置かれている）が、見方を変えれば四角いコンクリート箱のなかにとり込まれた堂々たる自然として、圧縮された部屋と外部とを結びつけている。この錯綜したトポロジーが、まぎれもない「村上徹の空間」である。





外観。



R階より2階のテラスを見下ろす。

彼自身はこう説明している。「室相互の関係は、田園地帯での近代民家と同じように、庭を介して母屋と離れの関係が成り立っている」。一方では街の表通り、一方では静けさに満たされたヴォイド。このふたつに挟まれた部屋部屋は、コンパクトにかつそれ自体は集中的に構成されているながら、前後の外部空間の圧力で「母屋と離れ」の、昔ながらの心的距離をとり戻している。そここにいくつもの入口の関や縁側といえるポイントが自然に発生している。

特異に見える構成が、日本の住宅にずっと流れていた時間と空間を浮上させているのだ。

第六の家

●角地の木箱

東京・府中市 一九九二年 設計：葛西潔建築設計事務所

タイトルの「木箱」とはちょっと玩具じみているかもしれない。実際にその外観は、尖り屋根や、壁にランダムに散らされた四角い小窓や大中の丸窓、これ見よがしのブリッジなどで、一見、幼児性思考を衝つ

ているようにも思われる。内部も、あまりにもインテリア・デザイン然としている印象が一見、強い。ダイアゴナル・パターンの壁・天井にしろ、吊り橋ふうのスロープにしろ、カーテン風の引戸にしろ。

つまり、何だか綺麗すぎるデザインが目についてしまうのだが、ここには仕掛けがありそうだ。

広き五間四方、天井高二間半の思いきり大きな部屋と、三層に重ねられた二間角の小さな部屋の塔が、積み木を転がすように置かれ、その間に半透明のブリッジが渡されている。はつきりと性格づけられた二つの棟は、昼のゾーンと夜のゾーン、あるいは主と従の部屋といった役割分担をしているわけではない。ただ大きな大きな部屋と小さな小さな部屋。つまりどこも使い勝手を規定しないスペース群なのだ。

夫婦に五歳と三歳の子供。この四大家族が小さな部屋にかたまつてザコ寝してもいい。大きな部屋のあちこちに寝ても構わない。広い部屋の真ん中で水割り片手に読書でもしたら超リッチな時間を過ごせそうだし、小さな部屋の一つを占有して数日仕事に耽る気分も、きつと捨て難い。子供たちにとっては、家全体が遊び

場になっていること疑いない。

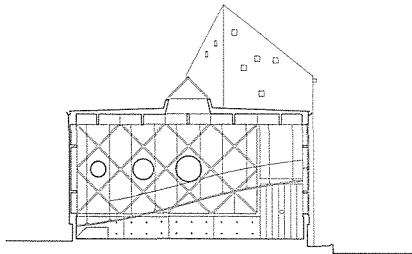
機能の無規定は、多目的室群を意味しない。そうやってしまうことを極力避けている。そのための正面形プランである。部屋である以上に、空間の形そのものが、この住宅を住宅らしきからおもいきり離陸させている。階段室の代わりに吊り橋みたいにふんわりと天井から吊られたスロープ、部屋の間仕切りはなく、室内のドアもカーテン状の軽い仕切りで済ませている。どこもガランとした部屋。収納棚はどこにも見当たらない（じつは大きな部屋の四方の壁の中に収納スペースが隠されている）。そして窓らしい窓の表情を排して、あくまで閉じた箱に見せていることで住宅はマジックボックスに変貌し、いつそう日常性から浮遊し始める。玄関の重く大きな扉は、全体を極力軽やかにしているなかでは異質に見える。しかし、それは扉としてつくられているのではなく、この不思議な箱をびつたり閉じる蓋としてデザインされているからである。

大きな部屋の中に、気前よく切り分けた巨大なスポンジケーキのような形が割り込んできている部分が、台所と浴室・トイレである。これも第三の変形の箱といえそうだが、どうしても生活臭が強くなってしまふところは、少しロマンチックな風情にして、あくまで全体の雰囲気を守っているわけだろう。丸窓といい螺旋階段といい、ちょっと船の一部みたいで、ここを上った上部は、屋内外をまたいだ甲板デッキになぞらえられている。

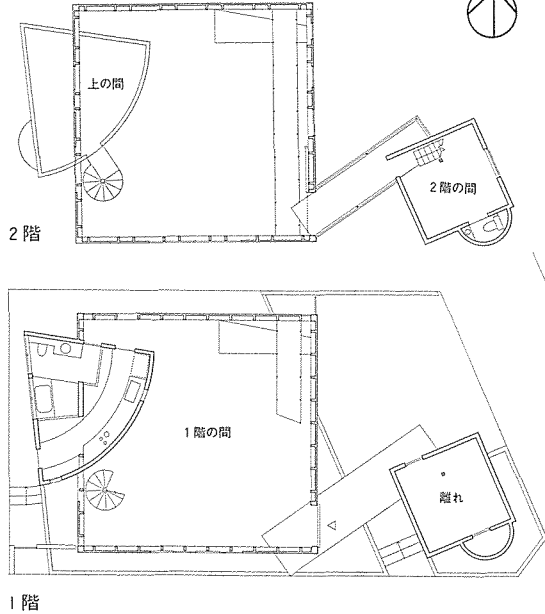
湾曲した台所内部も船内みたいで、この端に勝手口、といつても特に子供たちがもつぱら出入りする第二の玄関にもなっている。ステンレスと青いタイルと鏡を効果的に使った浴室・トイレもイメージを一貫させている。

●角地の木箱

東京・府中市 1992年 設計：葛西潔建築設計事務所



断面図 1/300



1階



上の間から1階の間を見下ろす。



1階の間。

平面図 1/300

建築家の話では、浴室・トイレは寝室のわきにあるのが普通だし、できればトイレの数も増やすのが理想とされているが、この家では、あえていちばん遠いと

ころに、家族全員が共同使用するように配したという。ともすれば個室に分散していく現代の住宅の傾向に対して、どのような生活の場面でも常に家全体、家族全

体との関係で体験してくことを重視している。ここに、若い家族の顔が見える。

ただの「木箱」と命名したねらいは、このへんにあるのだろう。目的的な要素を排除するために、架構の生の姿に還元するように見せながら、一義的な機能主義的表現に抵触することを避けるために、やや過剰なデザインによってバリヤーをめぐらせている。そこにこの住宅の逆説的なおもしろさがある。

これは建築家の自邸である。おもいきった考えを形にできたのも、自宅となれば、家族を説得する時間があるからだ、と。住宅らしさからおもいきり遠去かり、いわば家族劇の舞台で生活を演じながら、家族とは何かを本気で探りつつある装置である。それは見方を変えれば、家族という運動体を包む場である。これだけ広いのに、たとえば来客のために固定した応接間も居間もない、ソファもテーブルもない場である。とりあえずは応接する仮の場所が見繕われる。あるいは客もインスタントな家族のメンバーとなって自分の落ち着くところを探しにかかる。つまりは、家が持つべき社会的な枠組みをも外すことが目論まれているのだ。

第七の家

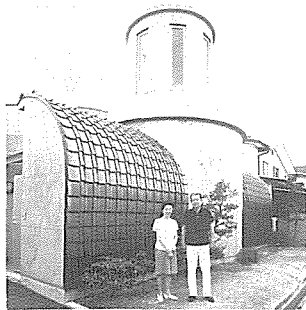
●CONCRETE BOX 10

福島市 一九九三年 設計：TAF設計／佐藤敏弘、昭子

このとんでもなく面白い住宅のモチーフは、ご主人が刑務所に勤務されていたこと、息子さんがプロ野球選手であることから引きだされている。「大陸と大陸が衝突してヒマラヤ山脈が生まれたように、野球場と民家がぶつかり、星を見る塔が生まれ、屋根瓦がガラガラと崩れた」といった佐藤敏弘の詩的なコメントは

●CONCRETE BOX 10

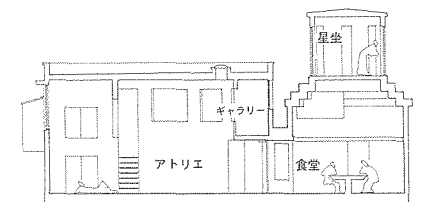
福島市 1993年 設計：TAF設計/佐藤敏弘、昭子



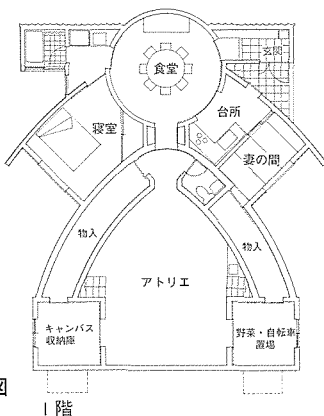
1階アトリエ。



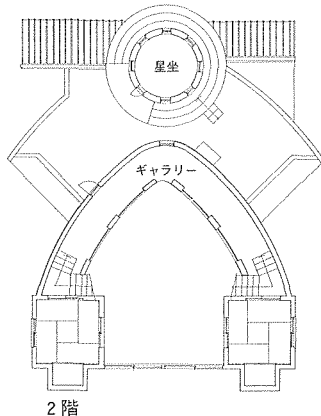
外観。



断面図 1/300



平面図 1/300



2階

うますぎて、嘘だか本当だか分からないまでにソフィステイクートされているが、道路に面して屋上に聳え立つ「星坐」という室名の、天体観測室とも監視塔とも思えるペントハウス、野球場の形をしたアトリエ、硬球をかたどった食堂(その円天井は硬球の縫目まで表わされている)など、どの部分をとっても、このユニークな施主像の投影になっている。

つまり臆面もないパロディである。タウトのアルプス建築のような理想形を住宅のなかに運び入れた、前作の「BOX 9」などとはもひとつ趣が違う。キャッチャーがミットを真正面に構えているみたいな平面形も、強引だという印象は受ける。しかし、これは佐藤の持論である、平面形を漢字のつくり方と同じように発想するという、その実践と理解すれば何とも刺激的である。

実際に訪れて、この家にみなぎる充足感に圧倒されつ放しだった。大空間のアトリエは、内野席にあたる二階ギャラリーや双対の和室、三重のアーチ形の垂れ壁などによって、そして何よりもその特異な平面形状からもたらされた空間そのものが雄弁であるが、ご主人はそこに大量の蔵書とレコードとCDをもち込み、大量の油絵を日々精力的に生みだしている。食堂からアトリエへの入口部分に飾り棚があり、スター選手としての息子さんの記念品がぎっしり陳列されているが、その残りの記念写真を納めた額などはギャラリーにずらりと流れ込んでいる。ギャラリーの下はトンネル状の納戸になっているが、風の通る道として居住性も高いようで、昼寝に格好の場所だという。

普遍解としての住宅の中心は、居間と応接も兼ねた円形の食堂で、ここに台所と寝室が連結している。しかもそれはごく一部分にすぎず、ポーナスのスペースがその中心軸に並んで巨大化し、それは食堂上部を制圧する屋上の離れ「星坐」と連結して、さらに大きく繁殖していく。この住宅ではパロディが空間として枯死することなく、ますます深い根を広げ、幹から葉脈に水分を送り続けているのである。

この家を訪ねる客は、とりあえずは、玄関ホールみたくにも見える円形の食堂に通されるわけだが、頭上の巨大な硬球の図像を見上げた途端に、否応なくこの家族の私的な歴史と現在のなかにとり込まれてしまうだろう。堂々たるアトリエに通されてくつろぎながら、この大空間が、ジョン・ソーン邸の地下の穴ぐらのように圧縮された物語を語り出すさまに身を委ねざるを得ない。この建築は、家の形から逸脱しているかに見えて、実は家の記憶と夢が新たに組織化されて立ち上がり、住まい手に勝負を挑んでいる形になっている。

第八の家

●H(エイチ)

千葉県勝浦市 一九九四年 設計：青木淳建築計画事務所

翻訳者の夫妻の住宅である。平面を見ると、一階は、

この規模には不釣り合いなほど広いエントランスと玄関ホール、それに続くハイモニカみたいな細長い「夫人の領域」と記された部屋（厨房設備がその端部にある）、二階は、これもまたたっぷりとしたスペースをとった浴室とサウナとサンルームがひとつにまとまった部



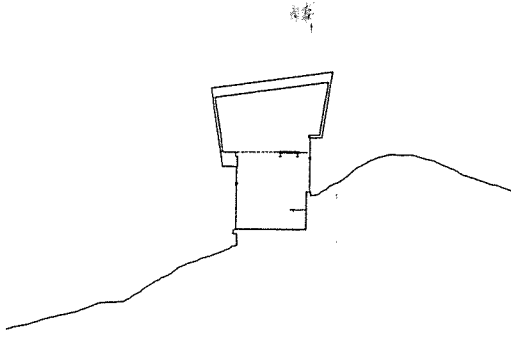
外観。



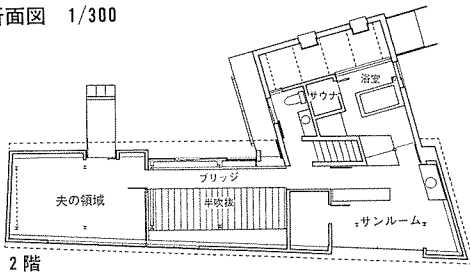
グレーチングの吹抜ごしに夫の領域を見る。

●H(エイチ)

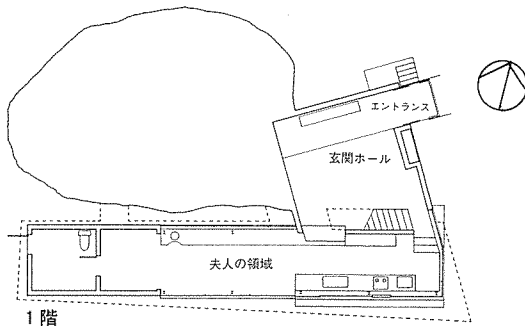
千葉県勝浦市 1994年 設計：青木淳建築計画事務所



断面図 1/300



2階



1階

平面図 1/300

屋、ここからグレーチングに覆われた半吹抜けをブリッジで渡っていったところに、「夫の領域」と記された部屋。これだけである。居間も食堂も、寝室もない。どこで寝てもいい、どこで食事してもいい（食卓らしきものは玄関ホールに置かれている）、どこで水割りを飲んでもいい。とりあえずの陣取りは夫と妻それぞれのスペースを決めておくというだけで、つまり個々人の時間を第一義とした平面形である。おもいきった提案ともいえるが、しかし青木独自のコンセプトは実はこの先にある。

細長い部屋、そこに斜めに交わる軸線の動的な平面形状は、青木の言葉を借りれば「動線という概念には入らない」。つまり「目的なく、まずは動きまわる」という人間像あるいは生活像にかかわるひとつの試み」だという。これはよく考えてみれば、コロンブスの卵みみたいな発見的命題である。

個人の部屋とは基本的に不確定なスペースでいい、むしろそう性格づけるべきだという考えがある。もちろん快適さには必要だし、住み手の具体的な要求があればそれを満たす仕掛けや装置をつける。建築家の提案はだいたいそのへんどまりだった。これまでは、つまり機能固定型の部屋を多目的、あるいは不確定な部屋にシフトし、住み手の自由にかかせるかたちにすることで精一杯だった。たとえば住宅メーカーの実施されたプランはこの線まで施主を説得することさえ容易でなく、具体例も少ない。逆に、住み手がいかにせないほどの部屋なり場所なりを盛りだくさんにして（たとえば対面型キッチンにブレイクファースト・カウンタを取り付け、その内側にサブ・ダイニング、反対側には居間につなげて正餐用ダイニングを並べたり）、結果として、気ままな使い方にまかせる不確定スペース

スをつくり出しているのではないかといった印象さえ受ける。

繰り返すが、建築家でも、こうしたスペースを確保したところでよしとする傾向がある。しかし青木は、その個人に与えられた部屋がどのようなリアリティを持つかを、さらに踏み込んで考えている。

この住宅が建つところは、東京から急行で一時間半ほど、しかしファックスは都内にいるのと同じ時間で送れる海辺の町にある。おそろしく急な斜面で、道路ぎわにポツンと離れて立つ門柱から西部劇に出てくるような裸地を登って、頂上の火口に座礁した船の姿をした家にとどりつく。建物の形といい、一本一草をも許さないような景観計画といい、その超現実な感覚がすごい。遠くは海の光を望み、近くは室内になだれ込んでくるような地形の感触を受け止める。こうした環境とマッチして、この家の、光と影が劇的に交錯する平面形が可能になったのだろう。デスクワークに専念し、その合い間に「目的なく、まずは動きまわる」、夫と妻二人だけの住まいを生きたものにしようとする。特異な平面形とその立地条件に加えて、最後に建築形態と色彩を飛躍した発想で仕上げて、新しい生活概念を建築化している。異形のデザインに対する第一印象的な好き嫌いだけで、この作品を判定すべきではあるまい。

第九の家

●聖蹟桜ヶ丘の家

東京・多摩市 一九九四年 設計・早川邦彦建築研究室

二世帯の住宅である。建物は敷地の北西にL字型に寄せられている。一階の奥に両親のゾーンがあり、二

階の東端に個室が加えられている。中庭から外階段を上がったところにもうひとつ玄関があり、ここから北端の二つの個室とブリッジを渡って行く南端の居室とが、成人した子供（現在のところ単身）のゾーンである。つまり、東西に長い住宅と、南北に伸びる住宅が上下階で直交している。求心的というより遠心力が働いている。とりわけ、中央部で交点をつくり、それぞれ敷地の外に延びていくような細長い土間とブリッジが印象的だ。

外観にはこうした力の流れが明快に出ている。前面の四メートル道路に現われているファサードは、奥から伸びてきた打放しコンクリートの四角い筒が道路ぎわでスバリと切り落され、その切断面をガラスとガリバリウム鋼板が面一で充填している。その右手、西側の庭園は生垣で隠されている。コンクリートの筒の足元は、ガレージの半透明スクリーン状のシャッターが降りているときは、門も玄関も見当たらない。

シャッターを上げると、そこは瓦タイルを奥まで敷きつめた、パースペクティブの効いた屋外空間になっている。東西、南北にそれぞれ敷地いっぱい延びている線状の建物の形は、この瓦タイルの連続によって補強されている。つまり、玄関に入ったところで今度は左右に同じ床仕上げの土間が延びているのである。

ガレージその奥の中庭―玄関土間が、瓦タイルで連続しているためにそれぞれの機能が巧みに曖昧化され、内外にまたがるこのスペースを主軸として、居室や和室がむしろ寄り添った形になっている。

二階では通路の流れがより勢いづき、多様になる。中庭から外階段を上り、玄関を入った正面のスリット状の吹抜けに両親のゾーンの階段が見下ろせる。動線としては切れているが、視線は連続しているわけであ

る。二階の居室は、玄関から真直ぐ突き進んでくるブリッジを柔らかく受け止めるが、流れは止まらず南端のサンルームへと回りこみ、そこにはさらに屋上の和室へと誘う可動階段が現われる。一直線の通路は居室と反対側の北に向かっても、洗面室を通り抜けて北端のテラスまで、その流れを届かせている。

プランニングの手法が家の中心を構成する方向に作動していくのではない。上下個々の世帯を、さらには個々の部屋を見え隠れさせるための切り替えポイントを完成させていく。この平面形には、ガラスやポリカーボネートなどの透明・半透明のスクリーンが不可欠となり、平滑なコンクリート壁と継続し、あるいは鋭い切断面をつくり出す。そこにこの住宅の静謐な美しさがあり、たとえば、ミース・ファン・デル・ローエの一九三〇年代のコートハウス計画を九〇度ずらして上下に重ねたような魅力をもたらししている。

親子のそれぞれのゾーンは、居室と個室からなる。一般的なnLDKと違っていいのだが、むしろ一階では、居室とそれに続く和室（寝室として使われるのだろう）が一体となった個室、浴室もまた特化された個室、そして個室と名づけられている二階の部屋は予備室という構成として読んだほうが納得がいく。となれば子のゾーンも、二つの個室は、洗面台付きの屋外テラスによって単なる寝室以上の性格が加味された部屋、そして居室そのものは、LDKというよりは家族室、あるいは他の部屋部屋を結び、ちよつとした中継点のようだ。そこに突入している通路のほうが強く感じられるのである。さらにその屋上には、可動階段によって隠された円筒状和室と、半透明ガラスに囲われた給水設備付きのテラスという、二つの贅沢な私室が加えられる。

● 聖蹟桜ヶ丘の家

東京・多摩市 1994年 設計：早川邦彦建築研究室



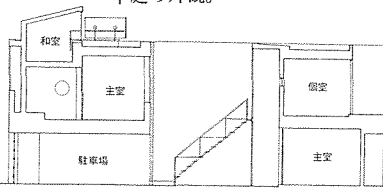
和室より中庭を見る。



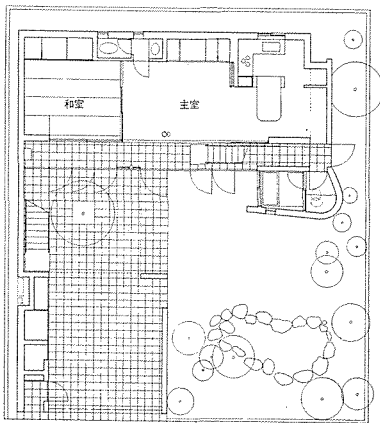
中庭の外観。



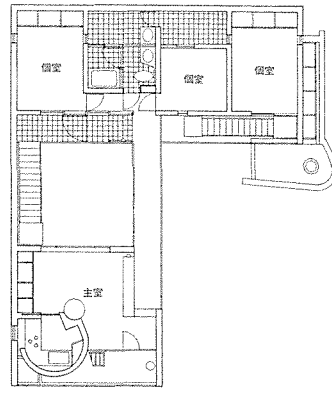
東西と南北が交わる空間。



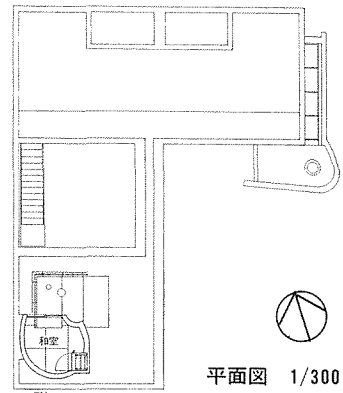
断面図 1/300



1階



2階



3階

平面図 1/300

つまり正面切ってパブリックな性格を持った収斂部分がなくなり、どこも遠心力によって分散私室化した部屋になっている。しかもこれらの私的な部屋はどれも等しく、外からの客を待ち受けているような気配さえ感じさせる。

第十の家

● 星龍庵

東京・杉並区 一九九二年 設計：スタジオ建築計画／元倉眞琴

設計者は「都市住宅の『プロトタイプ』となるべき」といっている。

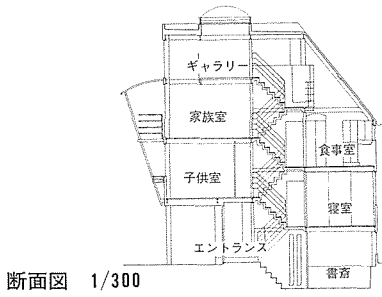
都市住宅をどう定義すべきが必要だろうが、この住宅から、三五年前に都市住宅の特殊な解決としてつくられた東孝光の自邸「塔の家」が、当然のように思い出される。

塔の家が六層、星龍庵はスキップフロアで八層。地下階が仕事場であることは共通しているが、そこが、前者は数名のスタッフも働く仕事場と住居のすべてである時期もあった。前者では台所のカウンターの端がそのまま唯一の食卓であり、つまりこれを囲む場所が食堂であり居間であり応接間であるのに対して、星龍庵では決して広くないが厨房のわきに食卓を別に用意し、さらに家族室もそこから半階上がったところに分離確保している。前者の浴室・便所が一体となつて（しかも建具も省略）表通りに開かれているのに対して、星龍庵は浴室は最上階に壁で囲い、スカイライトの下に開放している。

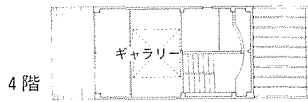
塔の家は「階段室に住んでいる」といわれた。打放しコンクリートの垂直方向のワンルーム（内部のドア、

●星龍庵

東京・杉並区 1992年 設計：スタジオ建築計画／元倉眞琴



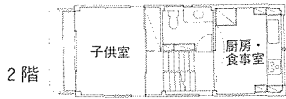
断面図 1/300



4階



3階



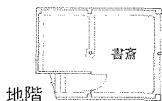
2階



1階



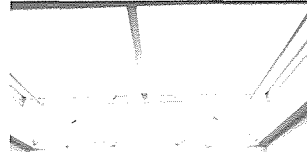
平面図 1/300



地階



外観。



4階のギャラリー。

間仕切りが一切ない)の住居である。星龍庵も同じように「一種の立体的なワンルーム」と説明されているが、個室、水まわり、収納にはドアがある。だがこちらは鉄骨造、そして階段とギャラリー階の床はグレーチングを使い、ワンルームへの志向を透明性によって果たそうとしている。

龍庵の施主は「狭くて密集した劣悪な環境の中」での「豊かな生活環境」と説明しているが、立地は中央線荻窪駅近くの典型的な住宅街、つまり通過交通の少ない親密なスケールの南面道路に面し、東隣りの庭の緑を享受できる。一方、西側には木造二階建ての同じような間口の住宅が建て混んでいるから、この「建築家の作品でもある」住宅は決して突出することもない。いってみれば、現在の東京では桃源郷といってもいい

くらしい環境である。

特殊解としての塔の家は、その後が続く建築家たちにとって乗り越え難い「プロトタイプ」になってしまった。星龍庵は、このプロトタイプを改めて一般的な核家族を受け入れる普遍解として再構成を試み、時代にもっとも対応する素材を用い、まち並みに関与する穏やかなデザインで対処する。しかし、この住宅の新しさとは、現代の家族の、住宅に対する欲望、即ち「都市の隠れ家」、「都市におけるリラクゼーション」、「意地の都市住宅」の主題に偏ることをあえて積極的

に求めた結果である。

施主の星野克美氏が建築家に送ったメモは、「都市文明素材活用のポストモダン(利休の待庵)」「わび・さび・陰影・光彩(メタリックな瞑想の世界)」「ニューエイジの禪寺(シンクロニクな離脱空間)」の、三つの言葉だったという。元倉はこれを上記の具体的なイメージに置きかえているわけだ。立地条件から部屋の構成まで、この主題にびたりと合っている。都心の表通りに面した小さなバーのような、ふらりと立ち寄っても迎えてくれるような性格を合わせ持つ「塔の家」に比べると、家族以外の人間をあきらかに排除することに確信的な性格を際立たせているのである。ここでは、半地下の書斎で仕事に没頭しているか、そうでなければ浴室つきのギャラリーでパジャマ姿でくつろいでいる住み手にしか会えないだろう。そこに日本の都市住宅の紛れもない新しいプロトタイプを見る。

スタジオ建築計画が手がけた住宅のなかで、これと対照的なケースがある。東京・秋葉原近く、蔵前通りに面している長澤商店ビルの一階、八、九階が住まいになっている。ビルの形は新しいが、住まいは従来の

下町暮らしの間取りをそっくり再現している。元倉は、幼な友達長の長澤氏の一家の四季の暮らしの聞き取りからプランニングを立ち上げていった。彼自身もこの近くに生まれ育ったわけだが、最初のプラン提示のときに、寝る場所より人が来たときほどの部屋に集まるのかと長澤氏に聞かれて、驚いたという。同じ建築設計事務所が手がけた、この両極の住宅の間に、現代の日本住宅のほとんどが位置するのかもしれない。

戦後日本住宅を顧みると

戦後日本の住宅を回顧展望する。といってもいわゆるアトリエ派の建築家によって設計されたものをたどる考察になっているが、こうした試みはこれまでに何度か行なわれてきた。それを建築・住宅関係の専門誌や単行本で見ることがあったが、そのもつとも新しいものは、「建築文化」別冊の「日本の住宅・戦後50年」布野修司編（一九九五年三月刊）だろう。このなかで四二人の建築家・評論家（と説明されているが、建築史家、研究者も含まれている）がそれぞれ一〇点を選んだ「戦後日本の住宅・ベスト10」の集計がある。この四二人は、年齢的には六〇代から三〇代を網羅し、その人選も偏ってはいないから、現在の建築界の意見をそれなりに代表すると見てもいいだろう。この集計結果はいろいろと考えさせるものがある。

ベスト3は、

- ・塔の家 一九六七年 東孝光（自邸）
- ・スカイハウス 一九五八年 菊竹清訓（自邸）
- ・住吉の長屋 一九七六年 安藤忠雄

で、票数の上ではダントツだ。集合住宅を除けば、そ

の次に、

- ・丹下健三自邸 一九五三年
- ・シルバーハット 一九八四年 伊東豊雄（自邸）
- ・最小限住宅 一九五二年 増沢洵（自邸）
- ・私の家 一九五四年 清家清（自邸）
- ・幻庵 一九七五年 石山修武
- ・原広司自邸 一九七四年
- ・立体最小限住居 一九五〇年 池辺陽
- ・正面のない家—N氏邸 一九六二年 坂倉準三建築研究所大阪支所（西澤文隆）
- ・SH—1 一九五三年 広瀬謙二（最初の自邸）
- ・反住器 一九七二年 毛綱毅曠（自邸）

が続く。

これだけの代表作で、一九五〇年代から八〇年代の、つまり戦後から現代までの、日本の住宅における建築家の思想とその作品的実践がほとんどカバーされているといっている。ここで自身のリストを提示しないのは、冒頭でも触れたように、本稿においては、テーマを先行させ、そのもつとで住宅作品例を拾い上げる、というやり方を避けたいからだ。上記の第一の家から第十の家の選択についても、なるべく最近、実際に訪ねて自分も住んでみたいと思ったものに限っている。研究、分析という視点からはそれでも恣意的であることは承知のうえで、改めてお断りしておく。

さて、四二人に選ばれた上位一三の住宅に戻るが、このうちの八点が建築家の自邸である。そしてその全てが、住宅構想の成熟を長年の実務経験の果てに自邸において実現したというより、設計を開始した第一歩、発想のスタート時点でつくられたという点でほとんど一致している。平たくいえば、実験的住宅である。そしてまた同時に、時間をおいた現在から見ると、それぞ

れの建築家における最高水準の作品として結果している（だからこそ現在もランキングされたわけだが）ことにも、改めて驚かされる。ここに、戦後日本の住宅設計の特質がある。それはスタイルの完成（極度にシンプルな、あるいは高度に複雑な装飾性の）でもなく、空間性の統合的な達成ともいい難い。すでに定説となっているが、新しい家族像、新しい生活像の提示である。もしスタイルに抵触する側面があるとしても、それは日本の生活空間が西欧のそれを受け入れようとする際の現象として、目に見えたといべきだろう。

つまり、建築構想はすべてきわめて明快な図式で、平面形に直接投影されていた。

その明快な図式とは、欧米の現代住宅の図式、すなわち居間を中心とした部屋構成を意識しながらも、それはまるで異なるものだった。

私事になるが、上の一三の住宅のなかで最初に訪ねたのはSH—1である。高校を出たばかりで、しかも大学も建築科に入るつもりは毛頭なかった時期だったから、この小さな一室空間の家に足を踏み入れたときは、本当に驚いた。いわばキッチンが付いた寝室、つまり入ってはいけない他人のプライベートな部屋に侵入した気分だった。当時『モダンリビング』誌の編集長だった渡辺曙氏は、家族でこの家に泊ったと話して下さったが、居間に毛布を敷いてのザコ寝だったという。その後、清家清先生のお宅に初めて伺ったときも、今度は奥にベッドが見える書斎だけの家という印象で、靴を脱いで入った室内の数歩先にもう、トーネットのロッキングチェアに巨体を沈めておられる先生の前で身の置きどころがなかった。しかしその後何度もお邪魔するうちに、このお宅が他のどの家よりも居心地よくなっていたのだから面白い。

こうしてひとつひとつの体験を書いていくときりがないが、これらの小住宅の平面形は、戦後間もない時期に個人住宅をつくるという事情だけに起因するものではあるまい。たとえその要因が大きかったとしても、その後の展開においても、建築家の意識のなかで「小住宅」志向が超えられることがなかった文脈が目ざされる。たとえば比較的オーソドックスなnLDKの平面形をもつ「正面のない家」においてさえも、同じ意識を共有していたことは、そのタイトルに如実に表れている。

現代住宅に何が見えるか

冒頭に紹介した一〇軒は、これらの戦後から八〇年代に至る展開のあと、九〇年代に入って見ることになった住宅である。家族と生活の図式を平面形に直截に示す展開はまだ終わっていない。ますます過激であることさえいえる。たとえば山本理顕である。しかし、その典型である「岡山の住宅」に対して、現実にバランスよく対応したとされる「葛飾の住宅」に、あるいは一見穏やかでスマートな早川邦彦の「聖蹟桜ヶ丘の家」に、かえって、戦後の住宅像を受け継いで展開してきた時代の、音なく進行する兆候が確実に現われている気がするのである。

ここから共通の顕著な特徴を導き出すならば、どの部屋にも私的人格が強いことである。応接の機能をも果たすはずの居間は、それがどれほど広くても家族室化して、中心を占めるといふよりは食堂を補完するよくな位置にある。ランドピアノをゆつたりと据えて小さなコンサートを開けるように配慮した住宅でも、

客を接待するのは日頃家族が使っている大きめの食卓で、といった例は最近の他の住宅にも見られる。ソファ・セットのある居間が減っている（家族がくつろぐ場は必ずしもソファ・セットのあるところではないということだ）。主寝室が居間や食堂より広いケースもある。あるいは、アトリエや書斎が拡大充実する。浴室が庭やトレーニング・ルームを加えて特化し、居室に近い性格を帯びている。そしてこうした私領域化した部屋部屋を統御するプランニング手法の魅力が、各領域の切り替え、接続と遮断にあることを、繰り返し指摘しておきたいのである。「伊東邸」や「堺町の家」において各部屋を自立させ、外部の自然を見る目において家族を束ねる手法、「葉山の家」や「日本橋の家」や「角地の木箱」などにおけるパブリック・スペースと個室の相対化、もつと具体的な細部を挙げれば、「H」において上下階の夫と妻の領域を遮断しつつ結びつける、吹抜けに架け渡されたグレイチング。これがただの吹抜けだったら、七〇年代の住宅にだって似たような例が見つかるはずである。

居間に収斂する平面形は、いわば家族という共同体幻想を復元する試みであり、山本の平面形は、あるいはさらにずっと遡って黒沢隆の個室群住居は、家族といわれる人の集まりの現状認識をうながすものであるだろう。しかしその図式の明快さが逆に、一方ではふつうの家族があるはずだ、いやそれが大多数だという見方を温存してきた。しかし、新しい家族のあり方といった主張がそれほど露わになっていない、上の一〇軒の例は、現在の日本の住宅における私領域化の進行をかえって否応なく浮き彫りにしている、と私は思う。どの部屋も私室的になっている。すなわち、どの部屋も私領域化している。ということは、パブリックな

部分の生活の光景が家のなかから薄れ、あるいは消えていくことである。欧米であれば、名の知れた建築家に設計を依頼するような階層の住宅が要求する家族間の交流、また外部との社交をフォーマルな空間として構成する生活様式が、日本では臆面もなく払拭されている。それは他人事ではない。以前、ある雑誌のアンケートで、あなたの家でほかにないような特徴をひとつ挙げよという質問に対して、私は「来客を想定していないこと」と答えたことがあるが、つまり、玄関ドアの内側にいるかぎり、一日中、どこでもパジャマを着たまま生活するのにいちばん相応しい家なのだ。仕事とくつろぎだけで成り立つ家。それはすなわち、内外における社会的な生活の光景を必要としなくなってしまう家である。

となれば、夫婦がそれぞれの個室を持つが、同じ寝室で時を過ごすのが、建築の側からはどんな粋もつかれない。東孝光の「塔の家」や安藤忠雄の「住吉の長屋」は、都市との関係においてとらえられていたとよく言われるが、同時に、家がまるごと私領域であることを外部に対して明示した建築であることが評価されたのだった。あるいは、さらに遡って菊竹清訓の「スカイハウス」は、夫婦の生活空間を支えるスラブの下に足し算として吊られた子供部屋という構想によって破綻したといわれるが、そのように完結した一見脆い構造化においてこそ、この住宅は堅固なのであり、同時代のどの住宅よりも長く生き続け、現在まで、若い世代にも繰り返しインパクトを与え続けてきたのである。

沢田知子は、大正のころには、当時の日本人の服装起居様式、家のスタイルにおける和洋混在の二重生活が批判されていたのに対して、現代ではそのすべてが

むしろ許容されている事実を指摘しているが、限られた面積と中流階層といった与条件に対して戦後日本の建築家が懸命に解答を出し続けてきたのは、新しい家族像を建築空間に映すためだった。その結果、突出して見えてきたのはあくまでも折衷的な生活シーンであり、積極的に獲得してきた私領域化した部屋部屋だった。つまりそこからあらゆる部屋における私室化が、不可避的に進行している。

しかしこの私室化とは、単純に社交を排除するものではない。福島市の、野球のスター選手である息子さんへの応援歌が家じゅうに満ち満ちているような、それこそ巨大な御主人の個室に通されたときの独特の居心地のよさは、かつて清家先生のお宅に足繁く通っていたときの記憶に結びつくような気持ちでさえあったのだ。私の領域に客を招くというインフォーマルな社交が、じつは戦後日本の、建築家が設計する水準の住宅にまで浸透していた。それが今日、多角的な空間表現となって顕在化した。それが、先に挙げた住宅群を代表とする、日本の住宅のほとんど全てにあてはまる特性であると指摘したかったのである。

家のなかの固定的なパブリック・スペースはたしかに希薄になっている。かつて、いろりを囲む家族の場はなくなつたといわれた。暖炉がテレビにとつて代わられたことが嘆かれた。しかしテレビがそれぞれの個室に入りつつある現在、同じテレビを見ながら夫婦や親子が勝手に言いたいことを言っていた時代も、そのうち懐かしくなるかもしれない。家族同士がかかわるのは共有の道具だけになる。道具としての、台所、浴室、便所、電話、等々。しかしこうした拠点もいつかは克服すべき課題でしかないことになる。それを解決するのはまたまた家電その他諸々の家の道具のメーカ

ーや食品産業である。

それでは家族はそれぞれの個室に入ったきりかという、案外その反対である。大都市に偏つた現象かもしれないが、現在、夫や子供の家事負担はむしろ増えているといえると思う。料理も洗濯もする。自動洗濯機を使うことも、スバゲッティを茹でることも、同じ気分ですっきりするように家のなかで装置化され、またそういう便利な商品が増えてきている。家事を通して、家族が束ねられる機会が出てきている。家族像の崩壊といわれるその家族とは、主人が接客の主幹となり、妻がその裏方をつとめ、子供はさらに見えないところに隠されるといつかつての姿であると、ひとつにはいえるだろう。それが変容してきた現在を、建築計画に投影することは可能である。たとえば、来客を迎える機会があれば、日頃は個々人の生活に忙殺されている夫婦や親子が、一致団結して招待の体制をとる。そのシフトを可能にする台所や食堂や居間のしつらえは建築化できるのだ。

しかし、問題は別にある。

都市施設が家のパブリックな機能を代替するということが長くいわれてきた。しかしただ代替するだけではない。それはすなわち、家の私領域化が都市施設を侵食することである。ホテルでもレストランでも居酒屋でも、学校でも保育園でも、たとえばジャーシ姿のまま自家用車でそこに乗りつけるといった、私領域と化した家からの延長が見られる。ある意味では家族的なくつろいだ雰囲気がある。だが別の意味では、それぞれの場を快適ならしめていた本来的なマナーが、完全に破壊されつつある光景でもあるのだ。

そして家族そろって家事負担という、それなりにハッピーな流れから押し出されているのが育児や高齢者

介護である。これも新たな都市の商売の対象となりおいおいに解決されるようにも見える。その風潮を責めるのは本稿の目的ではない。問題は、都市におけるこの一連の不可逆的な現象に、建築が普遍的な解を何も出していないことである。そのうち出すことができる、と私は楽天視している。戦後五〇年にわたる、建築家による住宅設計の歴史が、建築が関わるべき未来とどう結びつけられるのかが次第に錯綜してきている。そここそ新しい可能性があると確信している。

(うえだ・まこと/住まいの図書館出版局編集長)

文献からの引用

- ・「家族という思想」山本理顕 『新建築・住宅特集』一九九三年一月号
- ・「屋上庭園の夢」岸和郎 『新建築・住宅特集』一九九二年六月号
- ・「堺町の家(設計要旨)」村上徹 『新建築・住宅特集』一九九三年一〇月号
- ・「自生する建築へ(特集記事)中 CONCRETE BOX 10 設計要旨」佐藤敏弘 『建築文化』一九九四年一月号
- ・「動線体としての生活」青木淳 『新建築・住宅特集』一九九四年五月号
- ・「都市住宅の『プロトタイプ』をつくる(対談)」元倉眞琴・星野克美 『新建築・住宅特集』一九九三年一月号

右記以外の、建築家のコメントは直接取材による。

挿入図面は建築家からの提供、写真は筆者撮影のもの。

なお本稿は、日本建築学会『建築雑誌』一九九五年四月号に寄稿した「私領域化への進行」を骨子としている。

住総研の図書室に、果たして建築各分野のもっとも基本的な図書が揃っているのだろうか？……そんな議論が、最近の図書情報委員会でもっぱらの話題となっている。こうした議論が出ることにしたい、住宅専門図書室として出発したこの図書室も、もっぱら集書に精を出してきた時代を終えて、次なる成熟のステージへと足を踏み入れたことをよく示している。

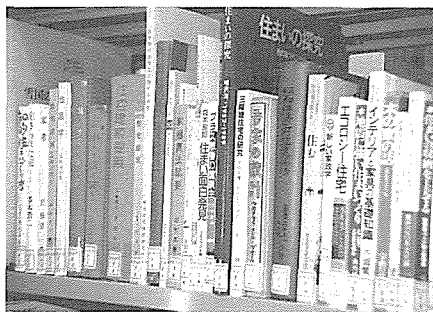
● ところで、いわゆる「基本図書」とは何だろうか。大学図書館などでは、開架図書室における参考図書や教官による指定図書が選ばれているが、これらは厳密な意味での「基本図書」ではない。たとえば、ある学説を形成する元となった図書で、現在稀覯本化しているものは、通常開架図書として奥深く蔵され、利用者が気楽に手にとって見ることはできない。こうした基本図書は、歴史を専門とする私の分野では意外と多い。むしろ図書室の開架では、一般的に入手しやすい入門的な本が参考図書として並べられている例がほとんどである。

私は「基本図書」に対して確たる見解をもっているわけではないが、私がイメージする「基本図書」とは、①それぞれの分野における研究史を十分に知悉し、なおかつ今後の研究の展開についても広い視野から見通しをもっている専門家が、②なぜその本をいま基本図書と見なすかという明確な根拠をバックに、③おごそかに選び出す珠玉の図書リストのことである。選ばれた本のラインナップしたいにひと

住総研図書室だよりⅡ蔵書紹介

基本図書とは？

伊藤 毅



稀覯本・高価本も一般書と同じように手に取って見ることが出来る住総研図書室。

● する参考文献リストや、卒論のテーマ選びの時のガイダンス程度のを考えようというのが、議論の発端だったと思う。そうした入門図書的な観点からみて、各分野で抜け落ちている図書がないかチェックすることは大いに意味のあることだ。しかし、これを「基本図書」と呼ぶかどうかについては、まだまだ検討の余地があるろう。

● 住総研図書室は、小さいながらもきわめて充実した住宅専門図書室の体裁を整えつつある。この図書室のいいところは、いわゆる稀覯本・高価本から一般書まで、すべて同列の扱いで並べられ、それぞれを直接手にして見ることができるところだ。これは他の大規模な図書館にはない便利さと機動性を、利用者に提供してくれる。こうした「書齋」的な図書室の利点を生かして、入手しにくい「基本図書」やマニアックな専門書が、普通の図書と混ざって書架に並んでいる姿は、なかなか魅力的である。

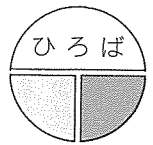
基本図書を選ぶという作業は、よく考えてみればなかなか大変な仕事であるが、「私が選ぶこの一冊」「絶対に落とせない一冊」がいま図書情報委員会で検討されていることは、この図書室の次のステップへの足固めとして、大変重要であることは言うまでもない。

卒論テーマで困っている学生さん、ぜひ一度、当図書室にお立ち寄りください。手ぐすね引いて待っている委員がいるかもしれません。

(いとう・たけし/図書情報委員、東京大学助教授)

つのストーリー性があり、その時代の特定分野の研究史と研究現況が適切に切り取られる。つまり基本図書を選ぶという行為は、研究者としての力量が試される恐ろしい行為なのだ。

こんなことを言い出すと、とても基本図書なんて怖くて選ぶことはできなくなってしまう。もう少し気楽に、大学の授業の最初の時間に、学生さんに最低限この程度の本は読んで下さいよ、といって配布



震災のあと——混乱から自律へ 本城 佳奈

強い揺れにより目が覚めた。地震と
いうことを認識するより、強く何度も
起こる揺れと暗闇との恐怖心でいっぱ
いだった。幸い私の自宅は岩盤に建っ
ていたため被害はなかった。テレビの
報道で、見なれた神戸の街のあまりの
変貌に驚き、この時初めて事の重大さ
を知った。友人の安否を気づかったが、
電話も通じずどうすることもできな
かった。

翌日、少しでも被災者の役に立てた
らと思い、食料を持って避難所になっ
ている小学校へ向かった。途中の道は、
布団やバケツを持ってパジャマ姿で避
難してくる人びとと、避難所に救援物
資を運ぶ人びとが行き交い混雑してい
た。まるで戦争でも起こったかのよう
だった。避難所への道は想像を絶する
もので、跡形もなくつぶれた家、傾い
て今にも倒れてきそうなビル、ペしゃ
んこになった車、途中、倒れた家の扉
で道が塞がれていて線路を歩いた。老
夫婦が壊れた家のベランダに腰掛けて

いた。私と目が合うと泣きながら私を
「見ないでよ」とどなりつけた。あの
時の老夫婦の姿が今でも目に焼きつい
て離れない。

小学校に着くと人でごったがえして
いた。血のついた毛布にくるまった人
が廊下に横たわり、その人の頭の横を
人が行き来し、子供は泣き、犬はあち
こちで吠え、なんともひどい状態だっ
た。そんな中で、コンロで鍋料理をし
ていたり、将棋をさしていたり、また
若い家族が教室を占領し、老夫婦は冷
たい廊下の隅で毛布にくるまるとい
う自分本意な状態を見て、何もするこ
とができない悔しさといらだちで複雑な
気持ちだった。

帰りは火事の地域を見た。火が消え
てまる一日がたつというのに、すごい
煙で目が開けられない状態だった。あ
たり一面ねずみ色で建物はビルを除い
て灰と化し、ビルも骨組をさらすのみ
で全く原形などなかった。

毎日避難所に水や食料を運んだ。そ

して日に日に助け合う姿が見られるよ
うになり、そこには笑いもよみがえっ
た。空気が悪いため病気がはやり、も
めごとが起こることもあったらしいが、
被災者自ら代表者を決め、そこでの生
活の規則をつくって、長期化する避難
所生活も安定させていった。そして近
所の関係が被災以前より親密になっ
ている気がした。もともとのあたりは
路地が多く、ふだんから近所づき合
いが緊密だったにちがいないが、まるで
大家族のようになっていた。

した。将来への不安を持ち、「一日も早
く落ちついた住まいを」とどの人も願
っていた。人にとって住まいというも
のがどれだけ必要とされているか、ま
た人と人とのつながり、協力し合うこ
との必要性を身にしみて感じたのであ
る。

この震災をただの災害として受けと
めるだけでなく、しっかり記録に残し
て、今後の街づくりに生かしていきたい
と思う。

(ほんじょう・かな
神戸芸工大環境デザイン学科2回生)

被災直後の力強い連帯感を再び復興の原動力に 大橋 達也

一月一七日の街はあまりにも異様な
光景であった。しかし、友人、知人の
安否を確かめるために三日間町中を歩
いているうちに、異様な光景に対して
無感動になった。だが無感動になっ
たのは異様な光景に対してだけでは
なかった。友人、知人の死が度重なる
につれ、人の死に対しても無感動にな

っている自分がいた。人の死に関して
ここまで無感動になっっている自分が、
はつきりいって恐かった。自分のこの
態度といい、この異常事態のなかで地
域住民のコミュニティというものは本
当にうまく機能するのだろうか。

しかしこの危惧は見事に裏切られた。
避難所に手伝いにいっても、避難して



避難生活のスナップ(写真/大橋達也)

いる人びとは、見事に連帯してお互いのことを気づかいながら、避難生活を過ごされていた。またテント村においても、ドラム缶などをかまどにし、その周りを風防としてベニヤ板で囲んで

「サロン」をつくり出し、少しでも豊かな外部空間でお互いの連帯を深めよう、元気をだそうと努力されているその姿に、勇気づけられたものだ。

それでも焼野原となった長田区の鷹取地区に立つと、まるで焦土から体中の「気」を吸い取られるかのように体力が消耗した。風景が無くなり、人びとがいなくなったこの土地が私にそう思わせるのだろうか。ここに立つと、

これからこの土地はどのように復興するのか、どのように人びとはこの土地に戻ってきてコミュニティを再形成するのだろうか、途方に暮れた。

仮設から復興へ、しかし

しかし人びとは戻ってきた。コンテナハウスやプレファブ等の仮設住宅とともに戻ってきた。当初はとりあえず住居が確保できたことよって人びとに元気も出るだろう。だが、この視覚的にいかにも「仮設」な住宅は、被災した人びとのさらなる復興に対する上昇指向に慮えられるものだろうか。この仮設住宅を「仮設」と思わせない豊

かな空間づくりの工夫が必要だろう。そしてそれが人びとの「元気」を持続し、さらにコミュニティ形成の原動力となっていくのではないだろうか。

ところで私の研究室では、震災後から住吉地区に街づくり運動を興すべく定期的に倒壊家屋や新築家屋の調査をしてきた。そしてこの地区の復興の様子を見てきているのだが、最近とみに新築される住宅に住宅メーカーのプレファブ住宅が増えてきた。しかし、コミュニティという言葉が「人びとの意思の疎通」というだけでなく、その地域の「空間のまとまり」というニュアンスも含むならば、これは喜ばざる傾向なのではないだろうか。確かにプレファブ住宅は耐震性、コスト的に優れているかもしれない。しかし手軽に建てられ、工場で規格化されたプレファブ住宅が乱立すれば、その地域の空間のまとまりコミュニティ形成のための「とりきめ」を決定する機会が奪われるのではないだろうか。

今、地震直後のあの連帯感を、コミュニティ形成、まちづくりのために、もう一度呼び戻す必要があるのではないだろうかと感じている。

(おおはし・たつや/神戸大学大学院
自然科学研究科博士前期課程 建設学専攻)



倒壊した被災現場(写真/編集部)

*
「ひろば」へのご投稿をお待ちしております。
「住」に関する提案から日頃お感じになっておられることまで、研究者・実務者から市民の皆さま方の忌憚のないご投稿をお待ちしております。(採用分については薄謝進呈。)

原稿用紙(四〇〇字詰) 三枚程度。原稿には住所、氏名、年齢、職業を御記入下さい。なお、内容を傷つけない範囲で一部手直しさせていただきます。ご了承ください。

〈宛て先〉

〒1156 東京都世田谷区船橋4丁目29-8
財団法人住宅総合研究財団
すまいるん編集部「ひろば」係

広い分野から住生活に貢献する研究を

注目課題の応募を期待

——一九九六年度住総研助成候補者募集中

当財団では、現在、広く建築学内外の領域にわたり、住生活の向上に貢献しうる学術性、実践性、社会的先見性に富んだ研究（住宅を含む建築一般に関する技術的課題等も可）について、一九九六年度の助成候補者を募集中です。概要は次のとおり。

(1) 研究助成

件数

一九九六年度二〇件程度。

一件一〇〇〜三〇〇万円程度。

応募要領

一九九六年二月末日までに、①研究課題②研究者・所属機関名③助成申請総額④継続研究希望の有無⑤研究の目的⑥研究内容及び方法⑦研究の特色⑧研究予算及び内訳⑨研究予算と研究内容・方法との関連⑩既往関連研究成果、を所定の申請用紙に記入して提出する。

研究期間

一九九六年六月一日より九七年九月末日まで。

申請用紙

当財団まで、一九〇円切手を貼付したA4判返信用封筒（あて名明記）を同封して申し込む。

申請用紙の申し込み、お問い合わせ（財住宅総合研究財団）

〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8

☎03-3484-5381 助成担当まで。

(2) 印刷助成

件数

一九九六年度一〇件程度。

対象

当財団助成研究の成果としての研究論文の印刷行、その他、住にかかわる優れた研究論文の印刷刊行。

募集要領

一九九六年五月末日までに所定の申請用紙に論文原稿を添えて提出する。

申請用紙

当財団まで、一三〇円切手を貼付したA4判返信用封筒（あて名明記）を同封して申し込む。

次号予告

'96 春号 四月一日発行

特集Ⅱ自然知の住まい

〈焦点〉

自然知住宅——住戸から都市まで
齋木崇人（神戸芸工大教授）

〈ミニシンポジウム〉

知恵としての自然の優しさ
梅干野晃（東京工業大学教授）

谷口宗彦（工学院大学助教授）

服部岑生（千葉大学教授）

〈書き下ろし〉

自然知としてのOMソーラー
小池一三（OMソーラー協会）

日本人の空間観
阿部一（東洋女子短大）

〈すまいのテクノロジー〉

集合住宅の環境共生—アースレッジの試み
木村哲雄（日本勤労者住宅協会）

〈私のすまいるん〉

北海道の自然と住まい
圓山彬雄（URB建築研究所）

民家における自然知
エスペランサ・カロ

〈すまい再発見〉

札幌のフランク・ロイド・ライト地区
角 幸博（北海道大学）

第16回住総研シンポジウムへ向けての論文②

住宅の質に対する設計者の関わり方

中整 博（びるだあす・やあと主宰）

タイトルは仮題 執筆者は変わることもありませう。

江戸東京フォーラム一〇〇回記念シンポジウムを開催

江戸東京学への招待——生活の舞臺としての都市空間

当財団自主研究事業の一つ「江戸東京フォーラム」が第一〇〇回を迎えるにあたり、去る十一月十八日(土)午後一時から江戸東京博物館・大ホールにおいて入場無料の記念シンポジウムを開催しました。

パネリストには小木新造(江戸東京博物館館長補佐)・陣内秀信(法政大学建築学料《建築史》教授)・高階秀爾(国立西洋美術館館長)・田中優子(法政大学教授部《近世文学》教授)の諸氏を迎え、内田雄造氏(東洋大学建築学料《都市計画》教授)を司会者として、参加者二六〇余名を前に四時間にわたる熱心な会合となりました。

シンポジウム前段の講演はスライドを多用して充実した内容をわかりやすく論じ、後半の討論会は多角的に都市・住まい・生き方などに踏み込んだ知的刺激に満ちたもので、ときどき笑いも湧くなど、楽しくかつ実り多いものでした。

引き続き持たれた懇親パーティーは極めて自由で明るい雰囲気ですすめられ、飲みかつ食べながら異なる分野の研究者たちが語り合い、あるい



上/江戸東京博物館大ホールでの記念シンポジウム。
中・下/懇親パーティー風景。

はボラロイド写真に興ずるなど、二時間を短く感ずるほどでした。

なお当日に合わせ、NHK放送出版協会から当フォーラムの成果の一部をまとめたNHKブックス「江戸東京学への招待」[「E」文化誌篇]が発刊され、パーティー参加者に寄贈されました。また、シンポジウムの様子は東京メトロポリタンテレビで放映されました。

すまいるん(ミニ)シンポジウム開催のお知らせ
知恵としての自然の優しさ

本誌'96年春号の特集のコア記事となるミニシンポジウムを、左記の日程で開催します。三〇名ほどの聴講の席を用意しておりますので、関心をお持ちの方はぜひご参加下さい。お問い合わせは、当財団「ミニシンボ係」まで電話でお願いいたします。

日時 九六年一月二六日(金)

一八・〇〇―二一・〇〇

場所 財団会議室

講師

梅干野晃(東京工業大学教授)

谷口宗彦(工学院大学助教授)

司会 服部岑生(千葉大学教授)

○高齢者のすまいづくり通信

18・19・20号発行

18号は、第15回フォーラムの記録として、訪問看護ステーションの取り組みを柳原病院付属補助器具センターの窪田静氏に、在宅介護支援センターの取り組みを佐賀医科大学の齋場三十四氏にご報告いただいています。19号は、九名の専門家の方々にご執筆いただいた第17回フォーラムのテキストです。20号は、山形県で行なわれた第16回フォーラムの記録として、秋田県鷹巣町のMs設計室松橋雅子氏からのご報告と、当財団高齢者のすまいづくりシステム研究委員会委員と参加者の意見交換が収録されています。B5判 無料

「すまいるん」のご購読について

●発刊日は原則として、冬号一月十五日、春号四月一日、夏号六月十五日、秋号一月一日です。したがって、送付開始は、購読料受領後の最新号とさせていただきます。なお、送金には約一週間かかりますので、お含みおき下さい。

●購読満了時にご通知いたしますので、引き続きご購読いただきますよう、お願い申し上げます。

●バックナンバーのお求めにもおこたえしております。ご希望の方は、あらかじめ在庫の有無、送料を左記財団まで、ご確認下さい。

購読料は次のとおりです。
一年間 二〇〇〇円(送料共)
三年間 五〇〇〇円(送料共)

お支払い方法
●領収書は、郵便局の払込票兼受領証で代えさせていただきます。財団からは改めて発行いたしません。
●購読期間中の購読中止による購読料返金はいたしません。

「すまいるん」は次の店頭でも販売しておりますので、ご利用ください(店頭での予約購読の受け付けはしていません)。
●建築学会資料頒布所 港区芝5-26-20
電話(03)33456-2051
●南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21
電話(03)3329-1338

(財)住宅総合研究財団
〒156 東京都世田谷区船橋4-29-18
電話(03)34841538 FAX(03)348415794

本野邸／本野精吾／1924

ヨーロッパの近代建築運動と同じ時代を日本で生きた建築家の軌跡

石崎 順一

歴史を評価する際に、殊に内的な影響関係に偏向し、ある基準によって通時的に流れをつくりだそうとしたうえで、多数派から見た特殊事例と見なされたものが、排除されることは往々にしてある。もし、日本のモダンデザインが、後藤慶二の豊多摩監獄によって表現派が始まり、分離派を中心にその全盛が担われ、その後、彼らの転向が大きな契機となつてインターナショナル・スタイルへと展開していく、といった記述のされ方がなされる

● 左とならう。そうした軸上における重要性を語る一つの証左とならう。

● 作品に対して具体的な言及を試みるまえに、東京帝国大学卒業二年後の一九〇九年から二年間、ドイツ・ベルリン高等工芸学校（校長ハブルーノ・パウル）に留学したことを挙げておかねばならない。本野は建築家としての資質形成期にあたる二〇代の時期に、当時勃興してきた近代運動やさまざまな前衛的な建築に現地に直接肌で触れる機会を持ち、その体験を建築家としての出発点にすることができたのである。また彼は、アール・ヌーヴ

オーゼツェツェション以降に起こつてきたヨーロッパの建築の動向を、現地で体験した最初の日本人建築家でもあった。なによりもこの体験こそが、その後の自邸にいたるまでの足跡を大きく決定づける因子となつた。

実際に、その影響は帰国直後から現われることとなり、処女作・西陣織物館（一九一四年）においては、一九〇〇年代半ばからユーゲント・シュティールを乗り越えていったペーレンスに大きな影響を受けた、面の分割が施されたパネルのような壁面や、還元的な立体によるマッスの組み合わせに現われているように、建築を幾何学的形態に抽象化していく手法を明確に打ち出すこととなった。ほぼ同時期の一九一五年に大正期独特のロマン主義の香り漂う豊多摩監獄が完成し、様式主義から離脱した新しい建築のありかたを希求する若い建築家たちの共感を大いに誘つたが、本野はまったくザツハリヒな方向性を強く自覚し、その真意が理解されることはなく、表現派への志向を持つ渦中からは孤立することとなった。

しかし、この時点での「孤立」は、その後の日本のモダニズムの行く手を暗示していた。一九二四年の自邸にてラディカルな実験が行なわれていたまさにそのとき、日本のモダンデザインは表現派全盛を迎えていたのであった。一九一〇年代前半よりモダンデザインのザツハリヒな志向を確認していた本野は、『エスプリ・ヌーヴォー』などにおいて刺激的なメッセージを発していたコルビュジエに

触発され、機能主義、合理主義を理念とする建築の実現を目指し、無装飾な幾何学形体を構成主義的なフォルムにまとめあげている。

このような手法的特徴は、当時のヨーロッパ・モダニズムの理念と位相的に共振した結果、現われてきたものであったが、初期の実現作品を検証するとき、その実現化においては、世界的に見て極めて早い反応であったといえよう。

こうした理念は、単に表面的なかたちのみに反映されるわけではなかった。例えば、平面計画においては、部屋どうしの機能的な関係性を考えたうえで、最も合理的に繋げることが意図され、結果として、廊下や階段といった居室以外の部分を最大限に切り詰めることを可能にしており、最小限住宅という同時代的テーマへの関心を伺うことができよう。

また、さらに注目すべきは、水平方向に拡がっていくような流動的なヴォリューム空間が実現されていることである。また、内外空間の相互貫入も意図されている。そこには、空間の抽象化ハ均質化への志向が読み取れ、当時ヨーロッパにて追求されていた近代建築の本質的テーマの共有を示唆している。この過程において興味深いのは、数寄屋の伝統への接近を通じて、そうした空間が獲得されていることである。即ち、数寄屋の中に発見された、水平方向に連続性をもって内部空間が繋げられていく方法に、モダニズムの空間の流動性をもたらす空間構成に通ずるものがあることを、見いだしたのであった。



本野邸外観

*註
 例えば、シトロアン型量産住宅の第一号・ウオクルソンの住宅（コルビュジエ）が一九三二年、ワイマール・パウハウス校長室（クロヒウス）が一九三三年、デ・ステイルの空間理論の建築化の嚆矢・シュレーダー邸（リートフェルト）が一九二四年である。



本野邸 1階 2階平面図



本野精吾 1882—1944

以上のような本野邸の極めて先鋭的な特徴も、トランスワールドな共時軸において浮かび上がってくるものだといってよい。まさに日本のモダニズムの先端部が、異なった歴史的文脈を辿りながらも、近代の問題の追求において、ヨーロッパの前衛とパラレルに位置するようになっていたということである。

当時、日本の建築界一般からは、その営為の近代的本質が理解されることはなく、しかるべくして表現派を中心とするモダンデザインの多数派からは孤立することになった。また実際、近代の空間概念などという問題について、少なからずの建築家が本格的に反応しはじめるのは、一九四〇年頃から戦後にかけてであった。

だからこそ逆に、そうした日本の近代に、西陣織物館より本野邸をへて一九三〇年代半ばまでの本野の一貫する軌跡が、後藤慶二を起点とする流れの裏で、抽象化・均質化への志向をもつもう一つの細くはあるが確固たる流れとして、通時軸上に存在していたことが、再検証される必要があるのではないかと思われるのである。



西陣織物館外観

編集後記

「マスハウジングの時代」とは最近よく耳にする言葉である。

さきの大戦後の二、三〇年は、戦禍からの復興だけでなく、多くの先進国では人口の都市集中のニーズにこたえるため、大量の住宅の建設が政策的にも推進された時代であった。それらは僅かの例外を除いて、より安く、より早く、より多くという供給側、あるいは生産側の論理のレールの上のつたものであり、四角い箱型の、あるいは冷たい板状の住宅の集合が、世界のいたるところで競って建てられた。

それから二〇年、今これらの住宅の見なおし、具体的には「改造」または「つくりなおし」の動きが大きな潮流となり、市場としての大きさは、新規の住宅建設の市場に迫ろうとしている国々も多いという。そこにいたる経緯は「失業者の増

大」「高齢化」「人種問題」さらには「バングラジウム」「犯罪の横行」等、多種多様であるにせよ、共通していることは「コミュニティの崩壊」による空洞化であり、その過程で、建築の形式そのものが住人の匿名性を助長しているのではないかという指摘からである。

建物の上層部を撤去してまでも行なわれている低層化への動き、廊下型から階段室型への移行、また、画一的な規格化された表情から個別住居の自己表現としてのデザインの重視の傾向は、何れも指向するところはコミュニティの復権にあるといえよう。

お互いに見知らぬ人びとが集って住むように宿命づけられた都市、そしてその中でも最も身近な住宅の集合。そのあるべき姿への模索が緒についたともいえる今日、コミュニティの問題を提起して、論議の進化とその成果の実現の一日も早くからんことを期待して、この号をおくる。

(本号責任編集 大坪昭)

住宅総合研究財団(略称「住総研」)

昭和二十三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮乏した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

以来四〇年余、現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「研究年報」「研究報告書」を発刊、また住に関する専門図書室、セミナー室等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業につとめております。

この「すまいろん」は、活動の一環として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様により広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行(季刊)されているものです。ご利用のほど、よろしくお願い申し上げます。

季刊 すまいろん 96年冬号

一九九六年一月二六日発行

頒価 500円

発行「財団法人 住宅総合研究財団
発行人 大坪 昭」

〒115 6 東京都世田谷区船橋4丁目29-8
電話(03) 3484-5381

編集委員

服部岑生(千葉大学建築学科教授)*

片山和俊(東京芸術大学建築科助教授)

小林秀樹(建設省建築研究所)

野城智也(武蔵工業大学建築学科助教授)

立松久昌(月刊「住宅建築」顧問)

* 委員長

制作「建築思潮研究所

印刷・製本「慶昌堂印刷株式会社